

# 牛の皮城跡・曾川2号遺跡

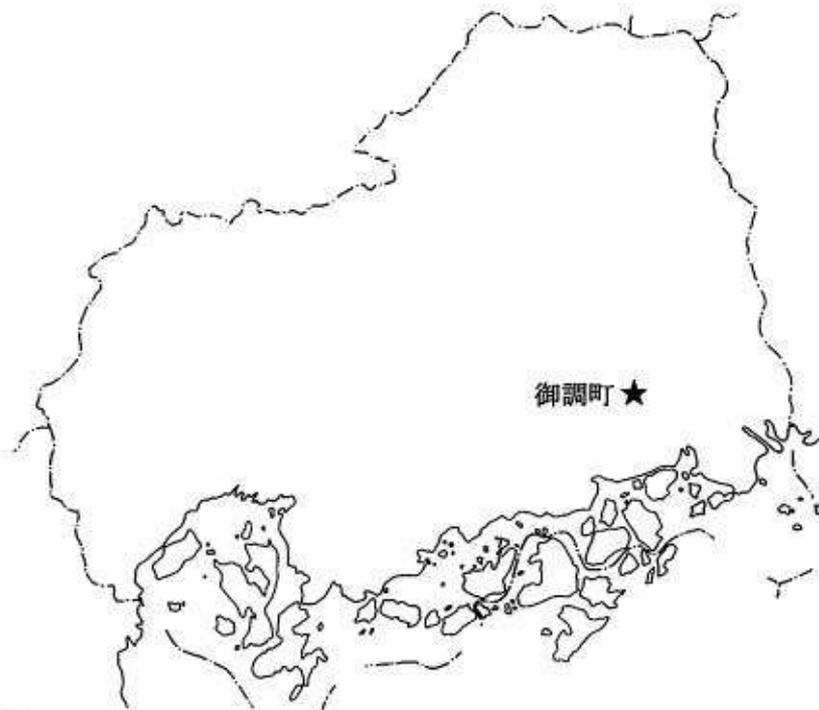
中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

2005

財団法人 広島県教育事業団

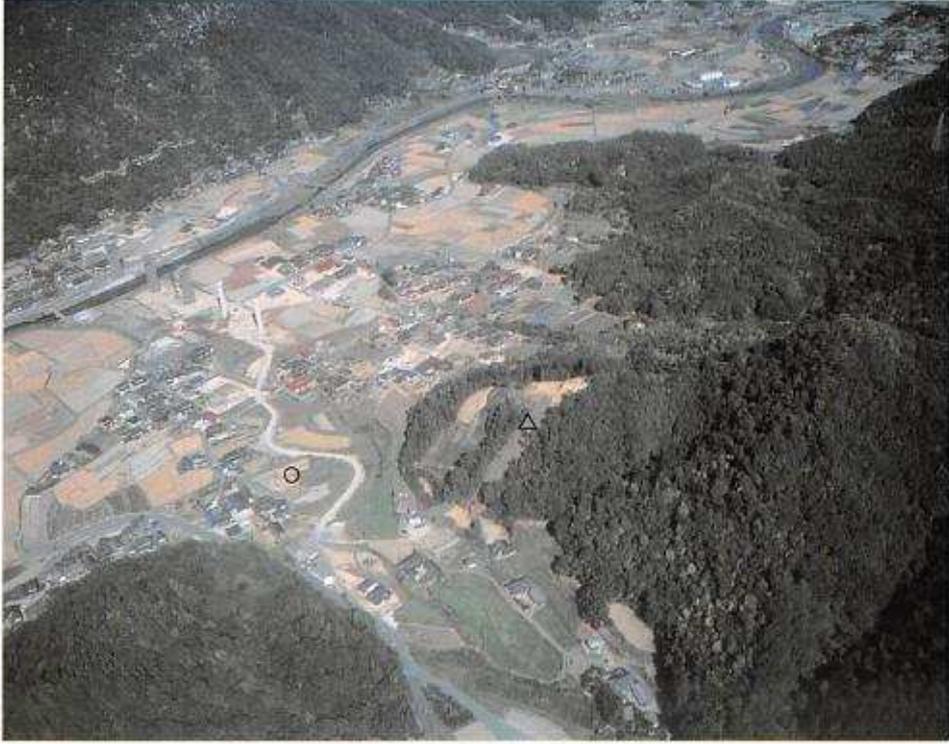
# 牛の皮城跡・曾川2号遺跡

中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)



2005

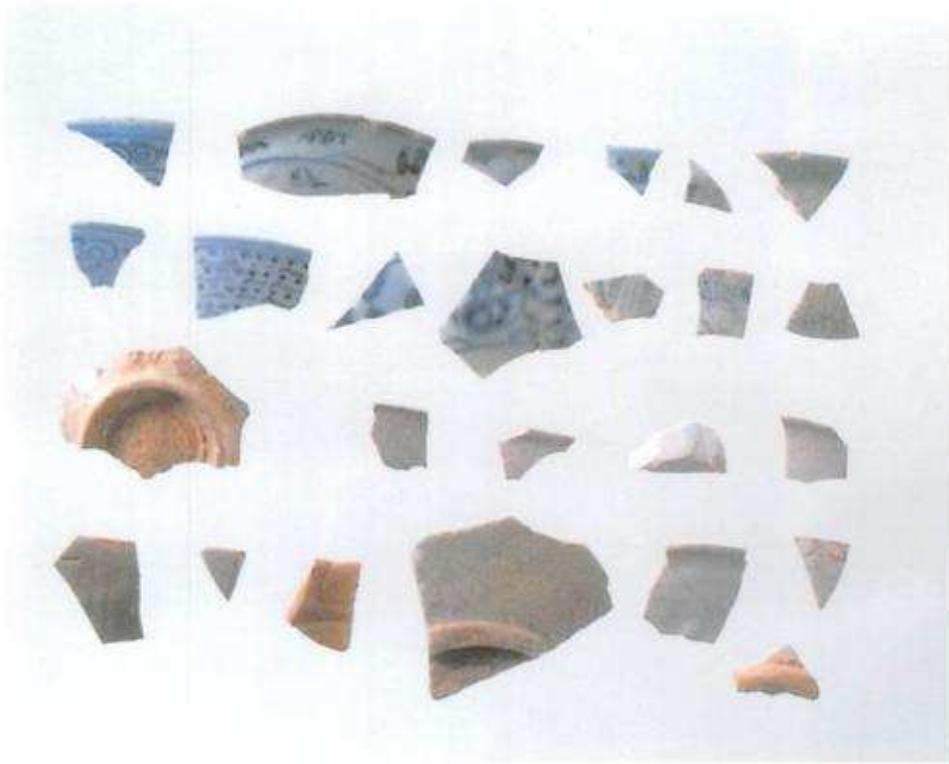
財団法人 広島県教育事業団



a 遺跡周辺空中写真 南上空から  
《○が曾川2号遺跡・△が牛の皮城跡（北郭群）》



b 牛の皮城跡空中写真 北西上空から



a 牛の皮城跡出土遺物（輸入磁器）



b 曾川2号遺跡SK01検出状況 北東から

## 例 言

- 1 本報告書は平成14(2002), 15(2003)年度に調査を実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る牛の皮城跡(尾道市御調町大町字二の丸7-1外)・曾川2号遺跡(同町大町字西川132番地1)の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査は日本道路公団中国支社との委託契約により平成14年度は財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施し, 平成15年度は平成15年4月1日に財団法人広島県埋蔵文化財調査センターの業務を引き継いだ財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。
- 3 発掘調査は次のものが担当した。

平成14年度 牛の皮城跡(畝状堅堀群)  
恵谷泰典(現・財団法人東広島市文化振興事業団文化財センター)  
唐口勉三(現・広島県立世羅高等学校)  
葉杖哲也(現・広島県教育委員会文化課)  
濱岡才二(現・安芸郡熊野町立熊野東中学校)

平成14年度 曾川2号遺跡  
青山 透・下津間康夫(現・府中市教育委員会)

平成15年度 牛の皮城跡(北郭群・西堅堀)  
青山・山田繁樹
- 4 出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は, 青山・伊藤実・沢元保夫・辻満久・古瀬裕子・山田が中心となって行った。
- 5 本書はIを青山, その他を古瀬が執筆し, 編集は青山・古瀬が行った。
- 6 曾川2号遺跡の出土遺物については広島県立歴史博物館の鈴木康之氏の御教示を受けた。
- 7 本書で使用した遺構の表示記号は次のとおりである。

S B:建物跡, S K:土坑, P:柱穴
- 8 図版と挿図の遺物番号は同じである。
- 9 第1図は国土地理院発行の1:25,000の地形図(府中・垣内・甲山・三成)を縮小して使用した。

## 目 次

I	はじめに	1
II	位置と環境	2
III	牛の皮城跡	
	1 調査の概要	7
	2 遺構と遺物	7
	3 まとめ	25
IV	曾川2号遺跡	
	1 調査の概要	28
	2 遺構と遺物	29
	3 まとめ	33

## 巻頭図版

- 巻頭図版1 a 遺跡周辺空中写真 南上空から  
b 牛の皮城跡空中写真 北西上空から
- 巻頭図版2 a 牛の皮城跡出土遺物（輸入磁器）  
b 曾川2号遺跡SK01検出状況 北東から

## 挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図 (1:50,000)	3
第2図	遺跡位置図及び周辺地形図 (1:3,000)	8
第3図	牛の皮城跡（北郭群）地形図 (1:700)	9
第4図	牛の皮城跡調査区遺構実測図 (1:300) 及び土壘土層図 (1:80)	10
第5図	牛の皮城跡（1郭～4郭・通路状遺構）土層図(1:80)	12
第6図	牛の皮城跡（畝状竪堀群）遺構実測図(1:200)	13
第7図	牛の皮城跡（畝状竪堀群）土層図 (1:80)	14
第8図	牛の皮城跡（西竪堀）遺構実測図 (1:200) 及び土層図 (1:80)	15
第9図	牛の皮城跡1郭出土遺物実測図 (1:3, 1:2)	16
第10図	牛の皮城跡2郭出土遺物実測図1 (1:3, 1:4)	18

第11図	牛の皮城跡2郭出土遺物実測図2 (1:2) .....	20
第12図	牛の皮城跡3郭出土遺物実測図 (1:3, 1:2) .....	22
第13図	牛の皮城跡3郭・畝状竪堀群・西竪堀出土遺物実測図 (1:3, 1:2, 1:1) .....	24
第14図	曾川2号遺跡遺構配置図 (1:200) .....	28
第15図	曾川2号遺跡S B 0 1実測図 (1:40) .....	29
第16図	曾川2号遺跡S K 0 1実測図 (1:30) .....	30
第17図	曾川2号遺跡P 7実測図 (1:30) .....	30
第18図	曾川2号遺跡S K 0 1・P 7出土遺物実測図 (1:3) .....	31
第19図	曾川2号遺跡調査区出土遺物実測図 (1:3) .....	32

## 図版目次

図版 1	a 牛の皮城跡遠景 (西から)	b 竪堀と横堀 (東から)
	b 同上 (北西から)	c 竪堀3堀底状況 (南西から)
	c 同上 (北北西から)	図版 9
図版 2	a 1郭調査前 (北西から)	a 横堀土層堆積状況 (南から)
	b 2郭調査前 (南西から)	b 竪堀2土層堆積状況 (北西から)
	c 3郭調査前 (南東から)	c 竪堀3土層堆積状況 (北西から)
図版 3	a 1郭調査後 (北西から)	d 竪堀4土層堆積状況 (北西から)
	b 1-2郭調査後 (東から)	e 竪堀5土層堆積状況 (北西から)
	c 2郭調査後 (南東から)	f 竪堀6土層堆積状況 (北西から)
図版 4	a 3郭調査後 (東から)	g 竪堀7土層堆積状況 (北西から)
	b 2郭切岸 (北西から)	h 竪堀8土層堆積状況 (北西から)
	c 3郭切岸 (北西から)	図版 10
図版 5	a 2郭土錘出土状況 (北から)	a 竪堀5調査後 (北西から)
	b 2郭備前焼破片出土状況 (北から)	b 調査風景 (南から)
	c 2郭鉄釘出土状況 (北から)	c 同上 (南から)
図版 6	a 2郭通路状遺構 (北から)	図版 11
	b 土墨検出状況 (北から)	a 西竪堀近景 (北西から)
	c 遺跡見学会	b 西竪堀調査前 (南西から)
図版 7	a 畝状竪堀群全景 (西から)	c 同上調査後 (南東から)
	b 畝状竪堀群全景 (東上空から)	図版 12
	c 竪堀3~7調査後 (東から)	a 西竪堀土層堆積状況 (北西から)
図版 8	a 竪堀7~9調査後 (北東から)	b 同上 (南西から)
		c 牛の皮城跡近景 (北北西から)
		図版 13
		a 1郭出土遺物 (土師質土器)
		図版 14
		a 1郭出土遺物 (鉄製品)
		図版 15
		a 2郭出土遺物 (土師質土器)

図版16	2 郭出土遺物 (すり鉢等)	図版24	a 曾川 2 号遺跡調査前遠景 (南東から)
図版17	2 郭出土遺物 (金属製品 1)		b 調査後遠景 (南東から)
図版18	a 2 郭出土遺物 (金属製品 2)		c 調査区全景 (東から)
	b 2 郭出土遺物 (土製品・石製品)	図版25	a S B 0 1 調査後 (北から)
図版19	1 ~ 3 郭・畝状竪堀群出土遺物 (輸入磁器等)		b 調査区南端壁面 (北西から)
図版20	a 2・3 郭出土遺物 (国産陶器)		c P 7 検出状況 (南から)
	b 3 郭出土遺物 (土師質土器 1)	図版26	a S K 0 1 検出状況 (北東から)
図版21	3 郭出土遺物 (土師質土器 2)		b S K 0 1 調査後 (北から)
図版22	3 郭出土遺物 (すり鉢等)		c 調査区土器出土状況 (北西から)
図版23	a 3 郭出土遺物 (鉄製品)	図版27	曾川 2 号遺跡出土遺物 1
	b 3 郭・畝状竪堀群・西竪堀出土遺物	図版28	曾川 2 号遺跡出土遺物 2

## 表 目 次

第 1 表	牛の皮城跡出土金属製品計測表 .....	24
-------	----------------------	----

# I はじめに

中国横断自動車道尾道松江線は本州四国連絡道路尾道今治ルート（瀬戸内しまなみ海道）と一体となって、山陰、山陽及び四国地方を南北に結ぶ地域連携構想を推進し、この圏域の産業、経済、文化の発展と沿線地域の生活向上に寄与する路線として期待されている。

こうした中、平成11（1999）年7月、中国横断自動車道の予定路線内の文化財等の有無及び取り扱いについて日本道路公団中国支社尾道工事事務所（以下「道路公団」）から広島県教育委員会（以下「県教委」）へ協議、照会があった。

予定路線内には多くの埋蔵文化財の存在が予想され、県教委の踏査及び試掘調査の結果、この尾道市（旧御調郡）御調町分の予定路線範囲については曾川1号遺跡、曾川2号遺跡、城根遺跡、牛の皮城跡の存在が明らかとなった。県教委はこれらの遺跡等について現状保存できない遺跡等については発掘調査が必要の旨道路公団に対し回答し、これを受けて道路公団は平成14年度7月から、工事の優先する箇所ごとに文化財保護法第57条の3に基づく埋蔵文化財発掘の通知を県教委に順次提出し、発掘調査の実施を平成14年9月以降財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室（平成15年4月より財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」）の業務を引き継いだ財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室（以下「事業団」）に順次依頼している。

中国横断自動車道尾道松江線にかかる埋蔵文化財の発掘調査は広島県においては平成14年度から始まり、事業の進捗状況の比較的進んでいる尾道市御調町・木之庄町域について着手している。平成14年度には、御調町域の曾川1号遺跡（一部）、曾川2号遺跡、城根遺跡、牛の皮城跡（一部）、平成15年度には曾川1号遺跡（一部）、牛の皮城跡（一部）、平成16年度は曾川1号遺跡（一部）、木之庄町域では、家ノ城跡（一部）を実施している。

本書は平成14、15年度にセンター及び事業団が道路公団と委託契約し、発掘調査を実施した牛の皮城跡・曾川2号遺跡の調査成果をまとめたものである。曾川2号遺跡の調査は平成15年1月20日～3月7日、牛の皮城跡（畝状竪堀群）は平成15年1月20日～3月14日、牛の皮城跡（郭群）は平成15年7月7日～10月31日、牛の皮城跡（西竪堀）は平成15年11月10日～11月28日にそれぞれ実施した。調査の期間中、平成15年10月18日に牛の皮城跡の現地遺跡見学会を開催し約100名の参加があった。これらの遺跡の周辺は今後においても曾川1号遺跡など、遺跡の発掘調査が進行しつつある状況であり、弥生時代後期を中心としたこの地域の全体像が明らかになりつつある。牛の皮城跡、曾川2号遺跡の調査はほぼ終了し全体像があきらかになったことから尾道松江線に係る発掘調査報告の第1冊目としてまとめることとしたものである。今後の埋蔵文化財の資料として、また、当該地域の歴史の一端を知る助けとなれば幸いである。

なお、発掘調査にあたっては、日本道路公団中国支社尾道工事事務所、旧御調町教育委員会及び地元の方々から多大なるご協力を得た。記して感謝の意を表します。

## Ⅱ 位置と環境

牛の皮城跡及び曾川2号遺跡は、御調郡御調町大字大町に所在する。

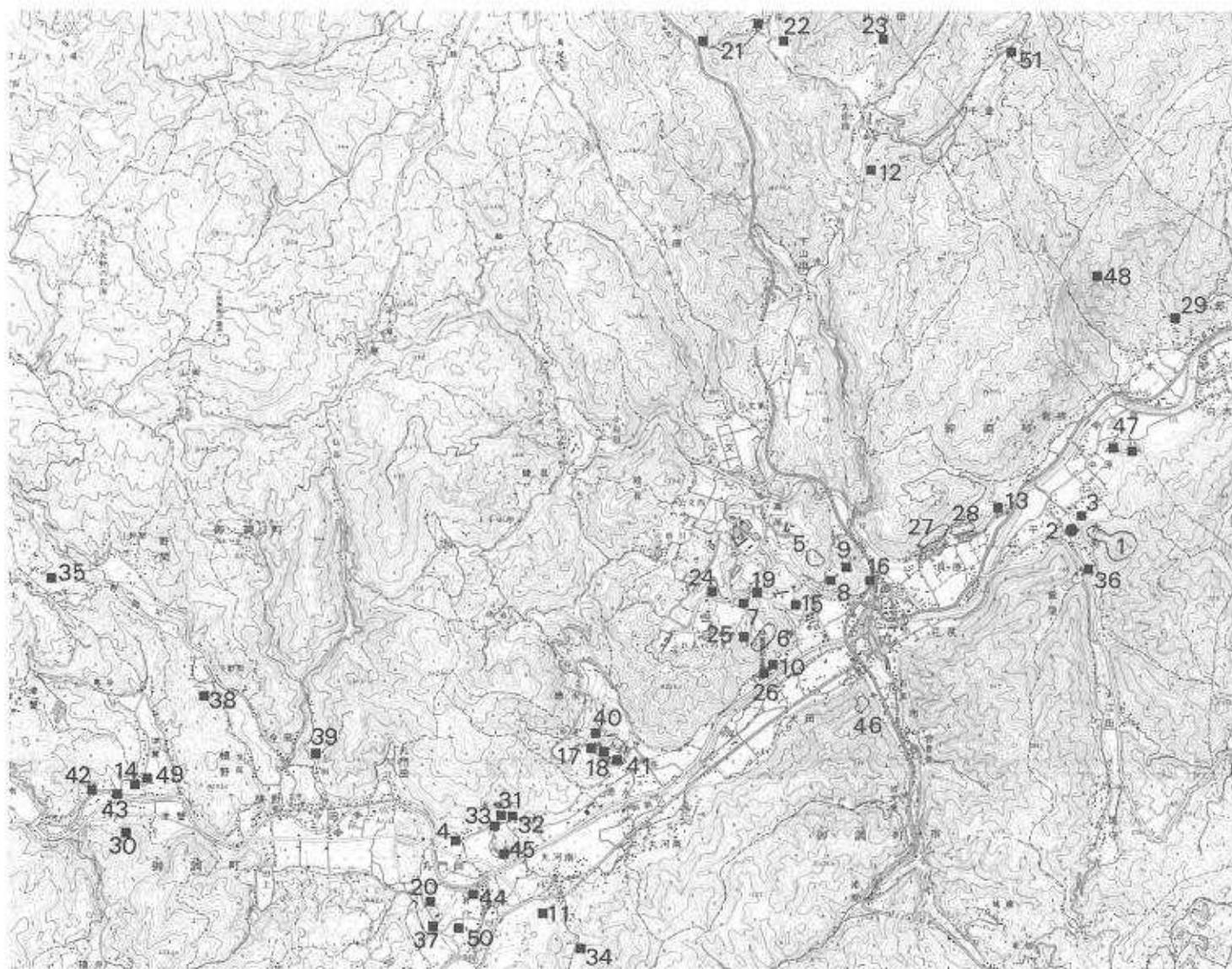
御調町は県の東南部に位置し、東は府中市・福山市、西は御調郡久井町、北は世羅郡世羅町、南を三原市・尾道市と接している。町の北西側は宇根山から延びる標高300～600mの、南東側は木頃山系の300～400mの山々が連なり、町域の南西から北東に横断する芦田川の支流御調川とその支流の小河川が形成した平坦地・谷部に集落が形成されている。

町内の東西には御調川に沿って古代山陽道がとおり、南北には高野山領大田荘と倉敷地である尾道とを結び、さらには石見銀山と尾道を結んだ石州街道がとおる。この二つの街道が交わるころが市街地の市である。このように御調町は古くから交通の要衝であり、本郷平廃寺をはじめ多くの遺跡が存在する。

**旧石器時代～縄文時代** 町内では旧石器時代の遺跡は確認されていないが、芦田川下流域の福山市新市町の宮脇遺跡では細石器が出土しており、早くから人びとが生活していたことがうかがわれることから、御調町内でもこの時代に人々が生活していたことは十分考えられる。縄文時代では、御調川南側で、曾川2号遺跡の北東に位置する大町の曾川1号遺跡<sup>11)</sup>の平成15(2003)年度の調査で後期前半から中頃の土器がまとまって出土したが、今のところ遺構は確認されていない。同遺跡の今後の調査で当該時期の遺構検出が期待される。

**弥生時代** 弥生時代になると、御調川北岸を中心に、弥生土器や磨製石斧が採集された遺跡が数多く存在する。しかし調査例は少なく、丸門田の本郷平廃寺の調査によって中期の土器が出土している<sup>12)</sup>ほかは各所で採集された土器は後期のものがほとんどでこれらの遺跡の概要は明らかでない。高尾の高尾1・2号遺跡、高尾西遺跡、土木屋遺跡、神の後口山遺跡、丸河南の大慶寺遺跡、大山田の後呂谷遺跡などである。前述の曾川1号遺跡では、弥生時代後期～終末期の円形や隅丸方形の竪穴住居跡や土器棺墓を検出し、この時期には集落が形成されていたことをうかがわせる。曾川1・2号遺跡と御調川を挟んだ北側の低丘陵上の貝ヶ原の貝ヶ原遺跡<sup>13)</sup>では古式の特殊器台が出土している。土取り工事の際単独で出土したもので、付近で墳丘墓は確認されていない。しかし、特殊器台は吉備を中心とする地域で墳丘墓での祭祀に用いられたもので、御調川流域でも墳丘墓に葬られる有力な首長が現れたことを示している。

**古墳時代** 古墳時代になると、数多くの古墳が確認されているが調査例は少ない。古墳は、御調川の北側で多く確認されている。交通の要衝である市周辺では埋葬主体が箱形石棺をもつ古墳と横穴式石室をもつ古墳が混在しているが、その他の地域では横穴式石室をもつ古墳がほとんどである。津蟹の天神山第2号古墳は竪穴式石室をもつ。箱形石棺を埋葬主体とする古墳は、高尾の高尾第1号古墳、高尾西第3・4号古墳、市の後口山古墳、徳永の高神古墳群、正尺山古墳群、丸門田の明神山第4号古墳などがあり、横穴式石室を埋葬主体とする古墳は、大山田の梅ノ木古墳群、小猿古墳、中倉谷古墳、綾目の七ツ塚古墳群、高尾の高尾西第1・2号古墳、神古墳群、神



- 1 牛の皮城跡
- 2 曾川2号遺跡
- 3 曾川1号遺跡
- 4 本郷平座寺跡
- 5 高尾1号遺跡
- 6 高尾2号遺跡
- 7 高尾西遺跡
- 8 土木屋遺跡
- 9 後口山遺跡
- 10 神西遺跡
- 11 大慶寺遺跡
- 12 後呂谷遺跡
- 13 貝ヶ原遺跡
- 14 天神山古墳群
- 15 高尾古墳群
- 16 後口山古墳
- 17 高神古墳群
- 18 正尺山古墳群
- 19 高尾西古墳群
- 20 明神山古墳群
- 21 梅ノ木古墳群
- 22 小猿古墳
- 23 中倉谷古墳
- 24 セツ塚古墳群
- 25 神古墳群
- 26 神西古墳群
- 27 貝ヶ原古墳群
- 28 ムカデ岩山古墳群
- 29 河崎古墳
- 30 要谷山古墳
- 31 城の東古墳
- 32 市山古墳群
- 33 東中倉古墳群
- 34 大羽谷古墳群
- 35 隠れ迫築跡
- 36 城根遺跡
- 37 合山火葬墓
- 38 末近城跡
- 39 上田城跡
- 40 福元山城跡
- 41 正尺山城跡
- 42 福丸城跡
- 43 丸山城跡 (津蟹城跡)
- 44 峠山城跡
- 45 丸山城跡 (勝場山城跡)
- 46 雲雀城跡
- 47 古城跡
- 48 古城跡
- 49 天神遺跡
- 50 明神沖遺跡
- 51 上千堂遺跡

第1図 周辺遺跡分布図 (1:50,000)

の神西古墳群、貝ヶ原の貝ヶ原古墳群、ムカデ岩山口古墳群、本の河崎古墳、津蟹の要谷山古墳、丸門田の城の東古墳、市山古墳群、東中倉古墳群、丸河南の大羽谷古墳群などがある。

これらの古墳を生み出した集落については調査例が少なく明らかにしがたいが、曾川1号遺跡では前半期や後期の方形の竪穴式住居跡や溝を検出した。また、御調町から久井町にかけては須恵器の生産地である御調古窯跡群として知られている。津蟹で隠れ迫窯跡や切堤第1号窯跡など須恵器の窯跡が確認されており、古墳築造の背景として考えられよう。

調査された古墳としては、昭和45（1970）年に調査された高尾第1号古墳<sup>(4)</sup>と後口山古墳<sup>(5)</sup>がある。高尾第1号古墳は、直径が13.5m、高さが1.5～2.0mで埋葬主体が箱式石棺の円墳である。箱式石棺の蓋石や側石の内側に赤色顔料が塗られ、人骨が残っていた。遺物は出土していない。後口山古墳では、埋葬主体の箱式石棺には板石が敷かれ、人骨と碧玉製の管玉4点とガラス小玉3点が出土した。両古墳とも5世紀末前後の築造と考えられる。

なお、曾川2号遺跡の南側に位置する大町の城根遺跡では平成14年度の調査で、箱形石棺2基が検出されている。遺物が出土しなかったので時期は不明確であるが、古墳時代の可能性がある。

**古代** 古代の遺跡としては、昭和60～63年度に本郷平廃寺<sup>(6)</sup>が調査されている。調査の結果、7世紀末に創建された備後南部地域でもっとも古い寺院のひとつであることがわかった。塔と金堂を南北に配した四天王寺式に類似した伽藍配置をもち、寺域は1町四方と想定されている。出土した瓦は大和の石川寺跡から出土した瓦に似ている。瓦のほかに正六角形に復元できる磚や螺髪が出土した。磚の片面は畳表、片面には同心円の叩き目の痕がある。古代山陽道は備後国府があったとされている現府中市から御調川沿いに西進して御調町市に至り、安芸国へ向かう。本郷平廃寺は備後国と安芸国との境界地点に位置し、また、国府から備後北部へ向かう交通の要衝に造られており、中央政権との密接な関係が注目される。そのほか須恵器の骨蔵器を納めた丸門田の合山火葬墓や、瓦が出土した津蟹の切堤窯跡群がある。

古代においては現在の御調町域は備後国御調郡にあたる。本郷平廃寺付近には御調郡衙が置かれていたのではと推定されているが、現在のところ確認されていない。また、古代山陽道の「者度駅」が市付近に存在したと考えられている。

**中世以降** 中世になると、この地域は現在の世羅郡世羅町を中心とした地域に所在した高野山領大田庄とその倉敷地である尾道とを結ぶ南北の交通路となり、近世の石州街道へと発展していく。また山陽道も御調川沿いを東西にとおっているため、交通の要衝として栄えた。

備後国は、山名氏が長く守護を務めたため、応仁元（1467）年に始まった応仁の乱に無関係ではなく、山名持豊の西軍、山名是豊の東軍の双方に分かれて戦った。概ね備後南部の外郡と呼ばれた深津・安那・品治・沼隈・御調・葦田・世羅の国人衆は東軍に、内郡と呼ばれた甲奴・神石・奴可・恵蘇・三次・三谷・三上の国人衆は西軍に属した。応仁の乱が終結した後、備後は山名政豊が父持豊から守護を譲り受けた。しかし、政豊が長享2（1488）年に赤松氏に敗れたことや、明応2（1493）年に細川政元が十代將軍足利義材を將軍の座から降ろし、足利義澄を十一代將軍に就けたことにより、政豊とその子俊豊の父子の争いが始まる。戦いは明応8年に政豊が亡くなる

まで続いた。備後の守護が山名氏であったため備後の国人達も両軍に分かれて戦った。明応4年から7年にかけて芸備国境<sup>(7)</sup>、高口・山内(庄原市か)<sup>(8)</sup>、吉原上口(世羅町・豊栄町)<sup>(9)</sup>、津田(世羅町)<sup>(10)</sup>、領家(総領町)<sup>(11)</sup>など備後各地で両軍が戦っている。

その後明応8年に政豊が亡くなり跡を継いだ致豊は但馬に留まったため、備後への影響力は弱まり、替わって北の尼子氏、西の大内氏の勢力が進出することとなるが、最終的にこの地域は毛利氏の領国に編入される。

明応2年5月に山名俊豊が山内刑部四郎通久に「御調郡内之内三吉敷名跡七拾貫文、三吉森光跡貳拾貫文、三吉池上跡貳拾五貫文」の所領を与えるとの文書を送っている<sup>(12)</sup>ことから、このときまでに三吉氏が御調郡内に所領をもっていたこと、政豊方についていたことがわかる。三吉氏は、近江国から来住した地頭で、鎌倉・室町時代を通じて勢力を伸ばし、応仁の乱や山名父子の戦いの間に、南下して世羅・御調に勢力を拡大したと思われる。

この後、このあたりは毛利氏の支配下に入るが、文禄3(1594)年の毛利輝元知行宛行状によると林志摩守元善に御調郡守光氏の旧領が宛行われている<sup>(13)</sup>ことから森光(守光)氏の勢力は、この後この地域から失われたと思われる。

中世の遺跡としては、山城跡では植野の末近城跡、今田の上田城跡、徳永の福元山城跡、正尺山城跡、市の雲雀城跡、大町の牛の皮城跡、大塔の撰場城跡、津蟹の福丸城跡、丸山城跡(津蟹城跡)、丸門田の丸山城跡(勝場山城跡)、峠山城跡などがあり、末近城跡<sup>(14)</sup>と牛の皮城跡で発掘調査が行なわれている。また、上田城跡及び福丸城跡で牛の皮城跡と同様の畝状堅堀がみられる。

末近城跡は、平成13(2001)年に調査された御調川の支流野間川を臨む丘陵上に位置する小規模な城跡である。調査の結果、領主の支配拠点というより「村の城」として築かれた可能性が高く、また、城内から11基の墓坑が検出され、戦国時代には城跡が墓地に転換されたと考えられる。

牛の皮城跡は南北の郭群からなり、北郭群を平成14・15(2002・2003)年度に調査した。北西側に14本の畝状堅堀、東側に9本の畝状堅堀、南東側に堀切2本、西側に堅堀1本を配置している。

城跡以外の中世の遺跡として、土師質土器が出土した津蟹の天神遺跡、丸門田の明神沖遺跡や平成8年に調査された千堂の上千堂遺跡<sup>(15)</sup>がある。上千堂遺跡では掘立柱建物跡が1棟検出されたが、詳細な時期は不明である。

## 註

- (1) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター(当事業団の前身)が平成14年度に、当事業団が平成15・16年度に調査している。
- (2) 川越哲志「本郷平麿寺跡出土の弥生土器」広島県御調町教育委員会【本郷平麿寺】1989年
- (3) 潮見 浩「貝ヶ原遺跡出土の特殊器台形土器」広島県教育委員会【広島県文化財調査報告】第17集 1991年
- (4) 御調町教育委員会【御調郡御調町高尾古墳発掘調査報告 付 御調町後口山古墳発掘調査概報】1971年

- (5) 註(4)に同じ
- (6) 広島県御調町教育委員会『本郷平麿寺』 1989年
- (7) 萩藩閥閥録 卷93 井上右衛門3
- (8) 萩藩閥閥録 卷120 羽仁彦左衛門3, 卷19 兒玉四郎兵衛1, 卷120 羽仁彦左衛門2
- (9) 萩藩閥閥録 卷72 中村長十郎12
- (10) 萩藩閥閥録 卷16 志道太郎右衛門63
- (11) 萩藩閥閥録 卷89 田總惣左衛門18
- (12) 山内家文書544
- (13) 萩藩閥閥録 卷91 林平八5
- (14) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『末近城跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第201集  
2002年
- (15) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『上千堂遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第153  
集 1997年

#### 参考文献

- 【広島県の地名】日本歴史地名体系35巻 平凡社 1982年
- 【角川地名大辞典】34広島県 角川書店 1987年
- 【広島県史】中世 広島県 1984年
- 【福山市史】上巻 株式会社国書刊行会 1983年

### Ⅲ 牛の皮城跡

#### 1 調査の概要(第2, 3図)

牛の皮城跡(北郭群)は尾道市御調町大町字二の丸に所在する。城跡は御調川を北西に臨む標高200m前後の丘陵部に立地し、北郭群、南郭群(本城跡)に分かれている。発掘調査の対象は北郭群で、平成14年度に北西側の畝状堅堀群1,500㎡の、平成15年度には北郭群の郭部分とその西側に存在する堅堀(西堅堀)合わせて2,460㎡の調査を実施した。

郭群は、東側最高所(標高約166m)から西部(標高約145m)にかけて連続する大小5段の平坦部で、高所側から1郭、2郭、3郭、4郭、5郭で構成される。今回は1郭の約半分と2~4郭を調査した。

各郭で建物跡等の存在を想定したが柱穴等は確認できなかった。また1郭の東南部が調査対象外であったため、その全容はつかめていない。遺物は1~3郭で土師質土器皿片多数、陶磁器類約60点、鉄釘片約120点、小札片10点などが出土した。

北郭群の北西側及び東斜面では調査前から畝状堅堀群が観察されていた。調査では、北西側の傾斜角35~45°の斜面で9条の堅堀とそれらの上端部を結ぶ横堀を検出した。遺物は青磁片1点、鉄製錐が1点出土した。なお、調査対象ではなかったが北西斜面にはこのほか5条の畝状堅堀が観察され、合計14条の畝状堅堀が配置されている、また東側には9条の畝状堅堀群が存在する。

西堅堀は、北郭群の西側切岸部傾斜角度約40°の斜面部に単独で存在する。遺物は楔状鉄製品が1点出土している。

#### 2 遺構と遺物

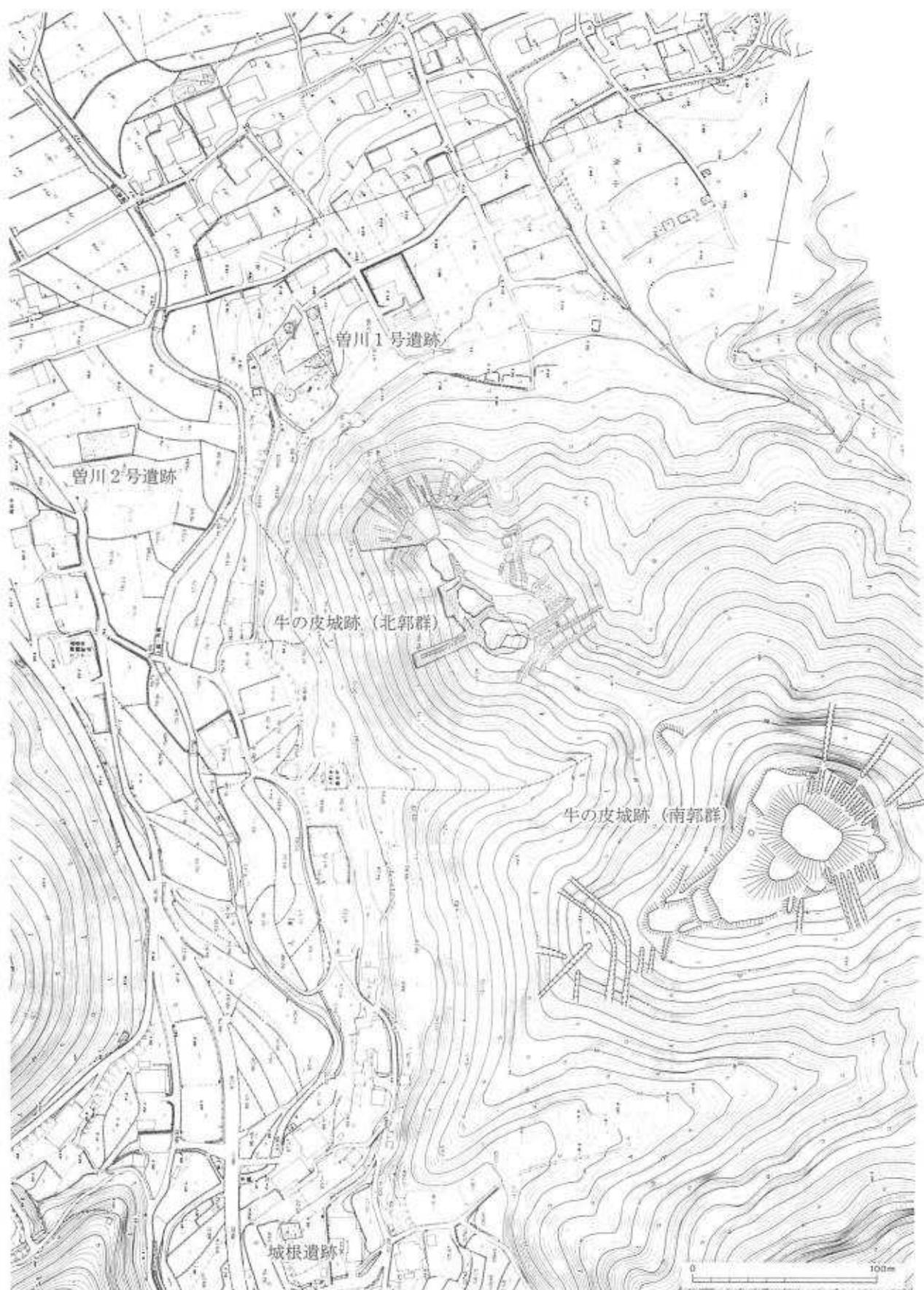
##### 遺構

調査は北郭群の1郭から4郭、北西側の畝状堅堀群の一部及び2郭と3郭の中間地点から西南側斜面にある堅堀(西堅堀)で行った。

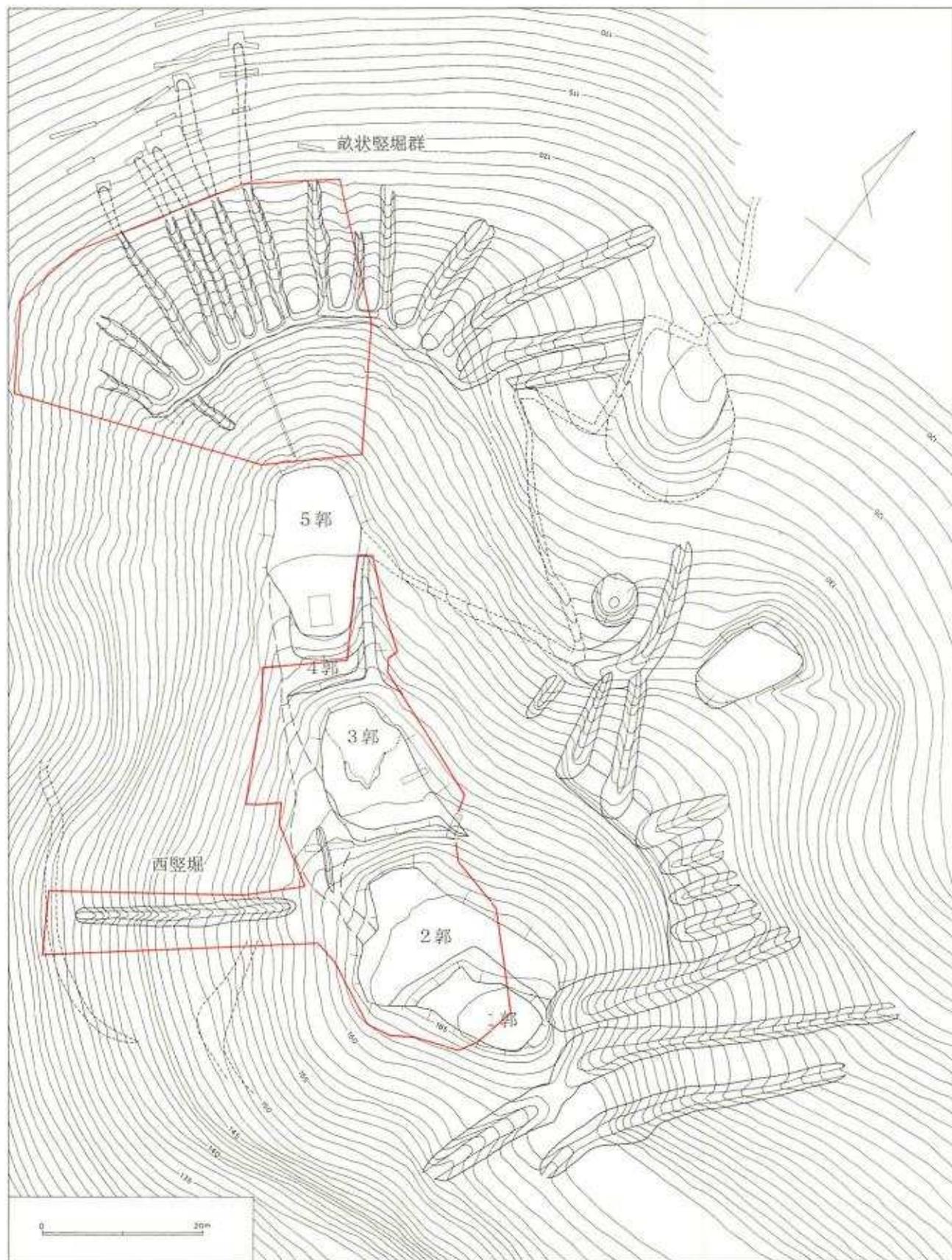
##### 1郭(第4・5図, 図版2・3)

北郭群の最高所に位置する。形状は東西約4m×南北約12m、高さ約1.5mの長方形の台状を呈している。調査は北西側の約半分を行った。郭の東隅から北東方向に下る堅堀が、背後の3m下方には尾根を横断する堀切がある。

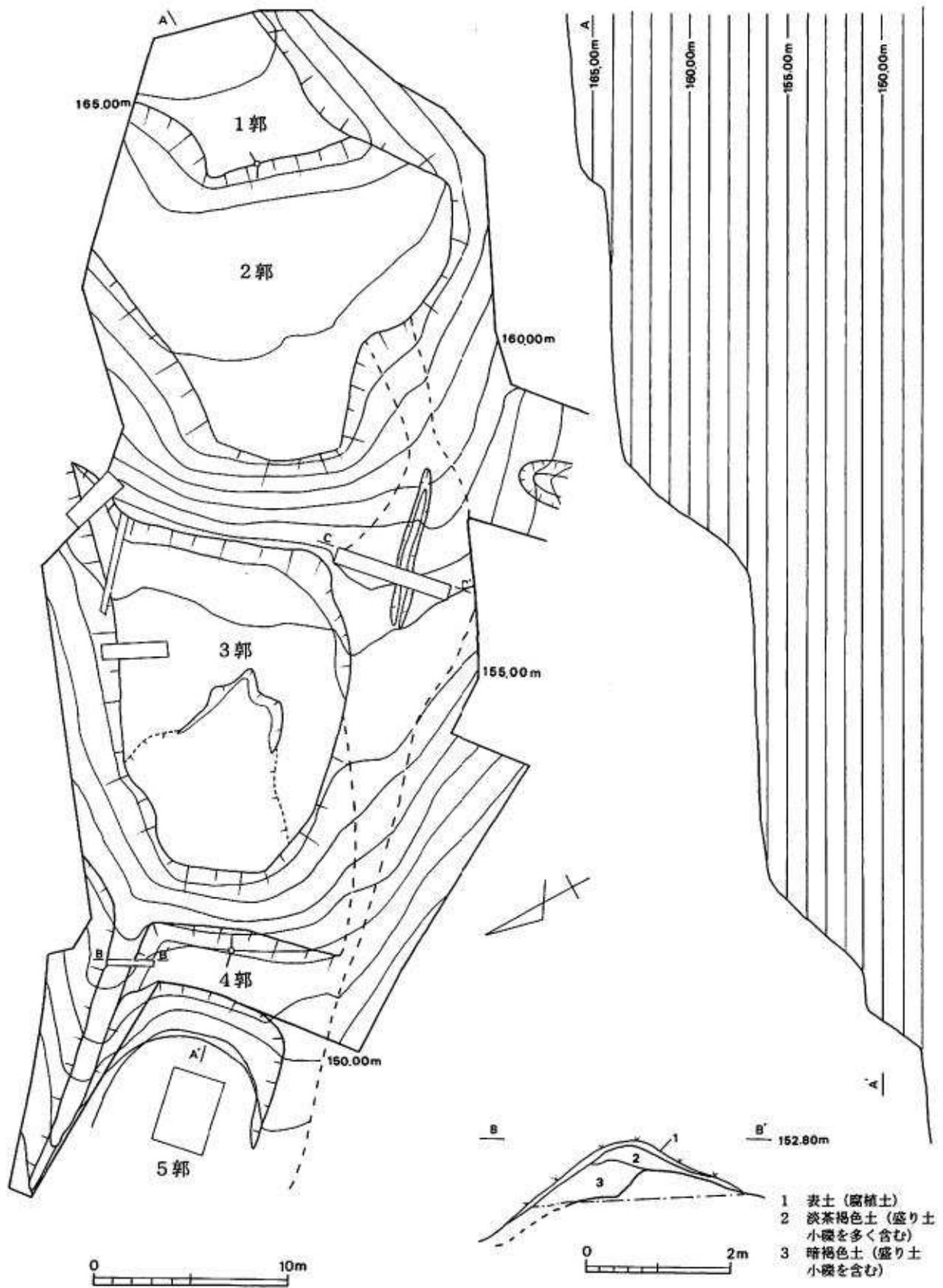
1郭は北郭群中では4郭に次いで狭いが、最高所に位置することから西から北東側の眺望は良好であり、見張り台としての可能性も想定したが、調査区内では柱穴等の存在は確認できなかった。郭の北隅部分の傾斜が緩く2郭からの登り口と考えられる。郭は旧地形を削り出し、平坦面を成形している。第2層の下層が遺構面となるが、この面から土師質土器皿片多数、鉄釘など鉄製品約10点、陶磁器片2点などが出土した。



第2図 遺跡位置図及び周辺地形図 (1:3,000)



第3図 牛の皮城跡（北郭群）地形図（1:700）  
赤は調査区



第4図 牛の皮城跡調査区遺構実測図 (1:300) 及び土壘土層図 (1:80)

## 2郭(第4・5図, 図版2~6)

北郭群では最も広い平坦部を有する。東西約20m×南北約15mの多角形を呈する平坦部を南側は切土、北側は埋土で造成している。東側は1郭を囲うよう郭が延びている。北側は傾斜角度45°の切岸をつくり3郭との高低差は約7mである。3郭との連結部で西側は浅い溝状の掘り込みが認められ、郭をつなぐ通路の役割を持っていると考えられる。遺構面は第2層の下層であるが、礎石や柱穴等の遺構は確認できなかった。遺物の分布状況からも建物跡の位置を示す様子は窺えなかった。釘が多数出土していることから釘を使った簡易的な建物であった可能性があるが、規模や構造は不明である。第2層下層から土師質土器皿片多数、鉄釘片約70点、小札片9点、陶磁器類片約40点等、生活関連遺物は各郭中最も多く出土している。

## 3郭(第4・5図, 図版2, 4)

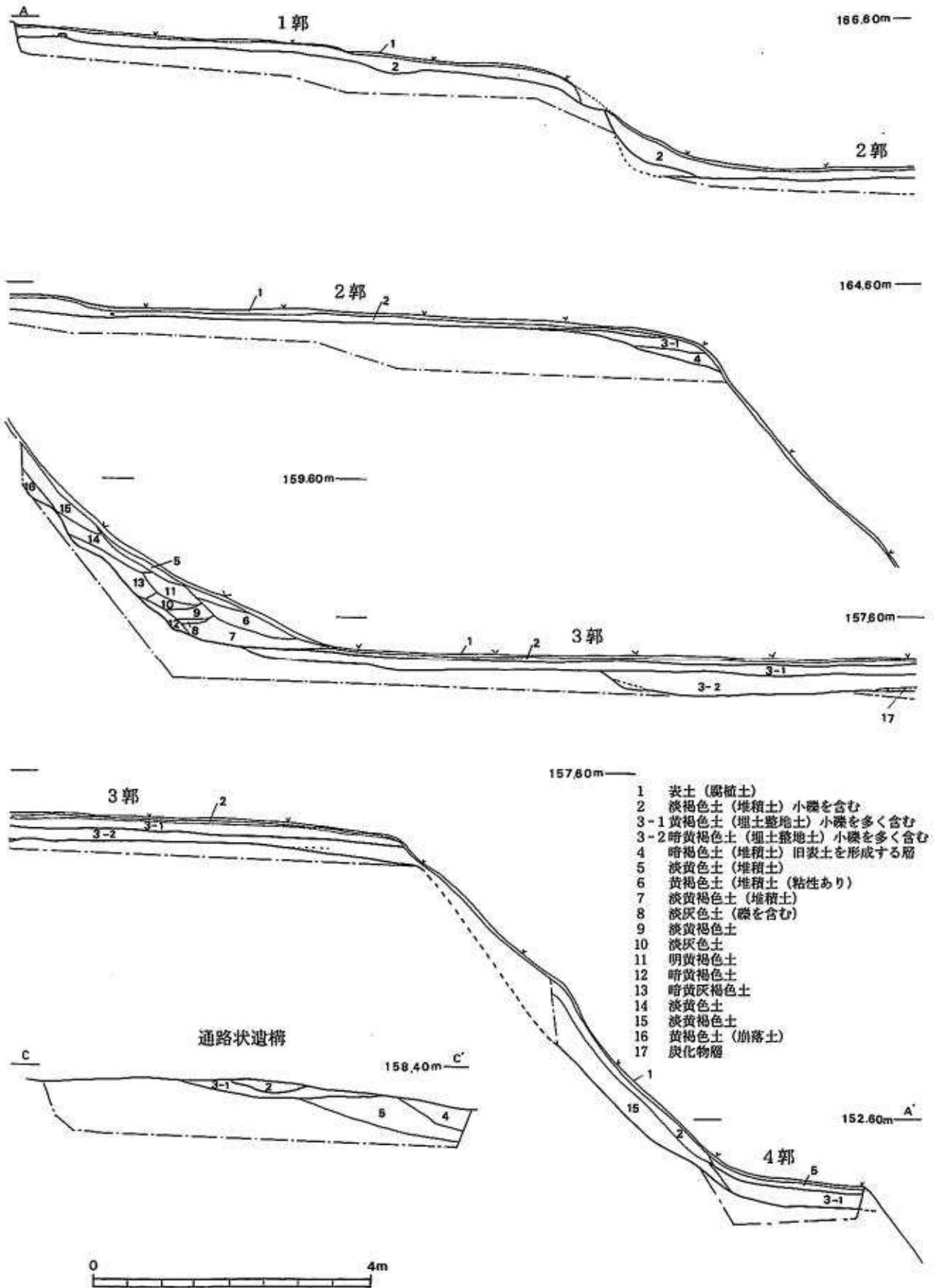
北郭群のほぼ中央に位置する。東西約20m×南北約15mの台形を呈する平坦部を南側は切土、北側は埋土で造成している。北側は傾斜角度45°の切岸をつくり4郭との高低差は約5mである。平坦部の遺構面は2層下部、3-1層下部、3-2層下部(不整形の大きい落ち込み)の3面あるが、3-1層・3-2層出土の土師質土器皿が接合したことからこの2面は時期差はないと考えられる。3-1層下部面は3郭の北西端から南東側へ12m程度平坦面を形成している。上部面は下部面を約20cm盛土して整地し2郭側へさらに約3m程度拡張したものである。遺物は2層下部からのものが大半で、土師質土器皿片多数、鉄釘片約50点、小札片1点、陶磁器類片16点などが出土している。建物跡等の存在を想定したが柱穴等は確認できなかった。

## 4郭(第4・5図, 図版6)

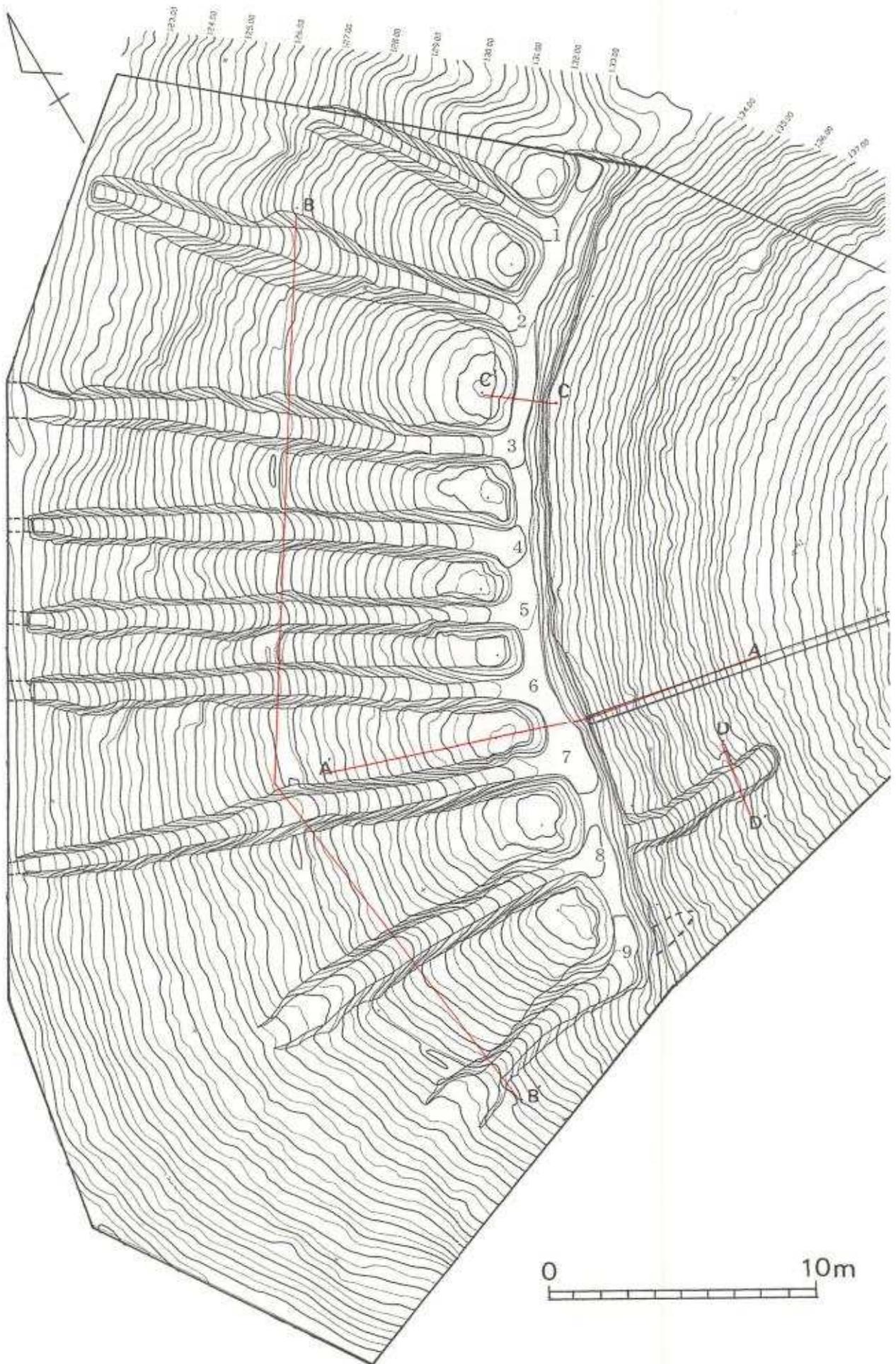
東側に土塁を有する幅2m程度の狭い通路状の郭である。土塁は3郭の切岸東端部から発生し、5郭の東側に約15m延びる。土塁の高さは4郭の内郭部で約0.7mであるが、東側の外郭部での見かけの高さは高く感じられる。

## 畝状堅堀群(第6・7図, 図版7~10)

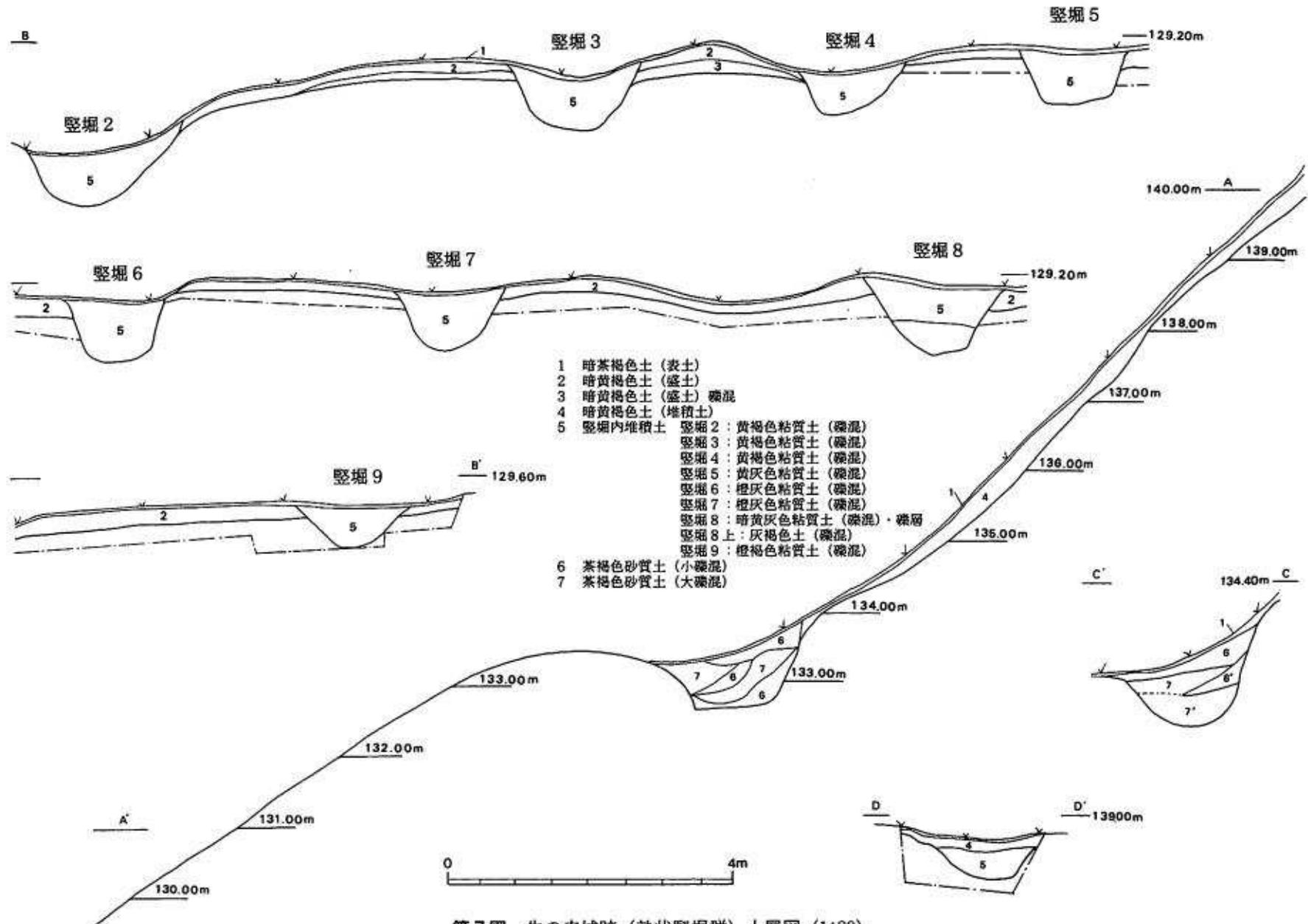
北郭群の北西側、傾斜角35~45°の斜面で9条の堅堀とそれらの上端部を結ぶ横堀を検出した。堀の形状はおおむねU字状をなし、標高は約110(調査区内は122)~140m。堅堀1は長さ約10m、幅1~1.5m、深さ0.8m。堅堀2は長さ21m以上(調査区内約18m)、幅1~3m、深さ約0.8m。堅堀3は長さ約35m(調査区内約20m)、幅1~2m、深さ約0.8m。堅堀4は長さ約34m(調査区内約18m)、幅1~1.5m、深さ約0.6m。堅堀5は長さ約27m(調査区内約18m)、幅1~1.5m、深さ約0.8m。堅堀6は長さ約27m(調査区内約18m)、幅1~1.5m、深さ約0.9m。堅堀7は長さ約27m(調査区内約20m)、幅1~1.5m、深さ約0.8m。堅堀8は横堀のさらに上部まで延びており、長さ約22m、幅1~2m、深さ約1m。堅堀9は長さ約9m、幅1~2m、深さ約0.6m。横堀は長さ約30m、幅1.4~2.5m、深さ0.6~0.9mである。なお、この横堀は調査区外東側にある畝状堅堀5条のうち4条の上端部をも結んでおり、総延長は約45mであるが、畝状堅堀群と横堀の新旧関係は確認できなかった。堅堀内の堆積土は地山の礫を含んだ粘質土であり、堅堀間には盛土があったことが予想される。堅堀と堅堀の間は土塁の形となるため、斜面上で横方



第5図 牛の皮城跡 (1郭~4郭・通路状遺構) 土層図 (1:80)



第6図 牛の皮城跡（畝状竪堀群）遺構実測図（1:200）



向に移動することが非常に困難となり、攻める側にとっては大きな障害となろう。横堀は守る側が竪堀内の敵に対し自在に移動するための通路的役割や、それ以上の侵入については5郭の切岸下端部分をさらに掘り、切岸の傾斜をさらにつけることにより侵入防御の役割があると思われる。遺物は遺構掘下げ中に青磁の盤の破片、竪堀5から錐と思われる鉄製品1点が出土している。

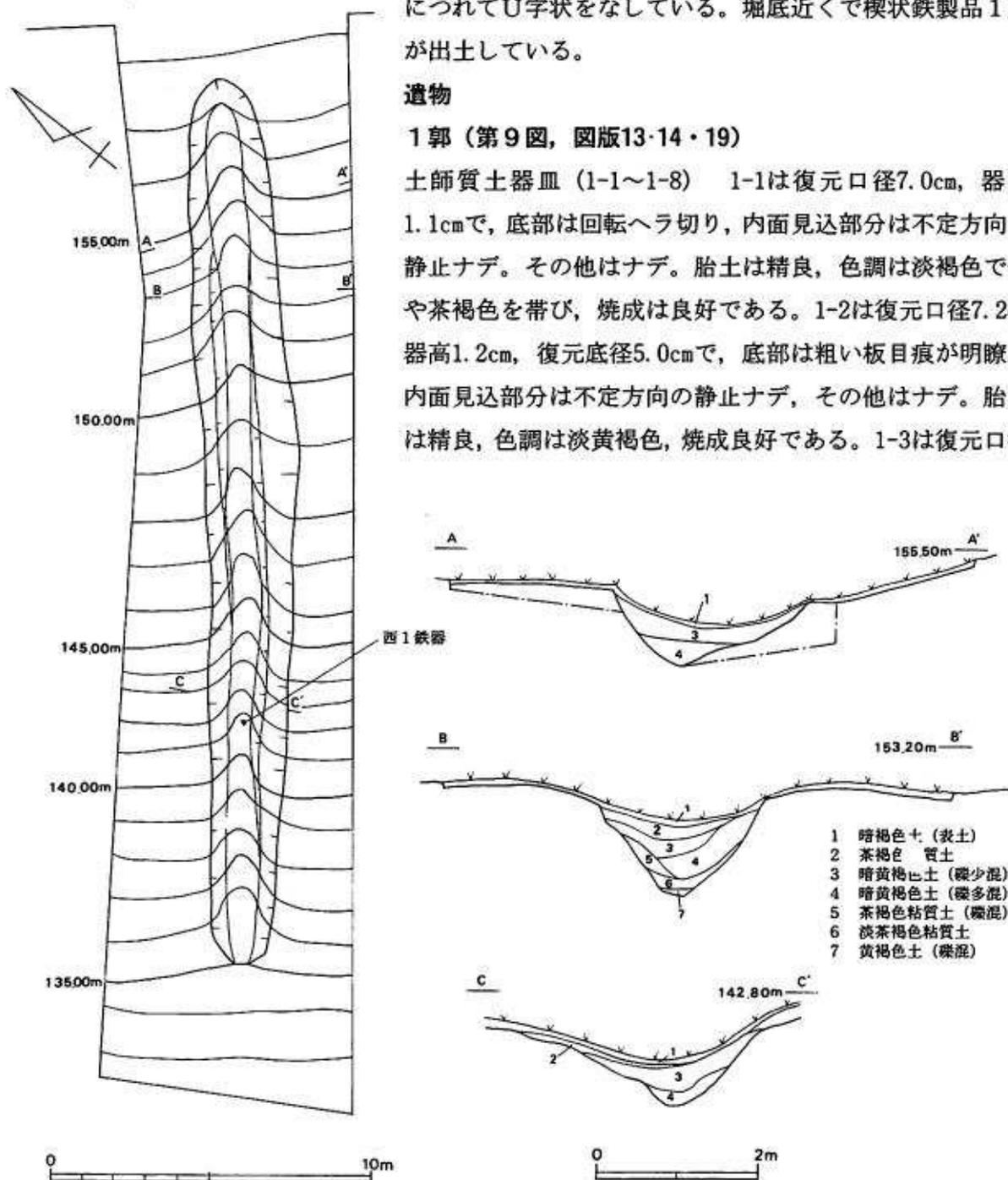
**西竪堀（第8図，図版11・12）**

北郭群の西側切岸部傾斜角度約40°の斜面部に単独で存在し、標高は135m～158mである。長さ約28m、幅2～3m、深さ約0.6～1mの溝状のもので、溝底の形状は上半部ではV字状、下半部につれてU字状をなしている。堀底近くで楔状鉄製品1点が出土している。

**遺物**

**1郭（第9図，図版13・14・19）**

土師質土器皿（1-1～1-8） 1-1は復元口径7.0cm，器高1.1cmで，底部は回転ヘラ切り，内面見込部分は不定方向の静止ナデ。その他はナデ。胎土は精良，色調は淡褐色やや茶褐色を帯び，焼成は良好である。1-2は復元口径7.2cm，器高1.2cm，復元底径5.0cmで，底部は粗い板目痕が明瞭。内面見込部分は不定方向の静止ナデ，その他はナデ。胎土は精良，色調は淡黄褐色，焼成良好である。1-3は復元口径

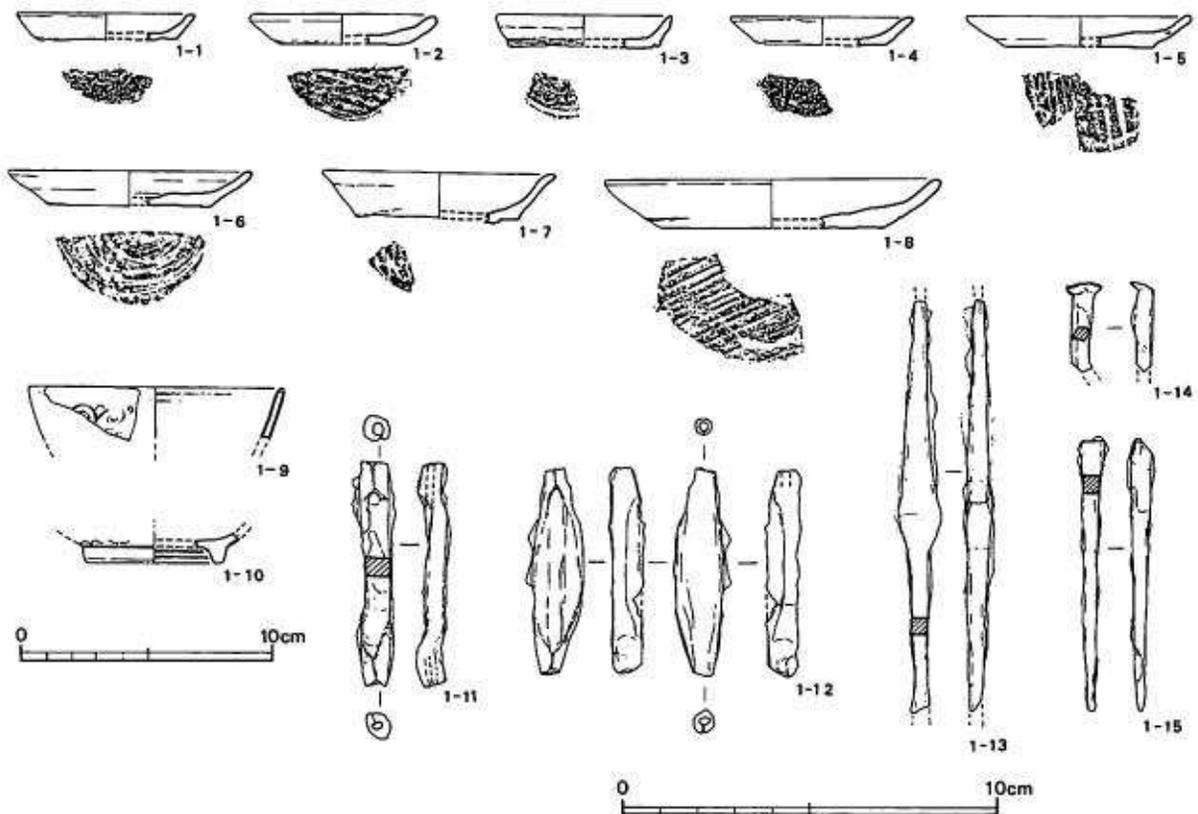


第8図 牛の皮城跡（西竪堀）遺構実測図（1:200）及び土層図（1:80）

7.0cm, 器高1.4cmで, 底部はヘラ切りか。体部外面下半はヘラアテ, その他はナデ。胎土は精良, 色調は淡褐色, 焼成良好である。1-4は復元口径7.2cm, 器高1.2cmで, 底部はヘラ切りか。その他はナデ。胎土は精良, 色調は淡黄褐色, 焼成良好である。1-5は復元口径9.0cm, 器高1.3cm, 復元底径6.0cmで, 底部は粗い板目痕が明瞭でそのち回転ヘラ削りにより凸凹をならしているが全面には及んでいない。その他はナデ。胎土は精良, 色調は淡褐色, 焼成良好である。1-6は復元口径9.4cm, 器高1.3cm, 復元底径6.4cmで, 底部は回転ヘラ切り, 内面見込部分は静止ナデ, その他はナデ。胎土は精良, 色調は淡褐色, 焼成良好である。1-7は復元口径9.4cm, 器高1.8cmで, 胎土は微砂を含むが精良, 色調は暗褐色, 焼成良好である。口縁部にススが付着している。1-8は復元口径13.6cm, 器高1.9cm, 復元底径8.8cmで, 底部は粗い板目痕が明瞭で, 一部に回転ヘラ削りの痕跡。内面見込部分は静止ナデ, その他はナデ。胎土は精良, 色調は淡赤褐色, 焼成良好である。

陶磁器 (1-9, 1-10) 1-9は景德镇系の青花, 碗の口縁部。復元口径10.3cm。口縁端部内面に2条の界線, 外面に2条の界線と唐草文様を施す。生地は精緻で白色, 焼成は堅緻である。1-10は陶器かと思われる底部で, 復元底径5.7cm。体部外面のみ白色の釉薬を施し, 高台部及び見込部は無釉である。胎土は精良で焼成はやや軟。

金属器 (1-11~1-15) すべて鉄製品で1-11は長さ5.6cm, 幅0.9cm, 厚さ0.5cmの板を用い, 両端約1.5cmを叩き広げて袋状にしている。重量8.62g。上下端は両側から中央に折り曲げて径3mm程度の差込口状にしている。用途は不明である。1-12は長さ5.2cm, 幅2.2cmの鉄板を折り曲げ, 両



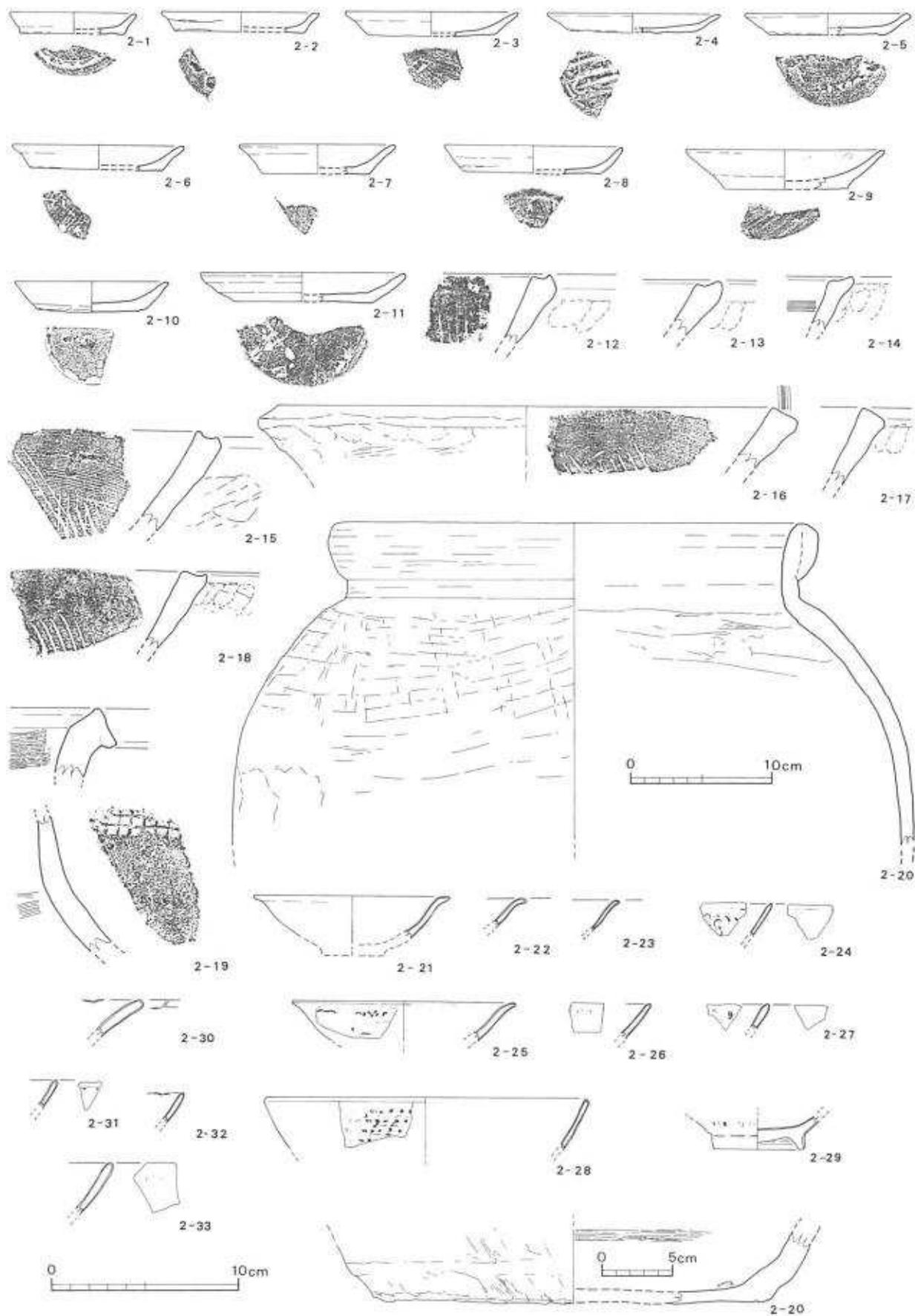
第9図 牛の皮城跡1郭出土遺物実測図 (1-1~1-10は1:3, 1-11~1-15は1:2)

端部は袋状に端面を合わせ中央部は船体状にしている。重量5.53g。1-11と同じ機能をもつ鉄器であろうが、用途は不明である。2郭からも同様の鉄製品が1点出土している。1-13は現存長10.8cm、最大幅1.3cm、断面方形、重量19.06g。上部が欠損している。用途は不明であるが、鏃の可能性は少ない。1-14は現存長2.3cm、断面方形、重量1.3g。釘の頭か。1-15は長さ7.18cm、断面方形、重量4.48gの釘である。

## 2郭（第10, 11図, 図版15~20）

土師質土器皿（2-1~2-11） 2-1は復元口径7.0cm、器高1.2cmで、底面は回転ヘラ切り、それ以外はナデ。胎土は精良、色調は淡赤褐色で、焼成は良好である。2-2は復元口径8.4cm、器高1.2cmで、底部は回転ヘラ切りか。その他はナデ。胎土は精良、色調は淡赤褐色、焼成良好である。2-3は復元口径9.0cm、器高1.3cm、復元底径6.8cmで、回転ヘラ切りか。その他はナデ。胎土は精良、色調はやや黒っぽい淡褐色、焼成良好である。2-4は復元口径9.0cm、器高1.1cm復元底径7.0cmで、底部は粗い板目痕、その他はナデ。胎土は精良、色調は淡赤褐色、焼成良好である。2-5は復元口径8.8cm、器高1.2cm、復元底径6.4cmで、底部は回転ヘラ切りで、内面見込部分は静止ナデ、その他はナデ。胎土は精良、色調は淡褐色、焼成良好である。2-6は復元口径9.1cm、器高1.3cmで、底部に板目痕、その他はナデ。胎土は精良、色調はやや赤みがかった淡褐色、焼成やや軟だが良好である。2-7は復元口径8.2cm、器高1.5cmで、底部は回転ヘラ切りか、その他はナデ。胎土は精良、色調は暗褐色、焼成良好である。2-8は復元口径9.4cm、器高1.5cm、復元底径7.4cmで、底部はヘラ切りか、その他はナデ。胎土は精良、色調はやや白い淡褐色、焼成は軟である。2-9は復元口径11.0cm、器高2.1cmで、底部に粗い板目痕、内面は回転ナデのち静止ナデ、外面はナデ。胎土は精良、色調は淡褐色、焼成は良好である。2-10は復元口径8.0cm、器高1.6cm、復元底径6.0cmで、底部はヘラ切りの後ナデ、内面見込部分は静止ナデ、その他はナデ。胎土は精良、色調は淡褐色、焼成は良好、堅緻である。2-11は復元口径11.0cm、器高1.5cmで、底部に板目痕。内面見込部分は静止ナデ、その他はナデ。胎土は精良、色調は淡褐色、焼成はやや軟。

土師質土器播鉢（2-12~2-14, 2-17・2-18） 2-12から2-14はよく似たつくりである。2-12は口縁部で、内面に4.5mm間隔の条線により播り目を施しているが単位は不明。端部は幅1.1cmの平坦面をつくり幅5mmの凹線を施す。外面に指押さえ。胎土は砂粒が多く、色調は淡赤褐色、焼成は軟弱である。2-13は口縁部で、端部は幅1.2cmの平坦面に太い凹線を施す。口縁部外面にナデ、その下方に指押さえ。胎土は精良で、色調は淡赤褐色、焼成は堅緻である。2-14は口縁部で、端部は幅1.3cmの平坦面に太い凹線を施す。内面は粗いハケ、外面に指押さえ。胎土は微砂及び白色粒を含み、色調は淡茶褐色、焼成はやや軟である。2-17は口縁部で、端部は幅1.2cmの平坦面を作りナデ。口縁部外面にナデ、その下方に指押さえ。胎土は白色粒を含み、色調は暗茶褐色、焼成はやや軟である。2-18は口縁部で、内面に5mm間隔の条線により播り目を施しているが単位は不明。端部は1.5cmの平坦面を作りナデ。外面に指押さえ。胎土は砂粒・小石を多く含み、色調は茶褐色、焼成はやや軟である。

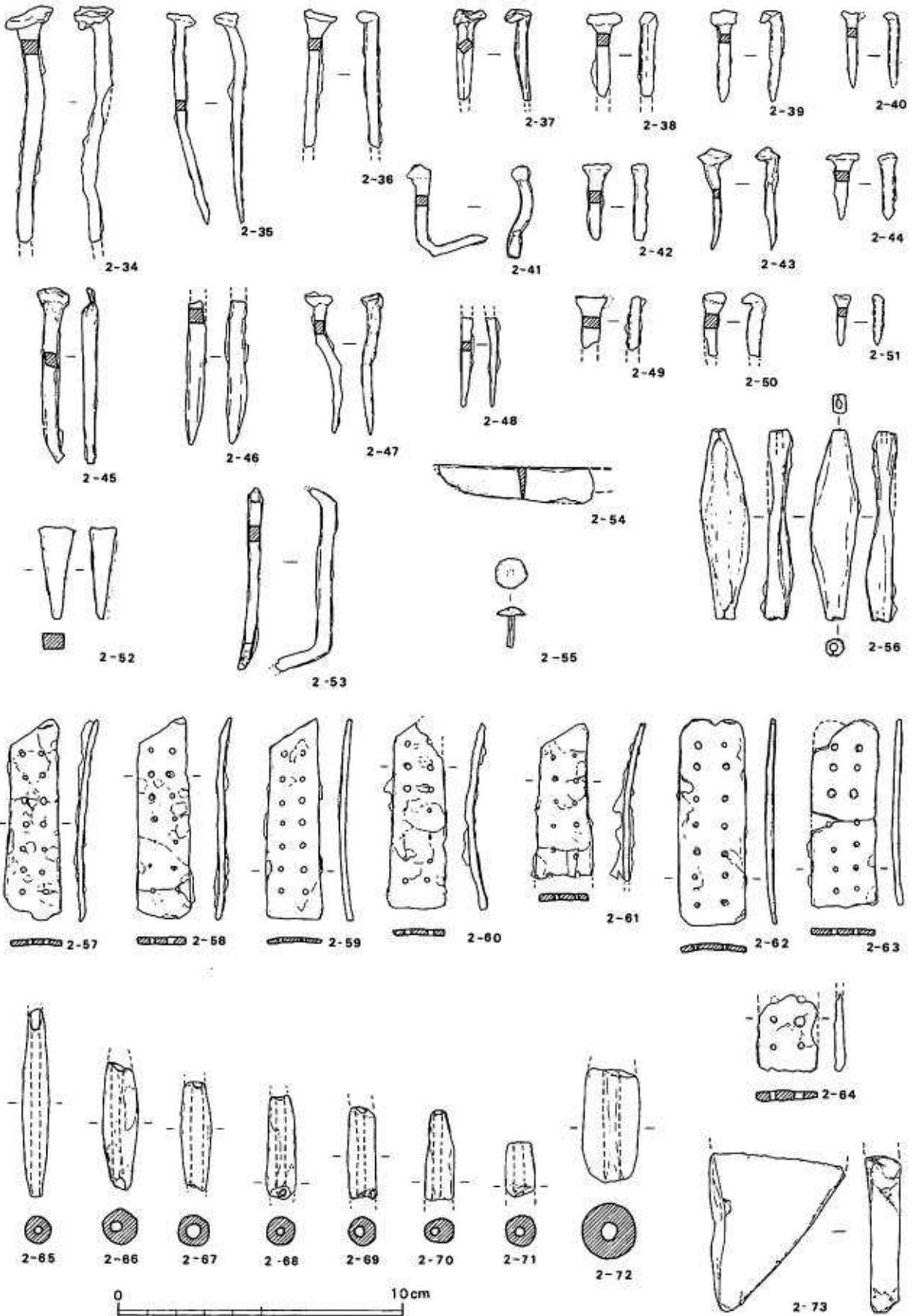


第10図 牛の皮城跡2郭出土遺物実測図1 (1:3, 2-20は1:4)

須恵質土器播鉢 (2-15・2-16) 2-15は口縁部で、端部は幅1.1cmの平坦面に粗いヨコハケを施した後幅0.8cmの凹線を施す。内面端部の下はヨコハケ、その下方に4.5mm間隔で4本単位の条線による播り目を交差させて施している。端部外面にヨコナデ。胎土は砂粒を多く含むが精良で、色調は灰色、焼成は堅緻である。2-16は口縁部で、内面に播り目を施しているが、単位は不明。端部は幅1.3cmの平坦面に粗いヨコハケ。凹線は施さず。内面は細かいヨコハケ、端部外面にヨコナデ。胎土は精良で、色調は淡灰色、焼成はやや軟質である。

陶磁器 (2-19～2-33) 2-19は甕の口縁部及び肩部である。口縁端部は外に折込み幅2.1cmの端面をもつ。端部内側はナデ、その下方は細かいヨコハケ、外側はナデ。肩部は外面上方に格子目タタキ、その下方に細かいタテハケ。内面は粗いヨコハケ。胎土は砂粒を多く含み、色調はやや黒っぽい茶褐色、焼成は良く堅緻である。亀山焼と思われる。2-20は備前焼甕で口縁部から体部上半、底部が残る。底部及び頸部の一部破片は3郭から出土した。復元口径31.0cm、復元底径28.0cm。玉縁の折り返し部分が長くなり平たく幅を広くしている。胎土は精良で色調は茶褐色、焼成は堅緻である。間壁忠彦氏編年のIV期にあたる<sup>(1)</sup>。2-21は白磁の端反皿の口縁部。復元口径10.4cm。生地は灰色で透明な釉をかける。焼成は堅緻。2-22は白磁の端反皿の口縁部。器壁は薄い。生地は灰色で透明な釉をかける。焼成は堅緻。2-23は白磁の端反皿の口縁部。器壁は薄い。生地は灰色で透明な釉をかける。焼成は堅緻。2-24は景德鎮系の青花、碗の口縁部。口縁端部内面に2条の界線、外面に2条の界線、体部に施文。生地は白色で緻密。焼成は堅緻である。2-25はいわゆる漳州窯系の青花、皿の口縁部。復元口径12.0cm。口縁端部内面に1条、体部内面にも1条の界線、外面に1条の界線、体部に施文。胎土が黄色味を帯び呉須の発色が悪い。焼成は良。2-26は漳州窯系の青花、碗の口縁部。口縁端部内面に1条の界線。胎土が黄色味を帯び呉須の発色が悪い。焼成は良。2-27は景德鎮系の青花、碗の口縁部。口縁端部内面に1条の界線。生地は精緻で白色、焼成は堅緻である。2-28は景德鎮系の青花、碗の口縁部。復元口径17.4cm、口縁端部内面に2条の界線。外面に2条の界線、体部に施文。生地は精緻で白色、焼成は堅緻である。2-29は漳州窯系の青花の底部で、復元底径4.8cm。胎土が黄色味を帯びる。高台は断面が方形で、壘付の一部に釉がかかり、高台内部は無釉である。焼成は軟質、二次的に火を受けたとみられる。2-30は青磁の稜花皿。胎土は精良で釉は黄褐色。2-31は青磁の碗の口縁部で外面に線描きの蓮弁。胎土は精良で釉は淡緑色、器壁は薄い。2-32は青磁の稜花皿か。かすかに残る文様のみ緑色でその他は白色に近い。内外面とも貫入が顕著である。胎土は精良で器壁は薄い。2-33は青磁の碗。退化した細い線描きの蓮弁。胎土は精良で釉は濃緑色。

金属器 (2-34～2-64) 2-34から2-51は鉄釘である。現存長1.75cm～8.35cmで、長さ3cm内外の小形の釘が多い。断面形は長方形ないしはすべて方形である。頭部の形状は頭部を叩いて薄くし、折り曲げる例が多い。重量は0.38gから10.62gである。2-52は楔状鉄製品で長さ3.22cm、先端部の幅1.3cmで断面形は長方形、重量7.16gである。2-53は鋸と思われる。長さ6.37cm、幅2.2cm、断面形は長方形で、重量4.12gである。2-54は刀子状鉄製品で、長さ5.3cm、幅1.3cm、重量3.9gである。片側が薄くなり刃部を形成しているようであり、何らかの利器として利用したものであ



第11図 牛の皮城跡2郭出土遺物実測図2 (1:2)

ろう。2-55は金銅製の鋌で長さ1.3cm、幅1.1cm、笠部は円形を呈し、軸の部分は折り曲げてひとつにし、笠の裏側に鱗付けしている。重量1.07g。2-56は1-12と同様の品で、長さ6.5cm、幅2.0cmの鉄板を折り曲げ、両端部は袋状に端面を合わせ中央部は船体状にしている。1-11と同じ機能をもつ鉄器であろうが、用途は不明である。重量6.70g。2-57から2-64は甲冑に用いられた鉄小札で、現存札足（縦の長さ）2.8cm～7.2cm、札幅（横幅）1.9cm～2.3cm、厚さ2.5mm前後、重量は2.72g～11.97gである。7mm～10mmの間隔で2列に孔が穿たれている。小札は頭部（上部）の形態や穴の配置によって本小札・伊予札などに分けられる。当城跡から出土した小札は、本小札のうち孔を二列14孔とした四目札が5枚、頭部を中央から割りその左右を丸く作って、その形が半裁した基石に似ていることから名づけられた基石頭伊予札が2枚確認できる。

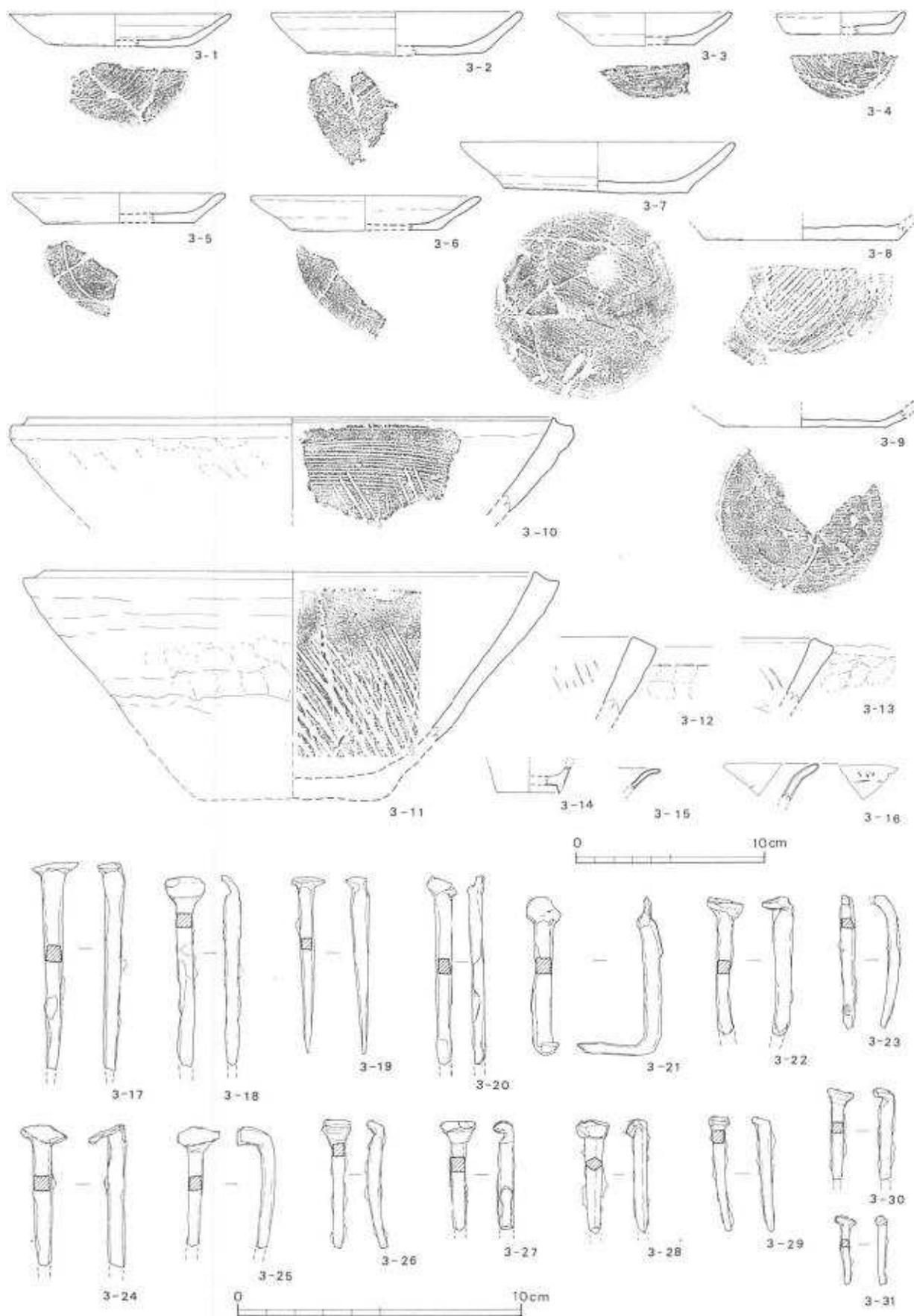
土製品（2-65～2-72） すべて管状土錘で、長さ1.9cm～6.5cm、最大幅1.0cm～2.0cm、孔径0.3～0.5cm、重量1.8g～16.1g。色調は2-65は黒褐色であるが、その他は赤褐色を呈する。

石製品（2-73） 砥石で、現状は三角形である。長さ5.5cm、幅4.80cm、厚さ1.1cm、重量は35.4gである。4面が使用されている。

### 3郭（第12・13図，図版19～23）

土師質土器皿（3-1～3-9） 3-1は復元口径11.4cm、器高1.5cm復元底径8.0cmで、底面は糸切りか。それ以外はナデ。胎土は精良、色調は淡褐色で、焼成は良好である。3-2は復元口径13.6cm、器高2.2cm、復元底径9.6cmで、底部は目の細かい板目がある。板カキ目か。その他はナデ。胎土は精良、色調は淡赤褐色、焼成良好である。3-3は復元口径9.2cm、器高1.6cm、復元底径5.6cmで、底部は板目痕が残る。内面見込み部分は静止ナデ、その他はナデ。胎土は精良、色調は淡褐色、焼成良好である。3-4は復元口径7.0cm、器高1.2cm、復元底径5.8cmで、底部は糸切りか。その他はナデ。胎土は砂粒を含むが精良、色調は淡褐色、焼成良好である。3-5は復元口径11.2cm、器高1.5cm、復元底径8.0cmで、底部はヘラ切り、内面見込み部分は静止ナデ、その他はナデ。胎土は砂粒を多く含み、色調は淡橙色から淡褐色、焼成良好である。3-6は復元口径12.1cm、器高2.0cmで、底部は細かな板目痕が残る回転ヘラ削り、その他はナデ。胎土は精良、色調は淡赤褐色から淡褐色、焼成良好である。3-7は復元口径14.6cm、器高2.6cm、復元底径は9.7cmで、底部は板目痕が残る回転ヘラ削り。内側からの穿孔あり。内面見込み部分に静止ナデ。その他はナデ。胎土は微砂を含み、色調は淡褐色、焼成良好である。3-8は復元底径10.2cmで、粗い板目痕が残る。底部は回転ヘラ削りで、内面見込み部分に静止ナデ、その他はナデ。胎土は精良、色調は淡橙色、焼成は良好である。3-9は復元底径9.0cmで、底部に粗い板目痕が残る。胎土は精良、色調は淡褐色から乳白色、焼成は軟弱である。

須恵質土器播鉢（3-10～3-13） 3-10は口縁部で、復元口径28.1cm。端部は幅1cmの平坦面に凹線を施す。内面は粗いヨコハケの上にやや太目の4.5mm間隔の条線を交差させて播り目としているが単位は不明。胎土は精良で、色調は淡灰色、焼成は軟弱である。3-11は復元口径26.4cm。端部は幅1.2cmの平坦面に浅い凹線を施す。口縁部外面はヨコナデ、その下方は指押さえ。口縁部内面はヨコナデ。内面に4.5mm間隔で6本が1単位の条線を交差させて播り目としている。胎土



第12図 牛の皮城跡3部出土遺物実測図 (1:3, 1:2)

は精良で、色調は淡灰色、焼成はやや軟弱である。3-12は口縁部で、端部は幅1cmの平坦面としている。内面に6本単位の条線による挿り目を施している。口縁部内外にヨコナデ。胎土は微砂及び白色粒を含み、色調は暗茶褐色、焼成はやや軟である。3-13は口縁部で、端面は幅1.1cmの平坦面に浅い凹線を施す。内面に挿り目を施しているが単位は不明。口縁部外面にナデ、その下方に指押さえ。胎土は精良で、色調は暗灰色、焼成はやや軟である

陶磁器(3-14~3-16) 3-14は白磁小杯の底部で、復元底径3.4cm。底部見込内は釉が認められる。高台畳付外面は無釉で、高台内面は釉を施す。生地は白色で釉も白色、焼成は堅緻である。3-15は白磁端反皿の口縁部で、生地は灰色で透明な釉をかける。焼成は堅緻である。器壁は薄い。3-16は漳州窯系青花の碗の口縁部。胎土は黄色味を帯び呉須の発色が悪い。焼成は軟質。

金属器(3-17~3-39) 3-17から3-33は鉄釘である。現存長2.4cm~8.1cmで、断面形は長方形ないしは方形である。頭部の形状は頭部を叩いて薄くし、折り曲げる例が多い。中には、下半部が折れ曲がったものもある。重量は0.55gから10.50gである。3-34は先端部が二股状に分かれた鉄製品で長さ5.95cm、基部は断面が5mm×6mmの長方形で、先端は断面が一辺5mmの長方形を呈する。二股に分かれた先端部は両方とも同様に折れ曲がっている。重量10.93gである。小型のヤス状鉄製品で用途は不明。3-35は青銅製の鋏で長さ2.5cm、幅1.5cm、笠部は正方形を呈し、軸は折り曲げて2本にするが、1本は欠失している。笠は長方形の銅版の両端部を折り曲げて軸を包み込むようにしている。重量7.3g。3-36は釣針で、長さ2.0cm、最大幅1.4cm、厚さ0.25cm、重量0.5g。3-37は楔状鉄製品で長さ4.0cm、先端部の幅1.8cmで、断面形は長方形、重量9.0gである。3-38は鉄小札で、現存の札足3.0cm、札幅1.6cm、厚さ2.0mm、重量は2.3gである。1cmの間隔で2列に孔が穿たれているが、上部が欠けているため小札の種別は不明である。3-39は石突状の用途不明鉄製品である。中空となっている。現存長は2.2cm、上部径1.1cm、下部径0.5cm。上端孔径0.8mm、下部孔径0.2mm。

#### 畝状堅堀群(第13図, 図版23)

陶磁器(畝-1) 青磁の盤の底部である。復元底径9.4cm。見込に印花文はなく、見込内に重ね焼きの目跡が残る。高台畳付まで釉。胎土は精良で淡緑色の釉。焼成は良。

金属器(畝-2) 鉄製錐か。刃幅の狭い突鑿の可能性もある。現存長5.6cm、幅1.1cm、断面は5mmの方形である。重量10.16g。

#### 西堅堀(第13図, 図版23)

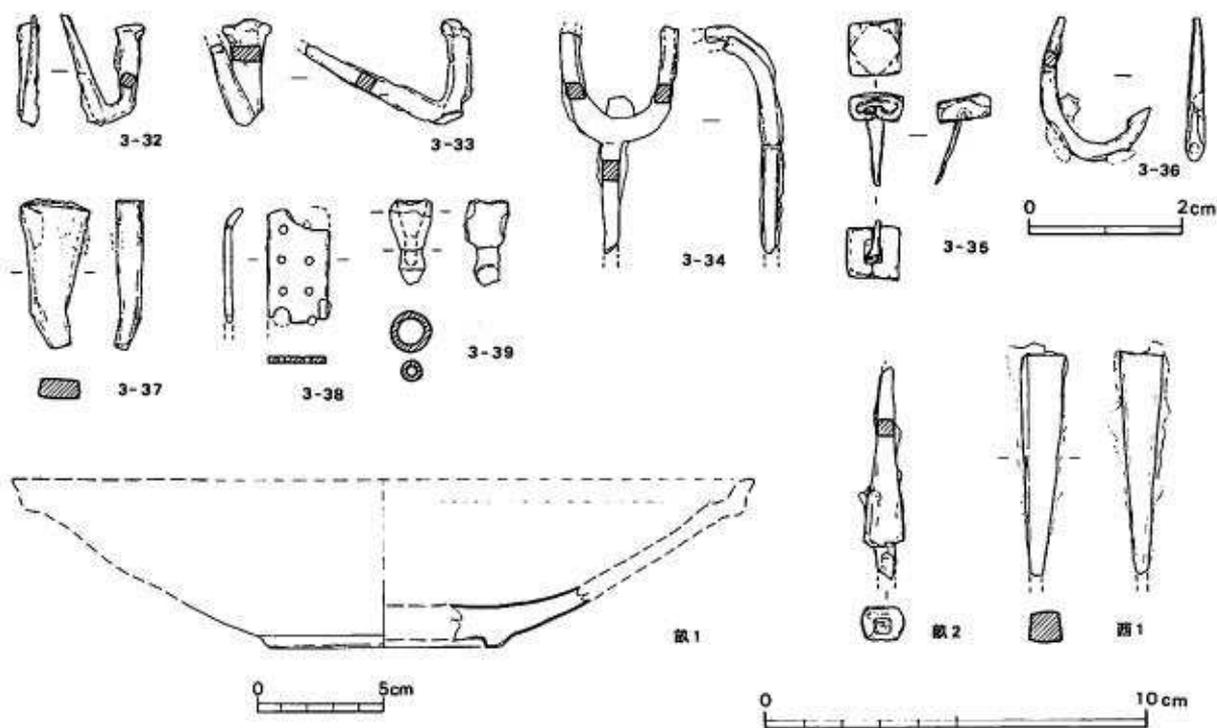
金属器(西-1) 楔状鉄製品。長さ6.05cm、先端部の幅1.0cmで断面形は台形、重量21.84gである。

#### 註

(1) 間壁忠彦「備前焼」【考古学ライブラリー】60 ニュー・サイエンス社 1991年

報告No	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	報告No	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量
1-11	鉄製品	用途不明鉄製品	5.60	0.70	0.55	8.62	2-60	鉄製品	小札(四目札)	6.50	2.05	0.25	6.50
1-12	鉄製品	用途不明鉄製品	5.20	1.50	0.65	5.53	2-61	鉄製品	小札(四目札)	5.43	2.15	0.25	5.20
1-13	鉄製品	用途不明鉄製品	10.80	1.30	0.60	19.06	2-62	鉄製品	小札(蒜石頭伊予札)	7.20	2.30	0.20	11.97
1-14	鉄製品	釘	2.30	0.50	0.50	1.30	2-63	鉄製品	小札(蒜石頭伊予札)	6.50	2.20	0.30	7.80
1-15	鉄製品	釘	7.18	0.50	0.50	4.48	2-64	鉄製品	小札	2.80	2.15	0.30	2.72
2-34	鉄製品	釘	8.35	0.60	0.55	10.62	3-17	鉄製品	釘	7.20	0.65	0.60	10.50
2-35	鉄製品	釘	7.50	0.35	0.35	5.27	3-18	鉄製品	釘	6.62	0.55	0.50	6.15
2-36	鉄製品	釘	4.85	0.45	0.45	3.78	3-19	鉄製品	釘	6.20	0.55	0.55	4.00
2-37	鉄製品	釘	3.20	0.50	0.40	2.20	3-20	鉄製品	釘	6.60	0.50	0.40	5.60
2-38	鉄製品	釘	3.00	0.45	0.50	2.18	3-21	鉄製品	釘	8.10	0.60	0.60	6.51
2-39	鉄製品	釘	3.22	0.35	0.30	1.70	3-22	鉄製品	釘	4.80	0.55	0.65	5.60
2-40	鉄製品	釘	2.70	0.35	0.35	0.73	3-23	鉄製品	釘	4.60	0.40	0.40	1.84
2-41	鉄製品	釘	3.25	0.40	0.35	2.59	3-24	鉄製品	釘	4.90	0.70	0.60	5.80
2-42	鉄製品	釘	2.80	0.50	0.45	1.88	3-25	鉄製品	釘	4.10	0.50	0.45	4.80
2-43	鉄製品	釘	3.50	0.30	0.40	1.60	3-26	鉄製品	釘	4.50	0.40	0.40	2.46
2-44	鉄製品	釘	2.34	0.55	0.35	1.31	3-27	鉄製品	釘	3.80	0.50	0.50	2.94
2-45	鉄製品	釘	6.20	0.60	0.50	4.50	3-28	鉄製品	釘	3.95	0.60	0.40	3.54
2-46	鉄製品	釘	5.02	0.55	0.55	5.77	3-29	鉄製品	釘	4.00	0.45	0.45	1.84
2-47	鉄製品	釘	4.94	0.35	0.50	1.73	3-30	鉄製品	釘	3.20	0.50	0.40	1.70
2-48	鉄製品	釘	3.13	0.30	0.30	0.80	3-31	鉄製品	釘	2.40	0.40	0.30	0.55
2-49	鉄製品	釘	1.90	0.60	0.40	1.49	3-32	鉄製品	釘	6.10	0.50	0.45	2.30
2-50	鉄製品	釘	2.02	0.50	0.50	1.19	3-33	鉄製品	釘	7.00	0.80	0.55	6.80
2-51	鉄製品	釘	1.75	0.30	0.30	0.38	3-34	鉄製品	ヤス状鉄製品	5.95	3.10	0.55	10.93
2-52	鉄製品	楔状鉄製品	3.22	1.30	0.90	7.16	3-35	青銅製品	鏃	2.50	1.50	0.40	7.30
2-53	鉄製品	鏃?	6.37	0.40	0.55	4.12	3-36	鉄製品	釣針	2.00	1.40	0.25	0.50
2-54	鉄製品	刀子状鉄製品	5.10	1.30	0.30	3.90	3-37	鉄製品	楔状鉄製品	4.00	1.80	0.70	9.00
2-55	金銅製品	鏃	1.30	1.10	0.25	1.07	3-38	鉄製品	小札	3.00	1.60	0.20	2.30
2-56	鉄製品	用途不明鉄製品	6.62	1.60	0.70	6.70	3-39	鉄製品	用途不明鉄製品	2.20	1.10	孔径0.65	2.04
2-57	鉄製品	小札(四目札)	7.00	2.00	0.25	7.76	畝-2	鉄製品	鏃?	5.60	1.10	0.50	10.16
2-58	鉄製品	小札(四目札)	7.00	2.00	0.25	8.19	西-1	鉄製品	楔状鉄製品	6.05	1.00	1.15	21.84
2-59	鉄製品	小札(四目札)	7.00	1.90	0.20	8.63							

第1表 牛の皮城跡出土金属製品計測表



第13図 牛の皮城跡3郭・畝状堅堀群・西堅堀出土遺物実測図(1:3, 1:2, 1:1)

### 3 まとめ

牛の皮城跡は、標高約160mの北郭群と標高約230mの南郭群からなる。

南郭群は、今回調査した北郭群とは二重の堀切で区切り、幅の狭い尾根で繋がっている。こちらから北郭群と同様に東と南に畝状堅堀群を設け、西側には二重の堀切がみられる。東の最高所から西に向かって4段、北に向かって1段の郭を設けるが、いずれの郭も北郭群の郭に比べて規模が大きく、北郭群とは様相が大きく異なり、牛の皮城跡の中核をなす。

北郭群は、東側の最高所から北西側に5段の郭を設け、東側と北西側に畝状堅堀群、南郭群に向かう南西側に二重の堀切、西側に堅堀を配している。西側が堅堀1本であることに比べて、北と東に大規模かつ密に防御施設を造作しており、この北郭群（城跡）が北と東側を非常に意識して築造されたことを示している。

#### 遺構

今回の調査では、土師質土器皿や輸入陶磁器など食器類や鉄釘が多数出土したにもかかわらず郭内の建物等は明らかにできず、郭の周囲に通常みられる柵などの痕跡も明らかにできなかった。釘が100本以上出土し、郭平坦面では特定範囲の分布状況を示すものではないが、釘を使った簡易な建物があった可能性も考えられる。

郭内の建物等の存在は明らかにできなかったが、連続する郭の構造、機能のありかたなど多くの成果があった。各々の郭の西側は削り残し状の一定の狭い幅をもった斜面が高所に向かって連続し、2郭と3郭の連結部では浅い溝状の掘り込みも認められ、4郭の平坦部は、郭としての機能ではなく、5郭・3郭・土塁を連結させる通路的役割をもったものと判断された。

北郭群は北西面に14条の畝状堅堀群、東面に9条の畝状堅堀群を配置している。前述のように本城である南郭群にも畝状堅堀群がある。

畝状堅堀群とは、斜面に等高線と直角の方向に堀を並べたもので、掘り残されたところが畑の畝のようになっていところからこの名がついた。広島県教育委員会が1989～1995年度に行った広島県中世城館遺跡総合調査によって、広島県内では90か所の城跡で確認されている<sup>(1)</sup>。県の北西部特に毛利氏や吉川氏の領国内を除いてほぼ全県的に分布し、特に備後南部地域（芦田川上流域—御調町～尾道市北部～府中市～福山市新市町—）に多く<sup>(2)</sup>、この地域は全国的にみても濃密な分布地域とされる<sup>(3)</sup>。

畝状堅堀群は県内で90か所の城跡で確認されているものの、調査例は少ない。広島市佐伯区の有井城跡<sup>(4)</sup>、同市安芸区の三ツ城跡<sup>(5)</sup>、同市安佐北区の亀崎城跡<sup>(6)</sup>、山県郡北広島町蔵迫の明智城跡<sup>(7)</sup>、そして当城跡である。有井城跡では、第1郭の縁辺部を取り巻くように断面がU字形の堅堀が計13条、三ツ城跡では第5郭の斜面に断面箱形の堅堀が計10条配置されていた。亀崎城跡では、7郭の両側に断面箱形の堅堀を1条ずつ計2条、明智城では、第1郭の東側で2条の堅堀を検出している。築造時期をみると、明智城跡では遺構に伴う遺物が出土していないため時期が不明であるが、亀崎城跡が15世紀中、有井城跡・三ツ城跡が16世紀前半代とされている。したがって本城跡は畝状堅堀群の多用された時期とみられ、10条以上を有する有井城跡・三ツ城跡と共通する様

相をみせるので、16世紀前半代に想定しておきたい。ただし、畝状竪堀群について村田修三氏は16世紀前半の天文年間に始まり、永禄年間（1560年頃）に完成するとしており<sup>(9)</sup>、県内の様相と若干のずれがある。

### 出土遺物

当城跡では、土師質土器の皿が多数出土している。備後地域の中世土器は福山市草戸千軒町遺跡での成果が基準となっている。しかし土師質土器の特徴が沿岸部と山間部では異なり、その大きな相違点は底部の切り離し技法で、沿岸部は長く回転ヘラ切り技法を用い、山間部では古代末から中世初頭の時期に回転糸切り技法へ移行するという<sup>(9)</sup>。御調町末近城跡の調査で出土した平底の皿は回転糸切りによるものであった<sup>(10)</sup>。ところが当城跡で図化できたものとみると、ほとんどが回転ヘラ切りによるものである。次章で述べる曾川2号遺跡でも椀や杯は回転糸切り技法によるが、平底の皿は回転ヘラ切りであった。また、当城跡の北側に位置する曾川1号遺跡<sup>(11)</sup>は弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡であるが、数少ない中世の遺構から出土する皿は回転ヘラ切りである。この地域周辺だけの特徴なのかどうかについては、御調町内で調査された中世遺跡は少ないので、今後の資料の増加を待ちたい。

さて、当城跡の皿であるが、口径が7～9cmと11～15cmの大小2種類で、器高が1.1～2.6cm、器高指数（口径に対する器高の比率を百分率で示したもの）が12.2～20.0、平均が15.8となる。前述の草戸千軒町遺跡の成果を利用すれば、皿AⅠ、皿AⅡで、Ⅳ期後半の15世紀末から16世紀初頭と位置付けられる<sup>(12)</sup>。

当城跡出土の輸入陶磁器は小片ではあるが、各郭から青磁・白磁・青花の破片が出土している。これらの分類や編年については多くの研究成果があり、遺跡の年代決定の指標とされている。

青磁は碗、稜花皿、盤があり、上田秀夫氏の分類によれば碗BⅣ類<sup>(13)</sup>の破片が出土している。白磁は端反皿と小杯があり、端反皿（2-21・22・23, 3-15）は森田勉氏の分類のE-2群<sup>(14)</sup>にあたると思われる。したがって青磁・白磁の年代観は15世紀後半から16世紀末までと思われる。青花には碗、皿があり、景德鎮系の精緻なもの（1-9, 2-24・27・28）といわゆる漳州窯系といわれる、胎土が黄色味を帯びた粗製のもの（2-25・26・29, 3-16）がある。小片であり特定はむつかしいが、16世紀後半前後と思われる<sup>(15)</sup>。

鉄小札は、形状・孔の数により基石頭伊予札2枚、四目札5枚が確認できる。小札の大きさは甲冑の様式や使用部位等によって異なる。おおむね平安後期を最大とし、以後縮小する傾向を示す。室町時代に入ると小札はますます縮小し、札足（長さ）5.5～6.5cm、札幅（幅）1.4～1.5cmになるといわれ<sup>(16)</sup>、本城跡出土の小札は札足7cm前後、札幅2cm前後のもので、室町時代より古い形態を示している。

本城跡の築城年代については、特徴的な畝状竪堀群からみると、かなり多用された時期にあたり、県内の他例からみると16世紀の前半代に比定できそうである。また出土遺物からみた時期は、土師質土器が15世紀から16世紀初め、輸入陶磁器が15世紀後半から16世紀末頃の特徴を示していることから、本城跡の築造は16世紀前半のうちにさめられ、築造後1世紀間近く、山城としての

機能を有していたことが想定される。

## 註

- (1) 尾崎光伸「成果のまとめー地表面観察による調査の成果」【広島県中世城館遺跡総合調査報告書】第4集  
広島県教育委員会 1996
- (2) (1)に同じ
- (3) 村田修三「城の分布」【図説中世城郭事典】第二・三巻 株式会社新人物往来社 1987年
- (4) 財団法人広島市歴史科学教育事業団【有井城跡発掘調査報告】(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書  
第8集 1993年
- (5) 広島市教育委員会【三ツ城跡発掘調査報告】広島市の文化財第37集 1987年
- (6) 広島県教育委員会「亀崎城跡」【高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告】 1977年
- (7) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「明智城跡」【中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査  
報告(Ⅱ)】広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第116集 1993年
- (8) (3)に同じ
- (9) 鈴木康之「瀬戸内の中世土器ー吉備地域の土師質土器を中心にー」【考古学から見た地域文化ー瀬戸内の  
歴史復元ー】溪水社 1999年
- (10) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター【末近城跡】広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第201集  
2002年
- (11) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター(当調査室の前身)が平成14年度に、当調査室が平成15・16年  
度に調査している。
- (12) 鈴木康之「土師質土器の編年」【草戸千軒町遺跡発掘調査報告】V 広島県教育委員会 1996年
- (13) 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」【貿易陶磁研究】No.2 日本貿易陶磁研究会 1982年
- (14) 森田 勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」【貿易陶磁研究】No.2 日本貿易陶磁研究会 1982年
- (15) 小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」【貿易陶磁研究】No.2 日本貿易陶磁研究会 1982年  
小野正敏「出土陶磁器よりみた十五、十六世紀における画期の素描」【MUSEUM】No.416 東京国立博  
物館 1985年
- (16) 山岸素夫・宮崎真澄【日本甲冑の基礎知識】雄山閣出版株式会社 1990年

## IV 曾川2号遺跡

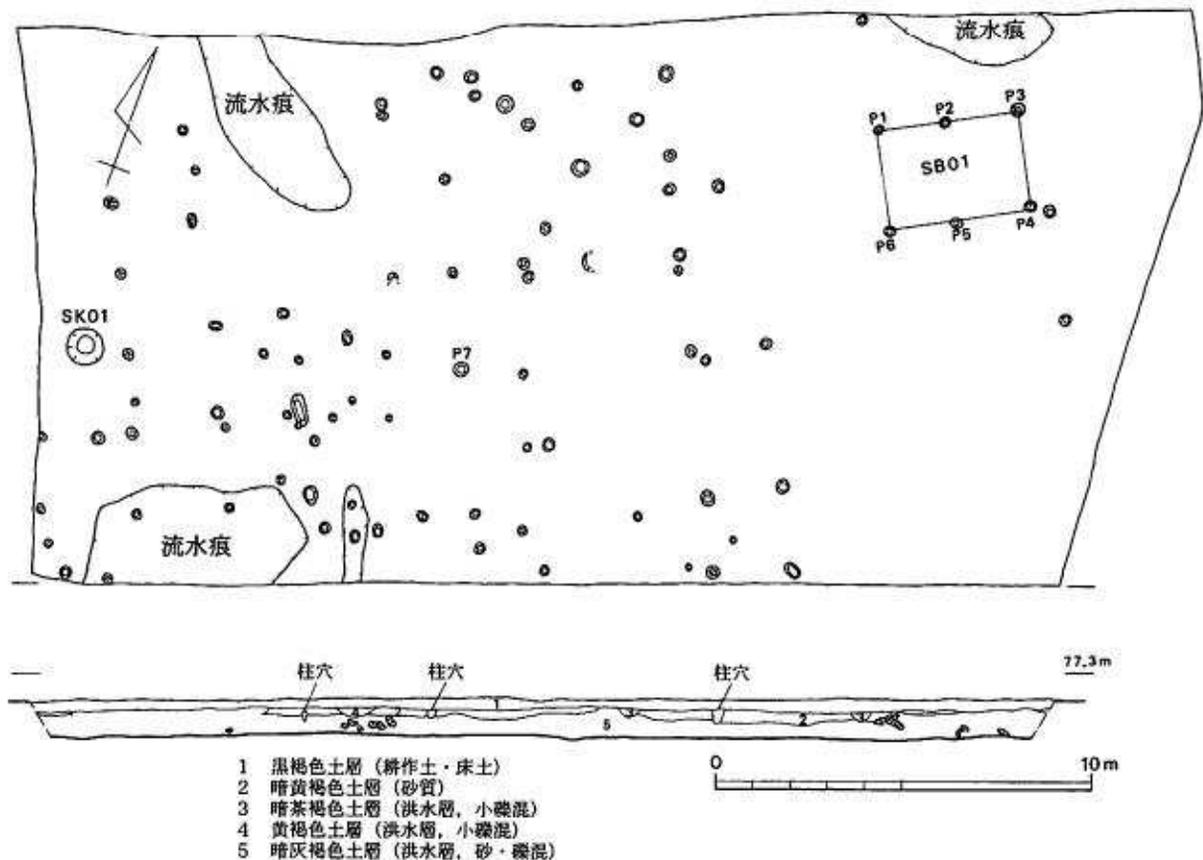
### 1 調査の概要（第14図）

曾川2号遺跡は、尾道市御調町大町字西川132番地1に所在する。遺跡は、御調川支流の江国川沿いの開析谷部に立地し、調査前は水田として利用されていた。南東側には、標高200~300mの山が連なり、江国川の谷が平地に出る丘陵上には牛の川城跡が存在する。

調査の結果、12世紀前後の土坑や柱穴群を検出した。柱穴は多数あったが、1間×2間の掘立柱建物跡1棟（SB01）が想定されたのみである。SK01は直径1.0mの円形の土坑で、礫とともに完形の土師質土器が入っており、祭祀的な性格が考えられる。

調査区内の土層層位について、耕作土及び床土の下に遺構面があるが、一部には流水痕がある。また、遺構面の下層では砂礫が全面に広がっていることを確認し、今回の調査区はかつて江国川の氾濫原であったことが推定される。

出土遺物には、土師質土器や瓦器がある。半数近くの柱穴から土師質土器の破片が出土しているが、全体的に出土量は少ない。SK01からは土師質土器の椀・杯・柱状高台の皿などが出土している。



第14図 曾川2号遺跡遺構配置図（1:200）

## 2 遺構と遺物

調査区は東西方向27.5~31.7m, 南北方向14.5~15.5mである。調査前の状況は水田で、標高は約76mである。

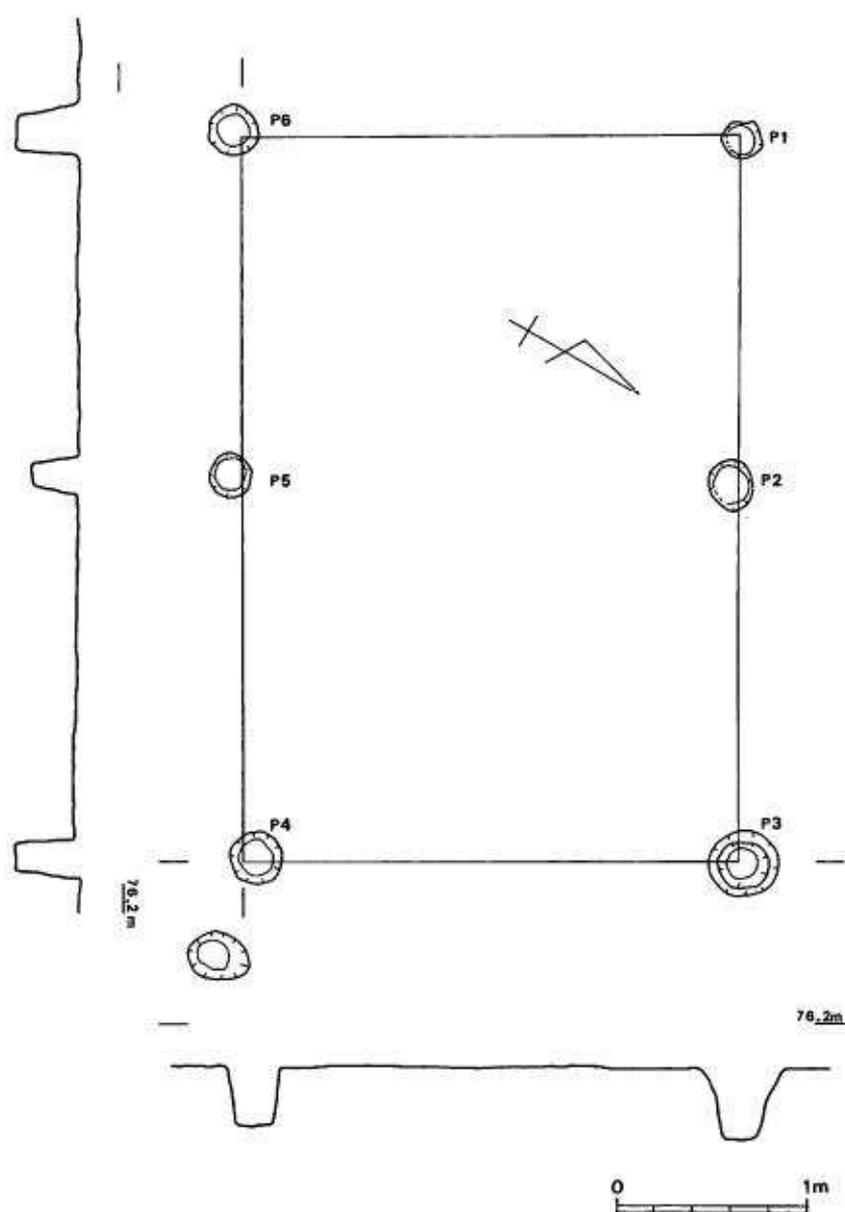
調査の結果、掘立柱建物跡1棟(SB01), 土坑1基(SK01), 柱穴約80個を確認した。柱穴の数は多いが、建物跡が想定できたのはSB01の1棟のみである。そのほか土層断面で柱根が観察できた柱穴が3個ある。遺構面の下層には全面に砂礫があることや遺構面を削った洪水痕跡があることから、調査区は江国川の氾濫原であったことが考えられる。

### 遺構

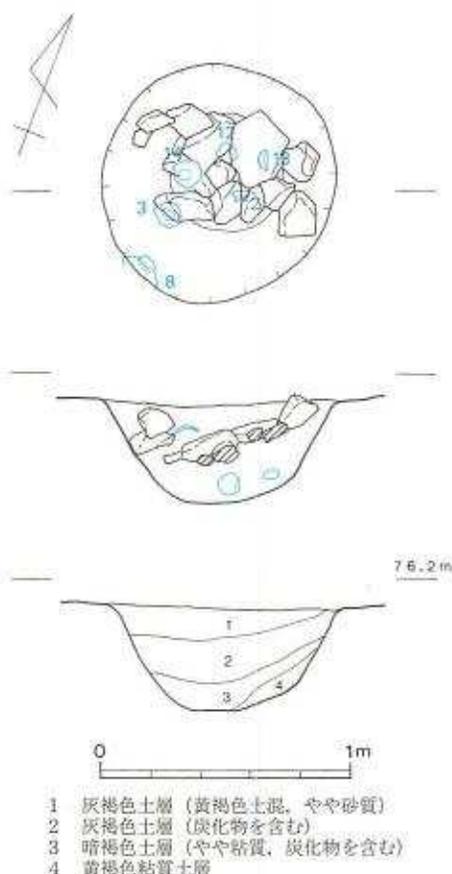
#### SB01 (第15図, 図版25)

SB01は、調査区東側で検出した掘立柱建物跡である。建物規模は桁行2間(3.8m)×梁間

1間(2.5~2.7m)で、桁行方向はN60°Eを指向する。柱間距離は、P1-P2・P5-P6が1.8m, P2-P3・P4-P5が2.0m, P1-P6は2.7m, P3-P4は2.5mである。柱穴の規模は径20~35cm, 深さは22~38cmである。P3は2段掘りで他の柱穴に比べて規模が大きい。遺物は柱穴から土師質土器の小片が出土した。



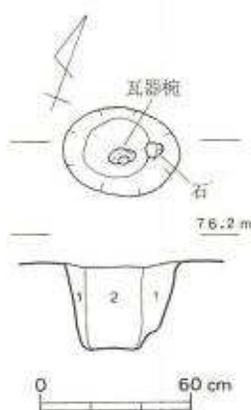
第15図 曾川2号遺跡SB01実測図(1:40)



第16図 曾川2号遺跡

SK 01 実測図 (1:30)

青色は土器、数字は遺物番号



第17図 曾川2号遺跡 P 7 実測図 (1:30)

### SK 01 (第16図, 図版26)

調査区南西部に位置する土坑である。平面形は円形で、大きさは直径95cmで深さ40cmである。土坑内には礫とともに完形の黒色土器の高台付椀1, 土師質土器の柱状高台皿4・平底の皿2・高台付椀3・平底の杯5が入っていた。祭祀的な様相がうかがえる。

### P 7 (第17図, 図版25)

調査区内で土層観察により柱根がみられた柱穴は3個あるが、遺物が出土した柱穴について述べる。調査区中央西よりに位置する柱穴で径が45cm, 深さ34cmである。土層観察で柱痕がみられ, 径22cm程度の柱が想定できる。柱穴上面から瓦器椀(第18図16)が1点出土した。

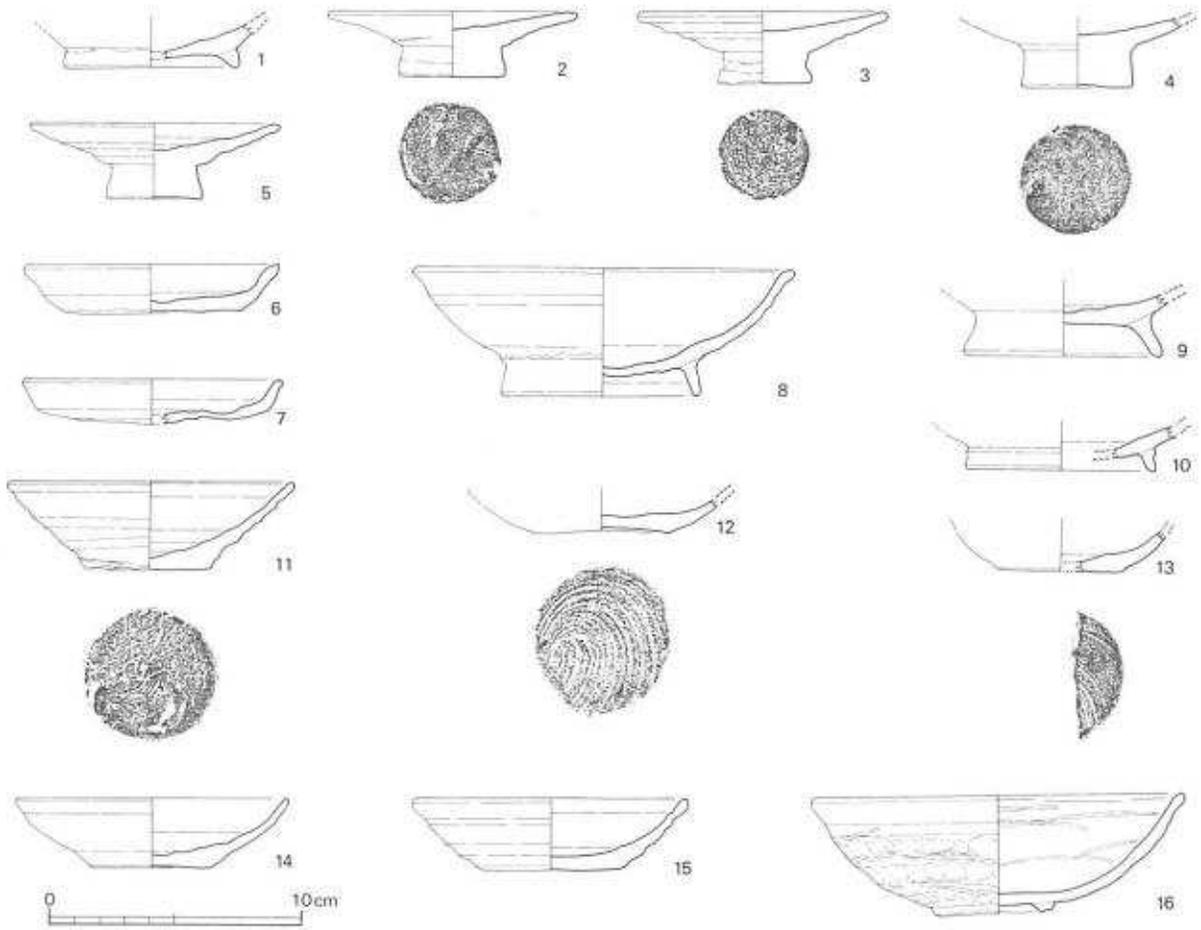
### 遺物

#### SK 01 (第18図 1~15)

黒色土器 1はA類の高台付椀で、高台の復元径7.0cm。胎土は砂粒をほとんど含まずきめ細かい。焼成は甘く、外面は淡黄白色、断面及び内面は黒色。調整は体部内外面とも回転ナデを施す。

土師質土器 2~5は皿で柱状高台をもつ。2は復元口径10.0cm, 器高2.5cm, 底部径4.3cm。胎土は細砂や褐色ブロックを含み, 焼成はやや甘く, 器表面はあれている。色調は淡褐色。内外面とも回転ナデ調整。底部は回転糸切り離し。3は復元口径10.0cm, 器高2.8cm, 底部径3.8cm。胎土は細砂や雲母・褐色ブロックを含み, 焼成はやや甘く, 器表面はあれている。色調は淡褐色。体部内外面とも回転ナデ調整。内面は平滑で若干器表面が荒れているには使用痕か。底部は回転糸切り離し。4は復元底径4.5cm。胎土は細砂や褐色ブロックを含み, 焼成はやや甘く, 器表面の摩滅が著しく調整痕は不明瞭であるが, 体部内外面とも回転ナデ調整か。底部は回転糸切り離し。色調は淡褐色。5は復元口径9.7cm, 器高2.9cm, 底径3.8cm。胎土は細雲母や褐色ブロックを含みきめ細かい。焼成はやや甘く, 器表面の摩滅が著しく調整痕は不明瞭であるが, 体部内外面とも回転ナデ調整か。底部

は回転糸切り離し。色調は淡褐色。6は皿，復元口径10.2cm，器高1.9cm，底部径7.1cm。外底部中央がややくぼむ平底の底部から外上方に若干内湾気味に立ち上がり端部を丸く納める。胎土は細雲母を含みきめ細かい。焼成はやや甘く，色調は淡茶褐色。内外面とも回転ナデを施し，底部は左回転のヘラ切り離し。7は皿，復元口径10.4cm，器高1.7cm，底部径9.1cm。平底の底部から外上方に若干内湾気味に立ち上がり端部を丸く納める。胎土は砂粒を含みやや粗い。焼成はやや甘く，色調は淡赤褐色。内外面とも回転ナデを施し，底部は右回転のヘラ切り離しか。8は高台付椀，口径15.2cm，器高5.1cm，高台径7.9cm。胎土は砂粒や雲母を含む。焼成はやや甘く，色調は暗茶褐色。体部内外面とも回転ナデを施し，高台を貼り付けた後ヨコナデ。高台内部に回転ヘラ切り痕を残す。内外面に灰色の部分があり灯明皿として使用されたものか。9は高台付椀の底部で，復元高台径9.0cm。胎土は砂粒を含まずきめ細かく焼成は甘い。色調は器壁が淡黄白色で断面は灰白色。体部内面は回転ナデの痕跡があるが，高台内部の切り離し痕跡は不明。高台を貼り付けた後ヨコナデ。10は高台付椀の底部で，胎土は細砂粒を多く含み粗い。焼成は甘く摩滅が著しい。色調は淡茶褐色。内外面は回転ナデ，高台を貼り付けた後ヨコナデ。高台内部に回転糸切り痕。11は杯，口径11.5cm，器高3.4cm，底径5.1cm。平底の底部から直線的に外上方に延びる体部をもち，内底面の中央がくぼむ。胎土は褐色ブロックを含みきめ細かい。焼成はやや甘く，



第18図 曾川2号遺跡SK01・P7出土遺物実測図 (1:3)

色調は淡褐色。体部内外面とも回転ナデを施し、底部は回転糸切り離し。12は平底の杯もしくは皿、底径5.5cm。胎土は砂粒をやや含む。焼成は甘く器壁が荒れている。色調は淡灰褐色。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切り離し。内面に部分的にタールが付着している。13は平底の杯の底部。胎土は砂粒・雲母を若干含むがきめ細かい。焼成は甘い。色調は淡灰褐色。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切り離し。14は杯、復元口径11.0cm、器高2.7cm、底径4.9cm。平底の底部から外上方にやや内湾しながら開き気味に延びる体部をもち、胎土は褐色ブロックを含みきめ細かい。焼成は甘く、色調は淡赤褐色。器表面は摩滅して調整はほとんど不明であるが、体部内外面とも回転ナデを施し、底部は回転糸切り離し。15は杯、復元口径11.0cm、器高2.8cm、底径6.0cm。平底の底部から外上方にやや内湾しながら開き気味に延びる体部をもち、胎土は褐色ブロックを含みきめ細かい。焼成不良で器表面が荒れている。色調は器壁が淡褐色で断面は灰白色。体部内外面とも回転ナデを施し、底部は回転糸切り離し。

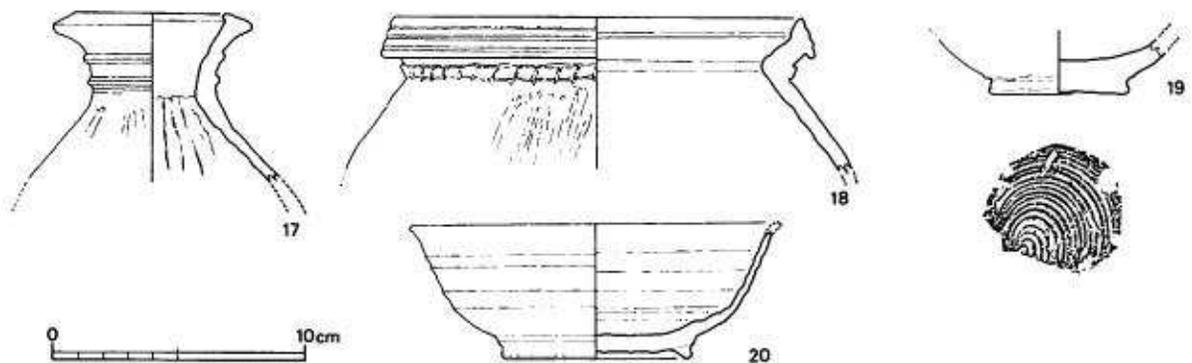
**P 7 (第18図16)**

瓦器 16は和泉型の椀、復元口径15.0cm、器高4.7cm、高台径4.8cm。胎土は若干の砂粒を含み、焼成はやや甘い。色調は内面が淡茶灰色、外面は暗灰色。土壌による汚れで表面のミガキ調整は不明瞭ではあるが、内外にミガキの痕跡が認められる。口縁部内外はヨコナデ、体部内面は平滑にナデ調整しミガキ、体部外面は3段に指頭痕がめぐる。高台は断面台形で貼り付けてヨコナデ。尾上実氏の編年でⅢ-2期、12世紀末～13世紀初頭に比定されている<sup>(42)</sup>。

**調査区 (第19図17～20)**

弥生土器 17は、西側洪水層から出土した壺で復元口径6.0cm。胎土は微砂粒を含み焼成は軟弱、色調は暗赤褐色、口縁部内外面にナデ調整を施す。頸部にシボリ痕。第Ⅲ様式で、中期中葉に属する。18は、洪水層から出土した甕で、復元口径15.8cm。胎土は微砂粒を含むが精良、焼成は堅緻、色調は淡赤褐色である。口縁部内外面にナデ調整を施す。口縁外面に3本の凹線を施し、頸部にキザミ目凸帯を施す。第Ⅳ様式で、中期後半に属する。

須恵器 19は、調査区から出土した椀の底部である。胎土は細砂を多く含み、焼成は良、色調は淡灰色。底部には回転糸切りの痕跡が残る。体部内外面とも回転ナデ調整。20は、調査区から出土した椀で口縁端部を欠くが、復元口径15.0cm、復元高5.3cm、復元底径7.7cm。胎土は砂粒をや



第19図 曾川2号遺跡調査区出土遺物実測図 (1:3)

や含み精緻。焼成は堅緻で色調は灰色。体部内外面ともに回転ナデ調整。椀の立ち上がりは丸みを持ち、口縁部を外方に屈曲させる。円盤状に作り出した底部の周囲に高台を貼り付ける。ともに10世紀代に属し、全体の形状からその後半に位置付けられよう。

(註) 尾上 実「南河内の瓦器椀」『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』藤沢一夫先生古稀記念論集刊行会  
1983年

### 3 まとめ

曾川2号遺跡では、12世紀前後の土坑や掘立柱建物跡、柱穴群を検出した。

遺跡は江国川が流れる谷筋に立地している。遺跡の地盤の下層には砂礫が全面に広がっていることが確認され、かつては江国川の氾濫原であったことが推定される。地盤が安定した状況のなかで集落が営まれたが、遺構面を削った洪水痕跡があり、引き続いて洪水を受けやすい場所であり、また遺構・遺物ともに少ないことから、長期にわたって存続したとは考えにくい。

柱穴は多く検出したが、建物跡が想定できたのは1棟のみである。建物跡からの出土遺物は土師質土器の小片であり、時期は特定できなかった。

出土遺物の中で、備後地域では初見の柱状高台付皿について若干記述し、遺跡の年代決定のめやすとしたい。

柱状高台とは、台になる中実の下部と受部になる皿あるいは杯の上部で構成され、古代末から中世にかけて出土する土器である。分類や分布・変遷等について八峠興氏の論考がある<sup>(1)</sup>。全国的にみれば、東北・北陸・甲信・中国(山陰)で多く出土しており、近畿地方では伊勢・伊賀・摂津・播磨といった周辺地域での出土はあるが、畿内中心部にはない。中国地方でも因幡・伯耆・出雲・隠岐・石見・周防・長門・安芸で出土しているが、山陽地域での分布が希薄で、備後では初見である。広島県内では今まで2遺跡で報告されている。山県郡北広島町大朝の富士神社南<sup>(2)</sup>(鶉原遺跡<sup>(3)</sup>)と同町有田の須倉遺跡<sup>(4)</sup>である。

柱状高台皿について八峠氏は次のように分類している。

I類 器高が低く、台部は円盤高台状で低い。

I A類 接地面からそのまま開くもの。または円柱状の高台をもつもの。

I B類 接地面から内傾して立ち上がるもの。円盤状の高台と称されるものを含む。

I C類 高台の端部を面取りするもの。

II類 器高がやや高く、台部は外に張り出す。

II A類 台部が円柱状で垂直方向にたちあがるもの

II B類 台部が接地面から内傾して立ち上がるもの。

II C類 台部の端部が一段高くなるもの。

III類 器高が概ね口径と同じくらいかそれより高いもの。意識して器高を高くしたもの

III A類 台部が円柱状で垂直方向にたちあがるもの

Ⅱ B類 台部が接地面から内傾して立ち上がるもの。

Ⅱ C類 台の端部が一段高く、装飾的なもの

当遺跡出土例はⅡ B類、富士神社南出土例は大半が底部のみで全形が不明であるがⅡ A・Ⅱ B類、須倉遺跡はⅡ A類に相当すると思われる。ただし、富士神社南も須倉遺跡も底部に焼成前穿孔がされており、当遺跡出土例とは異なる。

柱状高台の使用方法を八峠氏は次のように想定している。①灯明皿または蜜蝋立て、②儀式のための主たる器、③灯明・儀式などの補助的な器の3種類である。①については灯明皿やその台とすれば少量でも油煙痕がつくと考えられるが、油煙痕をもつ柱状高台が多数を占めるという例はないとされている。②は出雲大社で宇豆柱の直下で鉄製手斧とともに柱状高台の柱部が、柱の直上からも柱状高台の柱部が出土した例がひかれ、柱を建てる際の儀式に使用された可能性を考えている。③では小皿を載せる器台として使用されたというもので平泉では小皿とともに柱状高台が出土する例がある。いずれにしても日常の器というよりも、何らかの宗教または儀礼のため、主または補助的に使用されたととらえている。

富士宮神社南や須倉遺跡のように底部穿孔のものについては①の用途も考えられる。

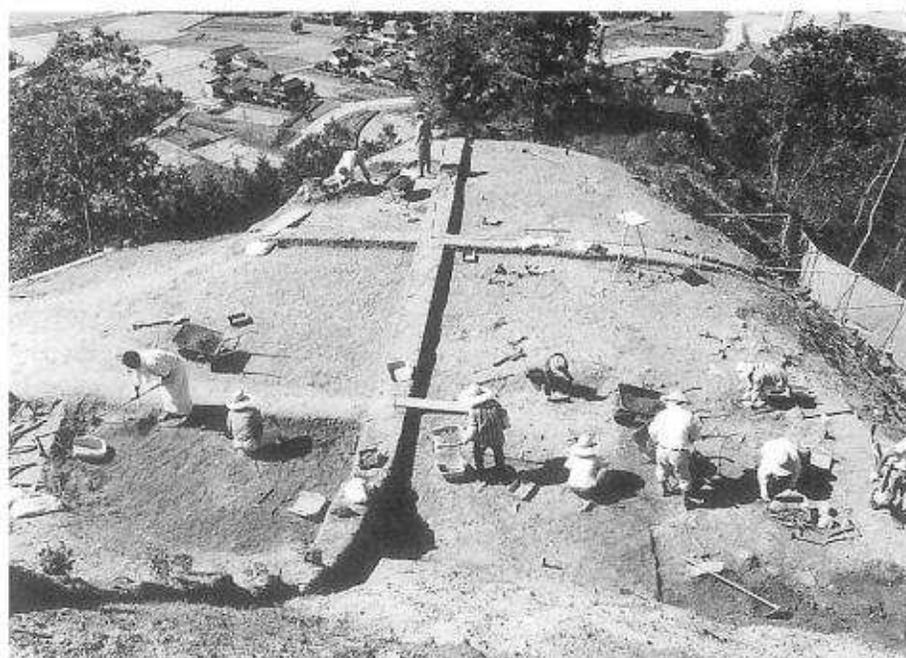
当遺跡では、柱状高台は土坑（SK01）のなかに礫や黒色土器の高台付椀、土師質土器の高台付椀・平底の皿・平底の杯とともに入れられていた。柱状高台の皿の内面中央に摩滅した痕跡が確認できる。これは柱状高台の皿を托（台）としてその上に平底の杯を載せた可能性を示唆しているのではないかと考えられる。③の用途が考えられる。そしてそれはSK01の性格にも繋がるであろう。つまり、柱状高台皿を使用した何らかの祭祀あるいは儀礼が行われた後、一括して廃棄した土坑と想定できるのではないだろうか。

柱状高台の年代として八峠氏はⅠ A類を中心とした成立期を11世紀、Ⅱ B類を中心とした展開期を11世紀末から12世紀、上部が皿状から杯（椀）状になる転換期を12世紀末から13世紀前半、この後衰退すると予想している。当遺跡の柱状高台の年代は12世紀前後と思われる。

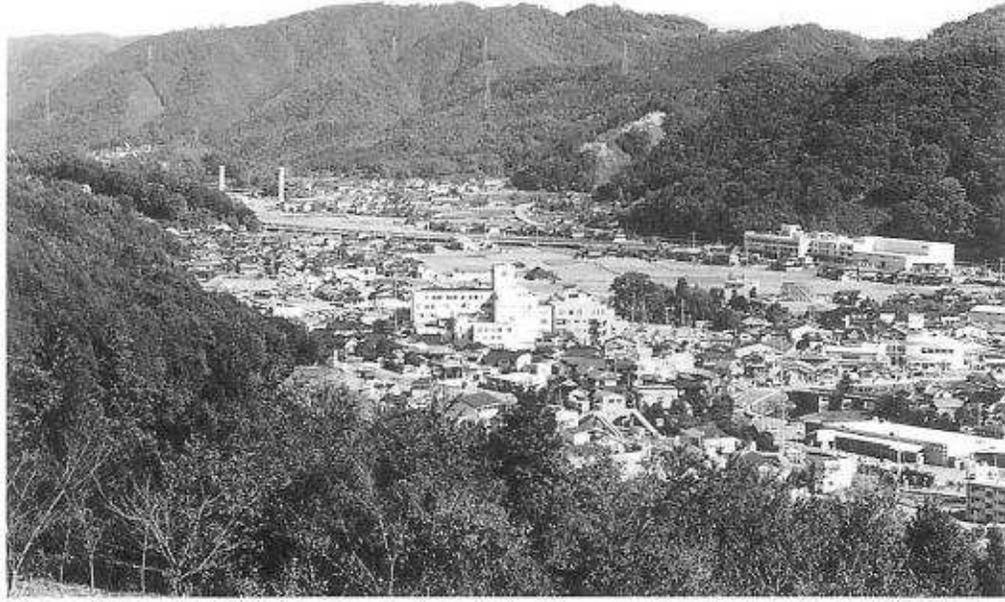
（註）

- （1）八峠 興「柱状高台考」『中世土器研究論集』—中世土器研究会20周年記念論集— 中世土器研究会 2001年
- （2）潮見 浩「大朝町・千代田町の遺跡・遺物」『龍岩・古保利埋蔵文化財発掘調査報告書』 龍岩・古保利埋蔵文化財発掘調査団 1976年
- （3）『大朝町史』上巻 大朝町 1978年
- （4）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 「須倉遺跡出土の土師質土器」『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅲ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第161集 1998年

# 圖 版



a 牛の皮城跡遠景  
(西から)



b 同上  
(北西から)



c 同上  
(北北西から)



a 1 郭調査前  
(北西から)

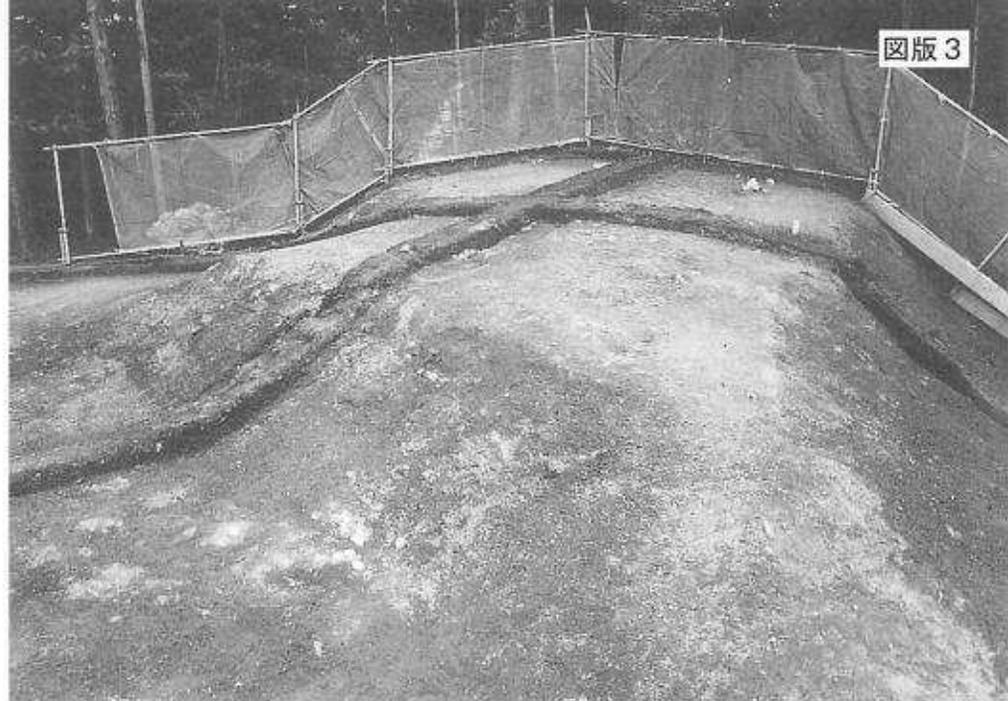


b 2 郭調査前  
(南西から)



c 3 郭調査前  
(南東から)

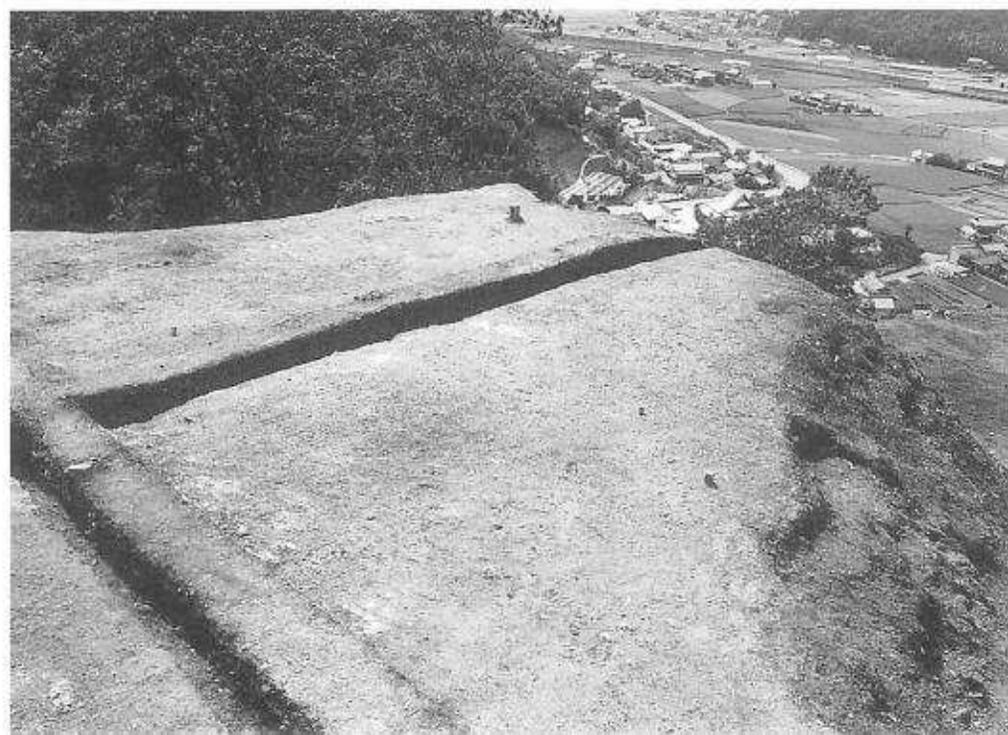




a 1郭調査後  
(北西から)

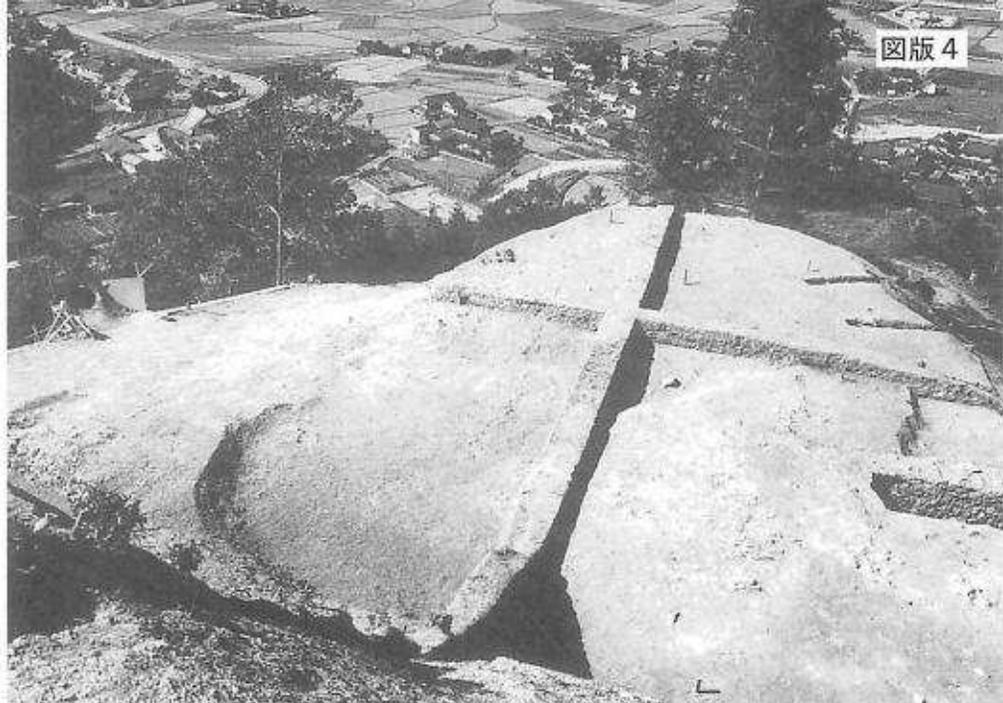


b 1-2郭調査後  
(東から)

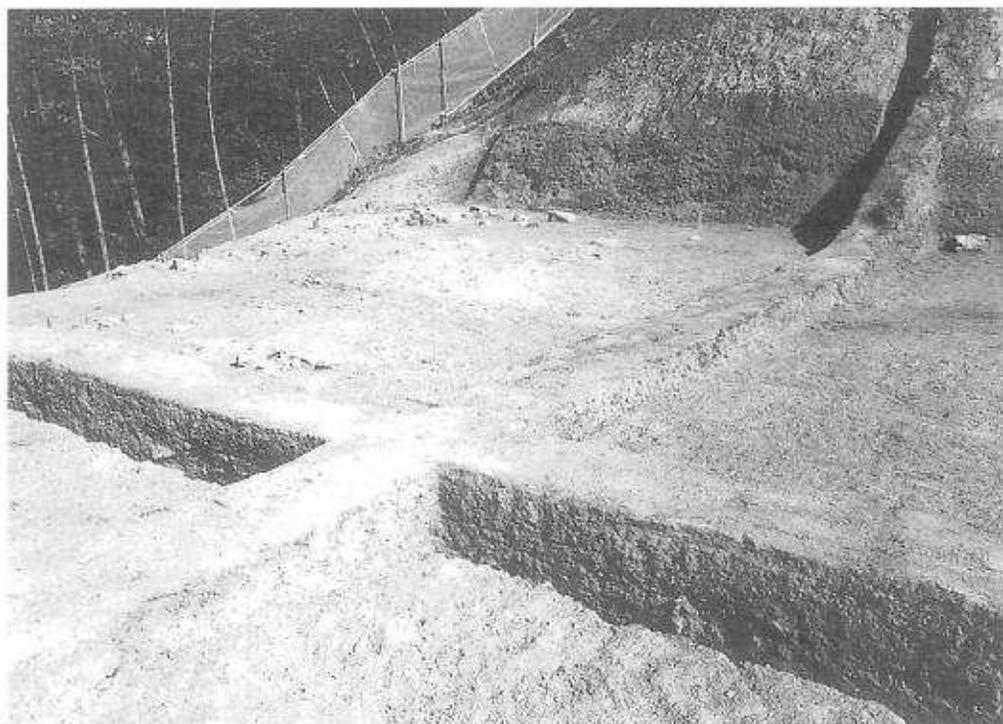


c 2郭調査後  
(南東から)

a 3郭調査後  
(東から)



b 2郭切岸  
(北西から)



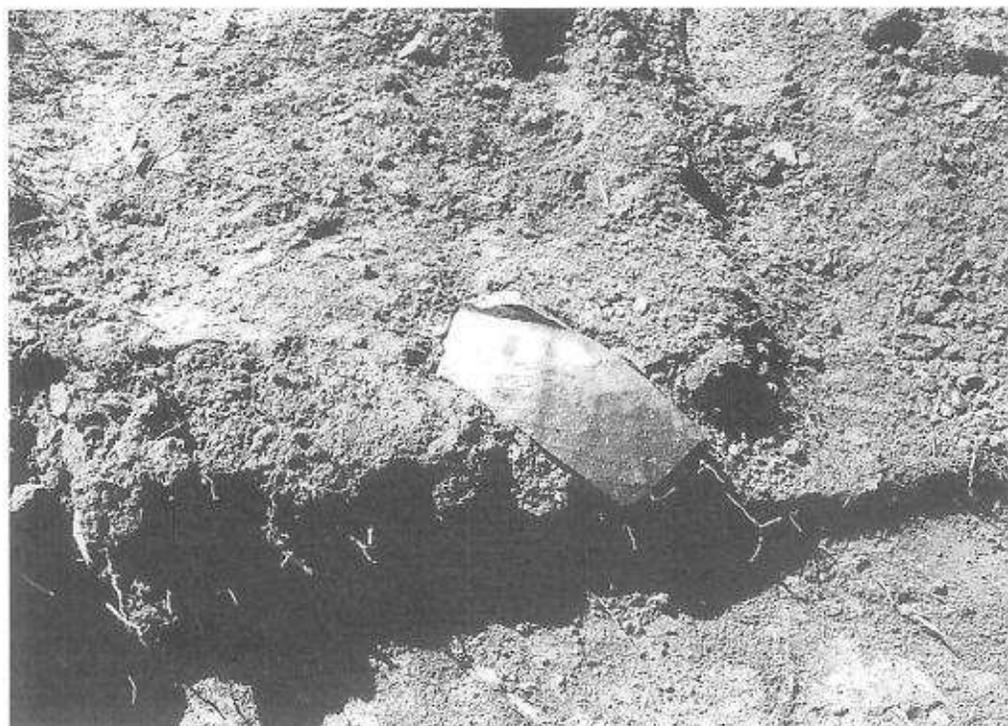
c 3郭切岸  
(北西から)



a 2郭土錘出土状況  
(北から)



b 2郭備前焼破片出土状況  
(北から)



c 2郭鉄釘出土状況  
(北から)



a 2郭通路状遺構  
(北から)



b 土塁検出状況  
(北から)



c 遺跡見学会



a 畝状整堀群全景  
(西から)



b 畝状整堀群全景  
(東上空から)



c 整堀 3～7 調査後  
(東から)





a 塹堀7～9調査後  
(北東から)



b 塹堀と横堀  
(東から)



c 塹堀3堀底状況  
(南西から)



a 横堀土層堆積状況 (南から)



b 竪堀2土層堆積状況 (北西から)



c 竪堀3土層堆積状況 (北西から)



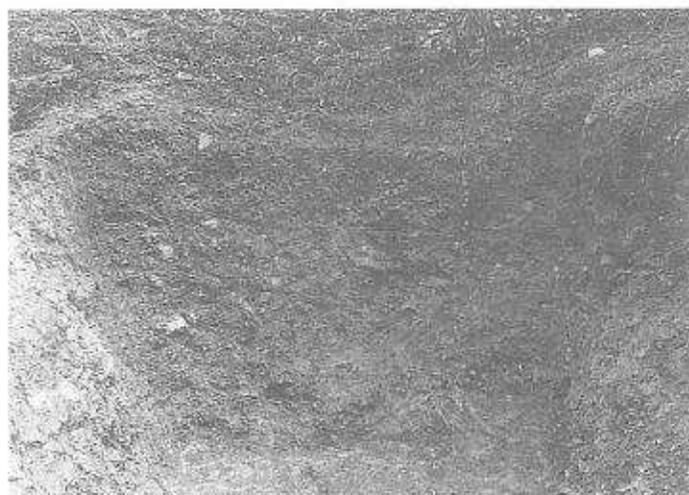
d 竪堀4土層堆積状況 (北西から)



e 竪堀5土層堆積状況 (北西から)



f 竪堀6土層堆積状況 (北西から)



g 竪堀7土層堆積状況 (北西から)



h 竪堀8土層堆積状況 (北西から)



a 塹堀5調査後  
(北西から)



b 調査風景  
(南から)



c 同上  
(南から)

a 西壑堀近景  
(北西から)



b 西壑堀調査前  
(南西から)

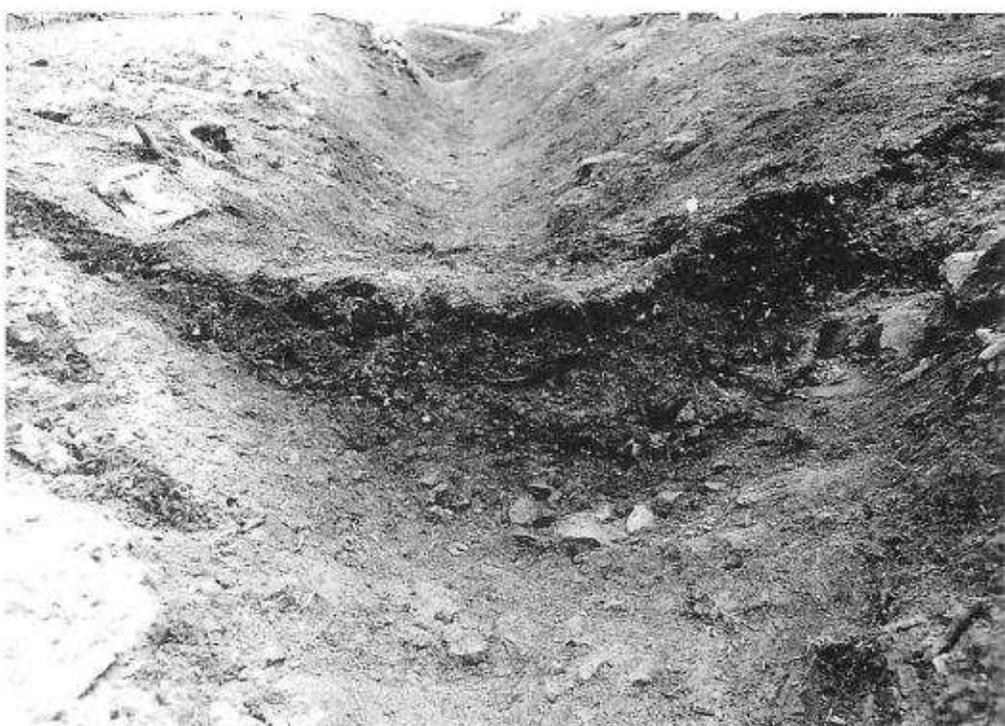


c 同上調査後  
(南東から)





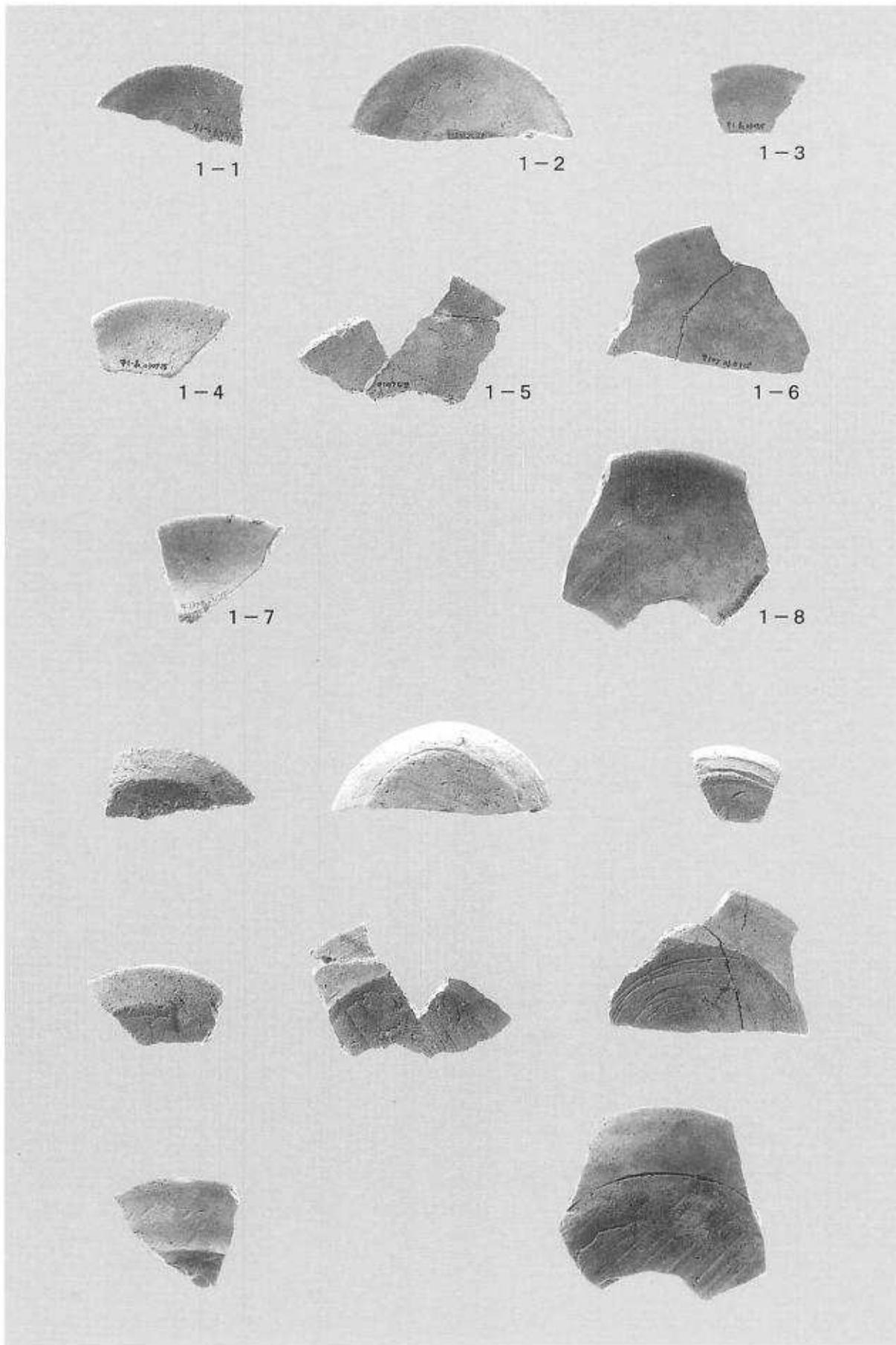
a 西壑堀土層堆積状況  
(北西から)



b 同上  
(南西から)

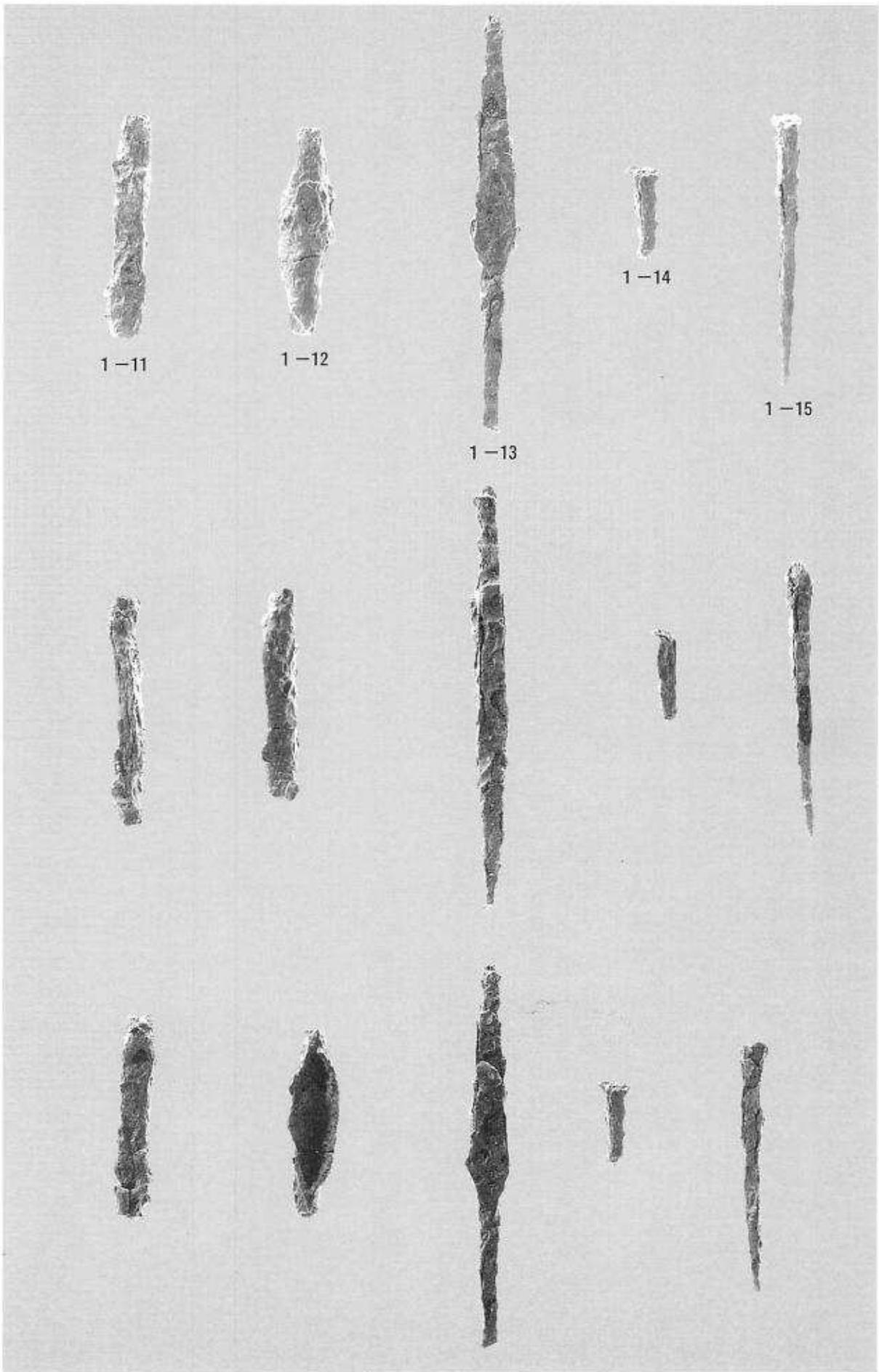


c 牛の皮城跡近景  
(北北西から)

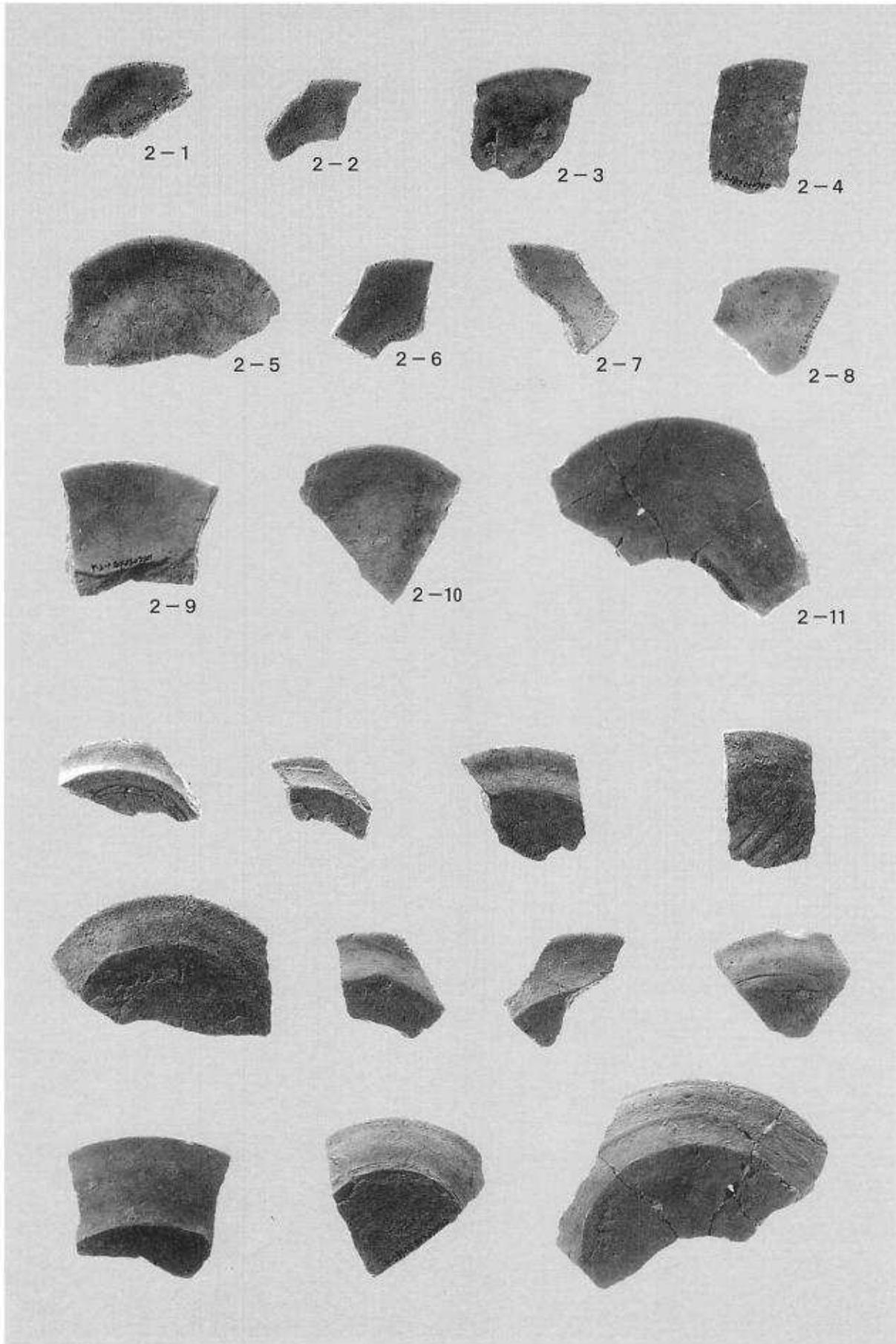


1 郭出土遺物（土師質土器）

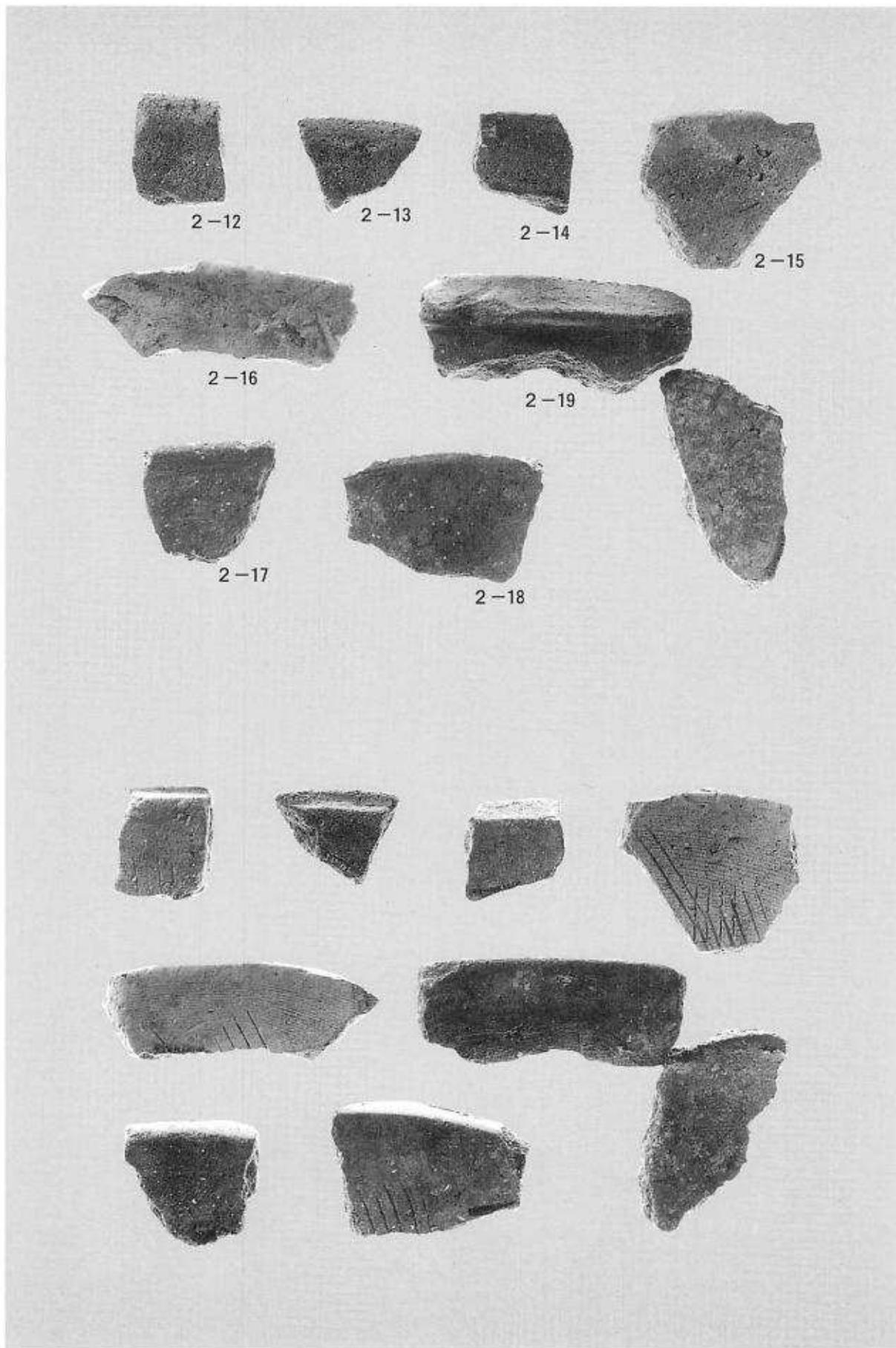
（上：内面，下：外面）



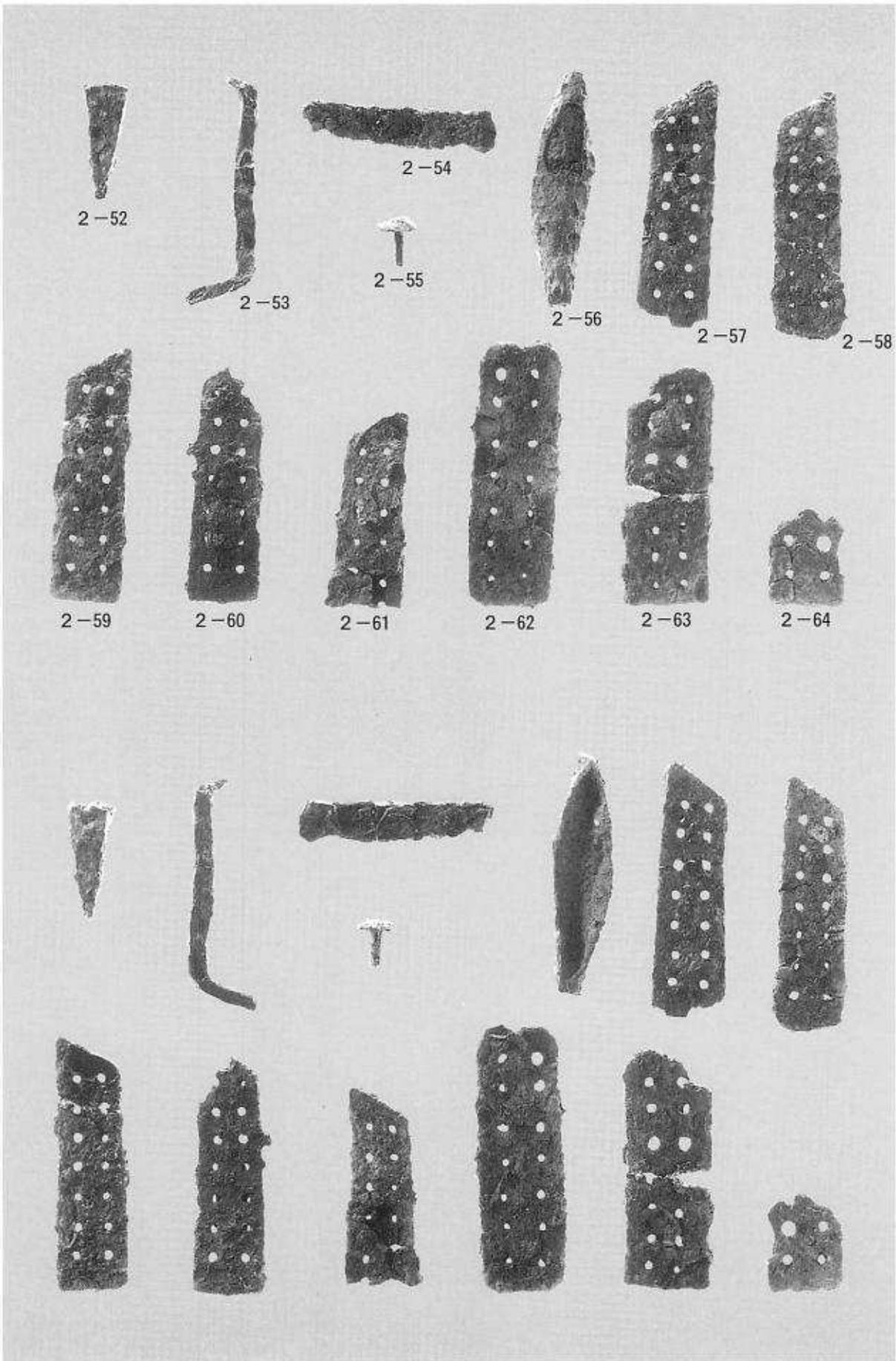
1 郭出土遺物（鉄製品）



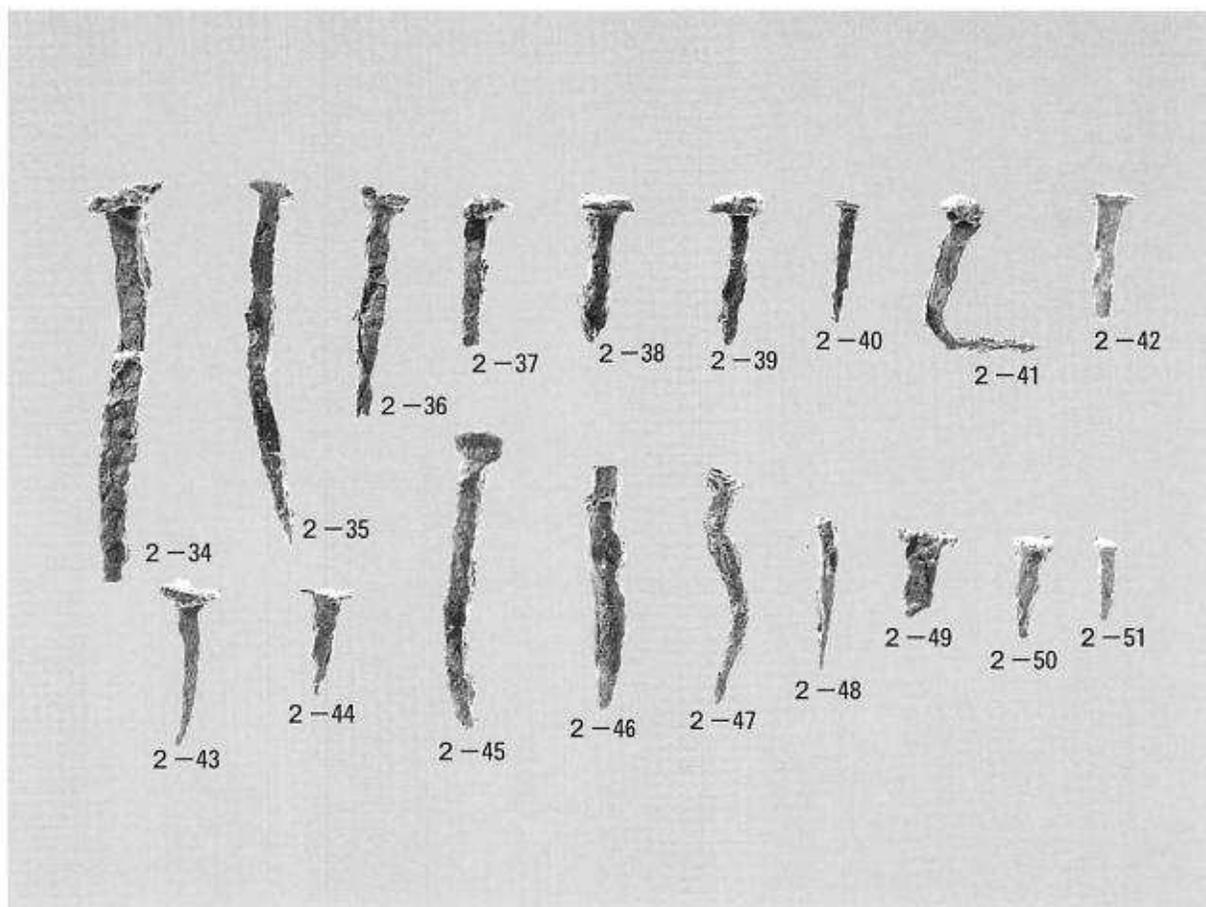
2郭出土遺物（土師質土器）  
（上：内面，下：外面）



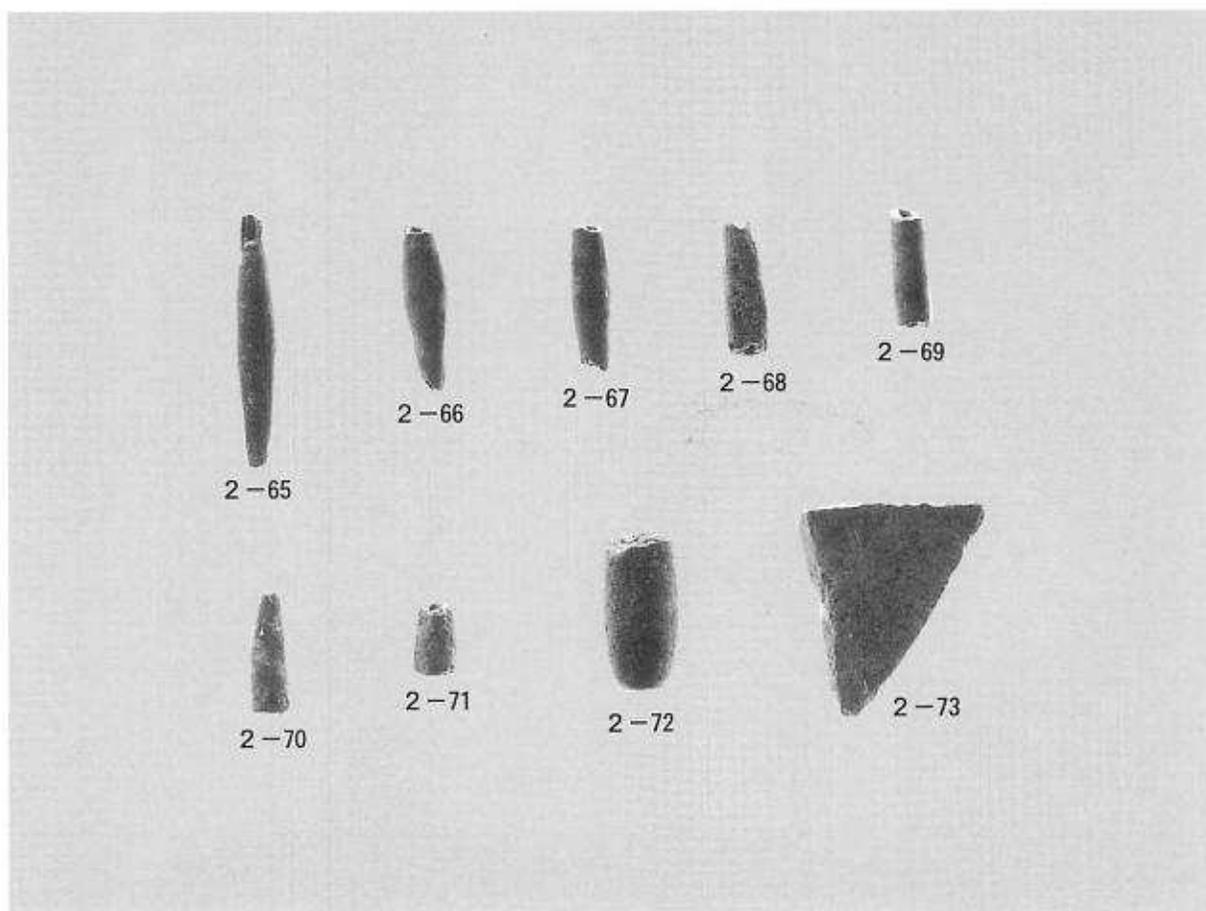
2郭出土遺物（すり鉢等）  
（上：外面，下：内面）



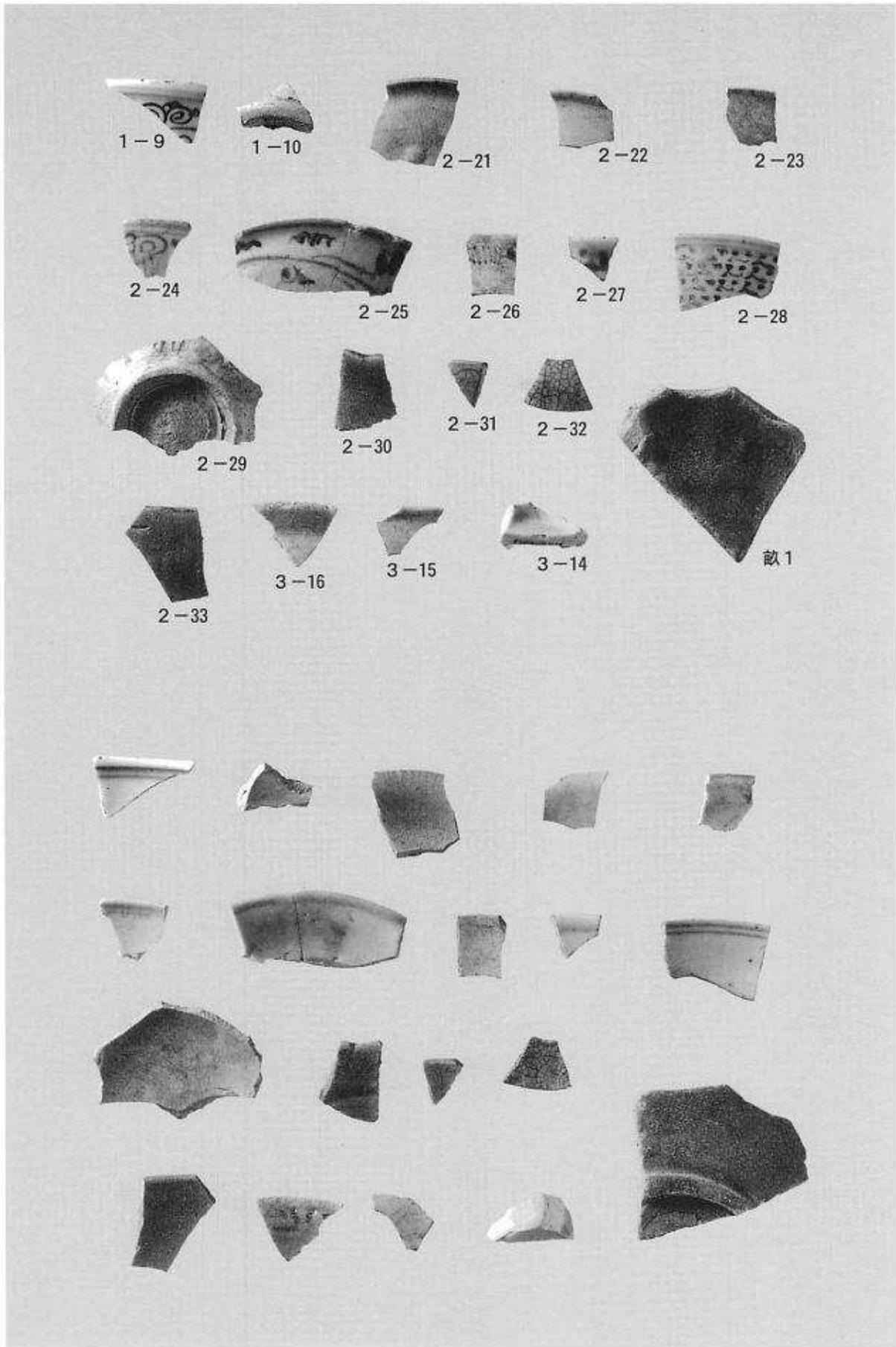
2 郭出土遺物 (金属製品 1)



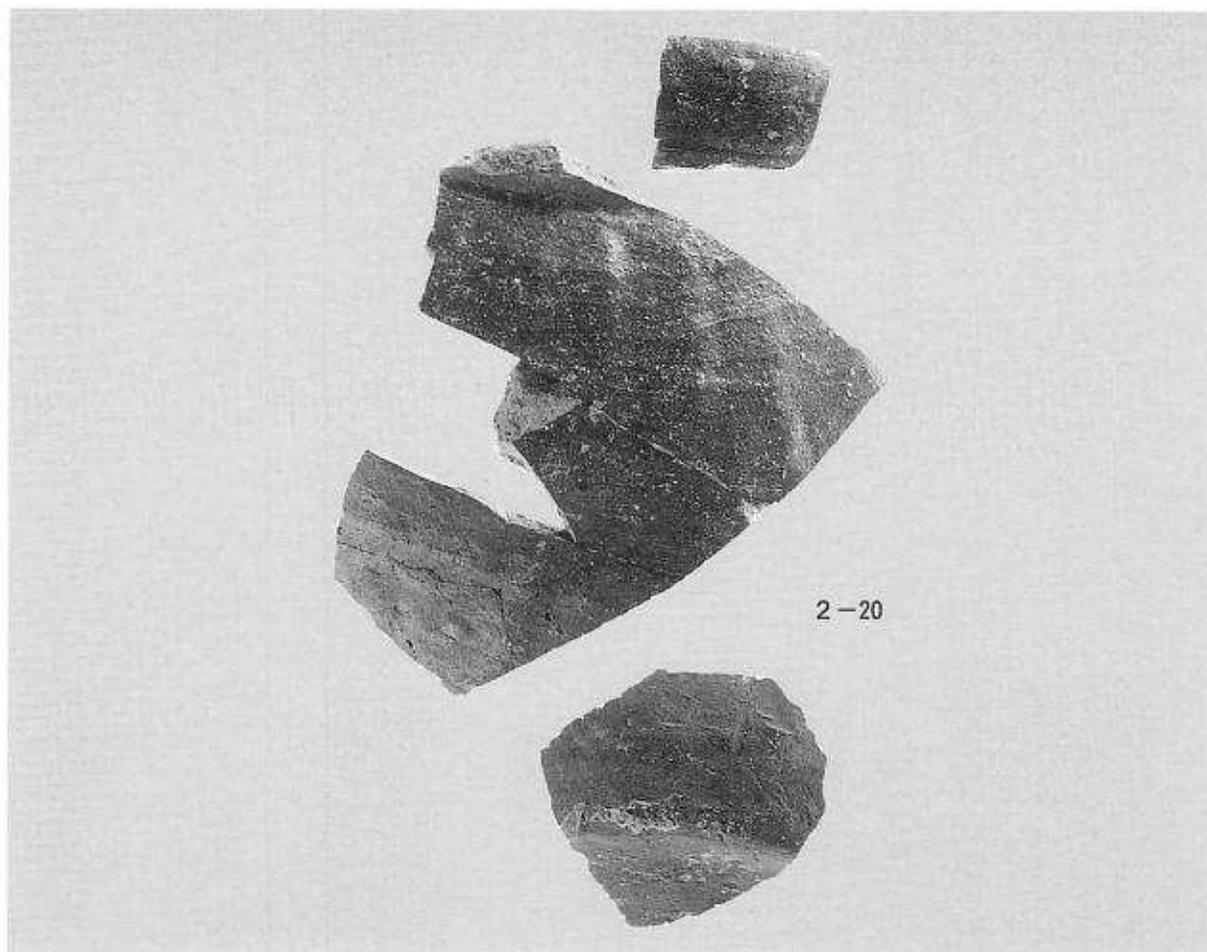
a 2郭出土遺物（金属製品2）



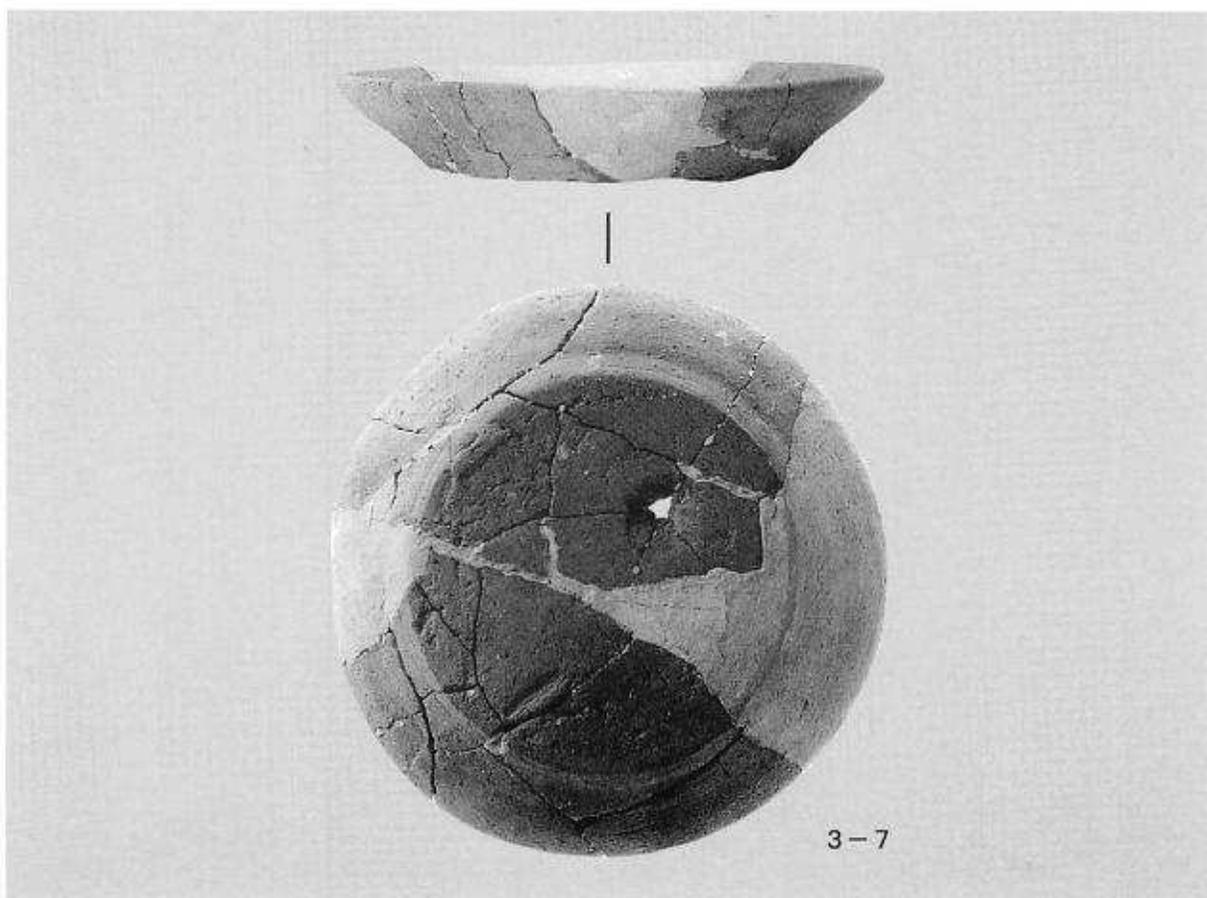
b 2郭出土遺物（土製品・石製品）



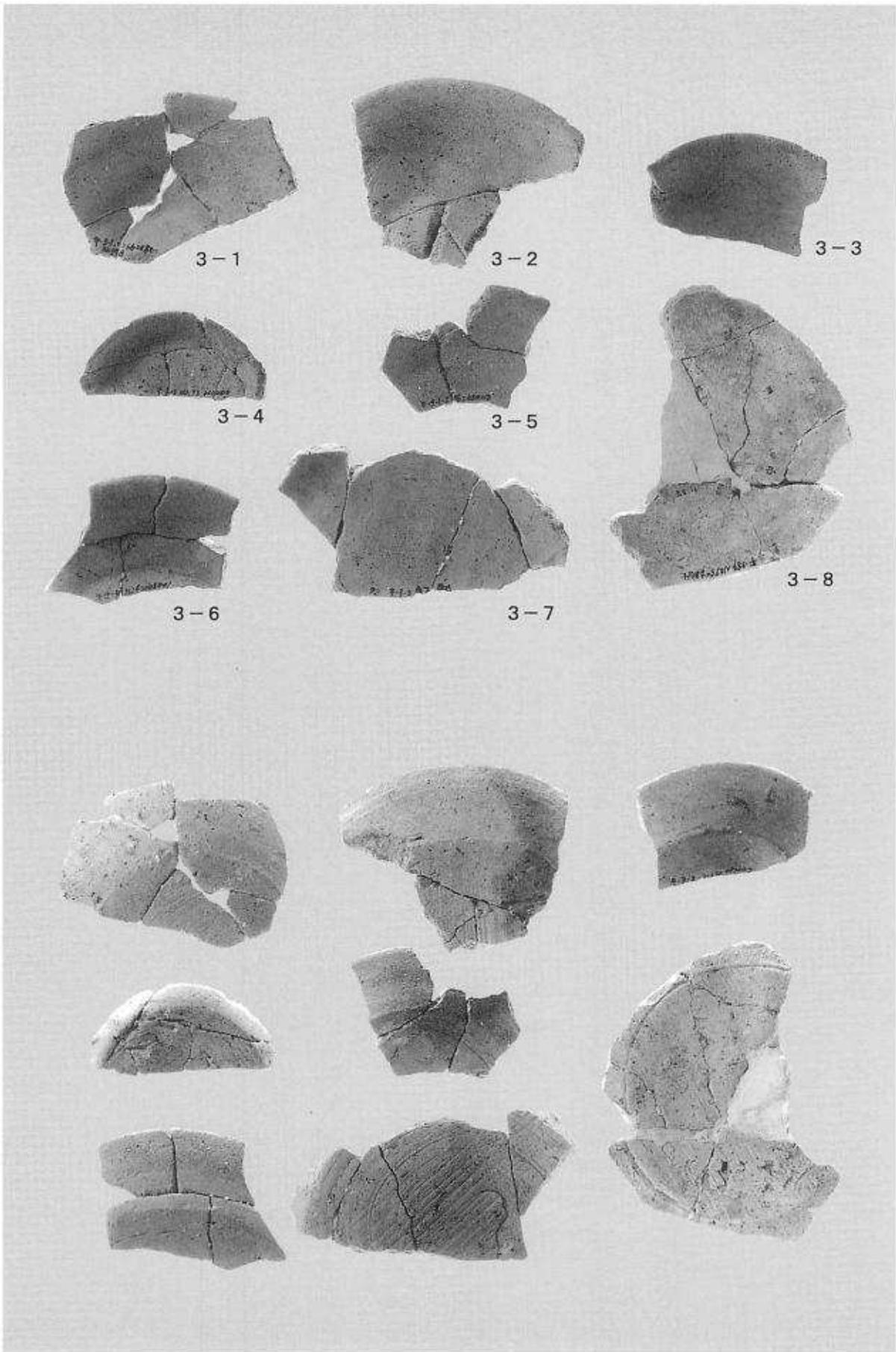
1～3郭・畝状竪堀群出土遺物（輸入磁器等）



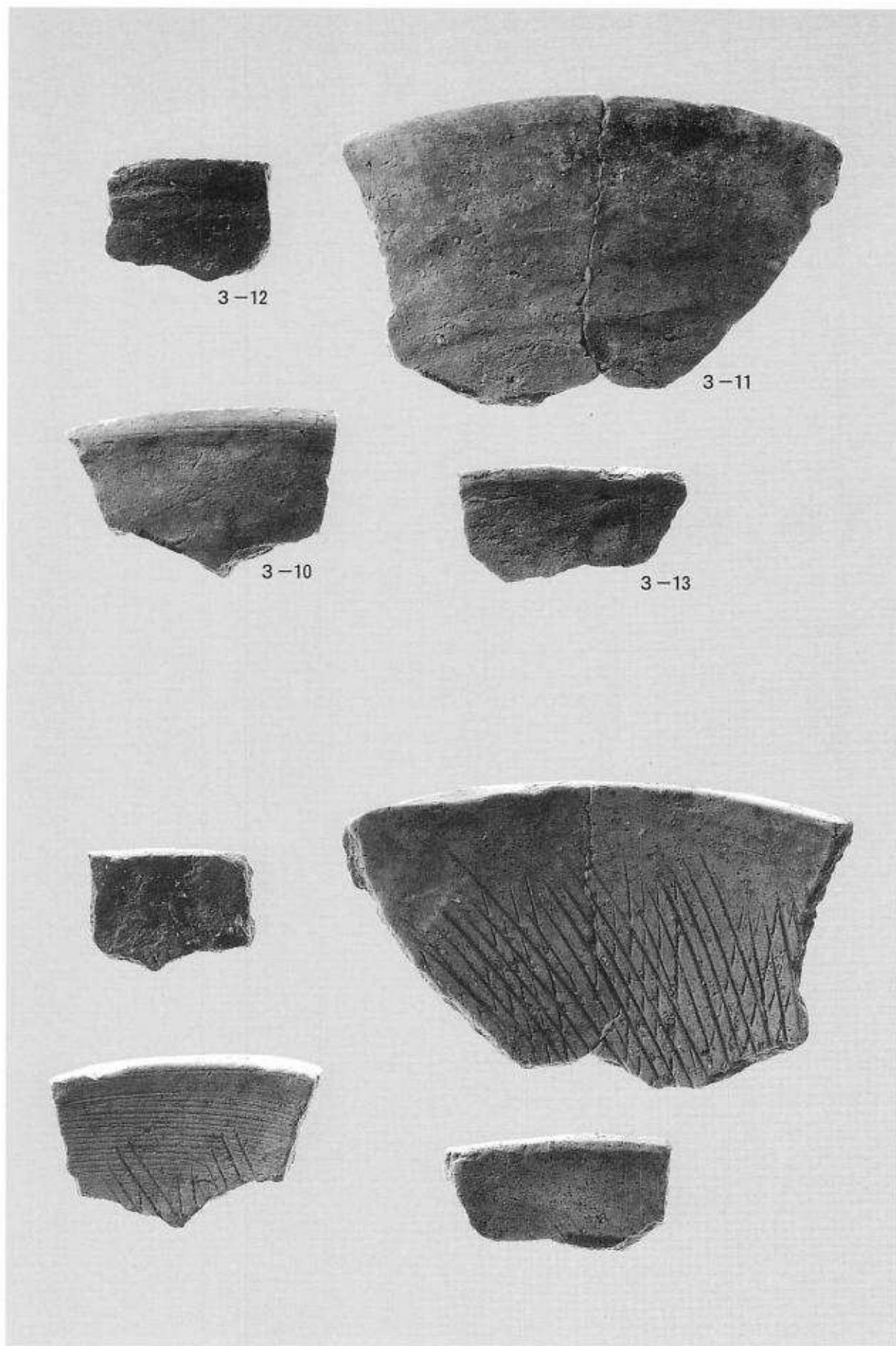
a 2・3郭出土遺物（国産陶器）



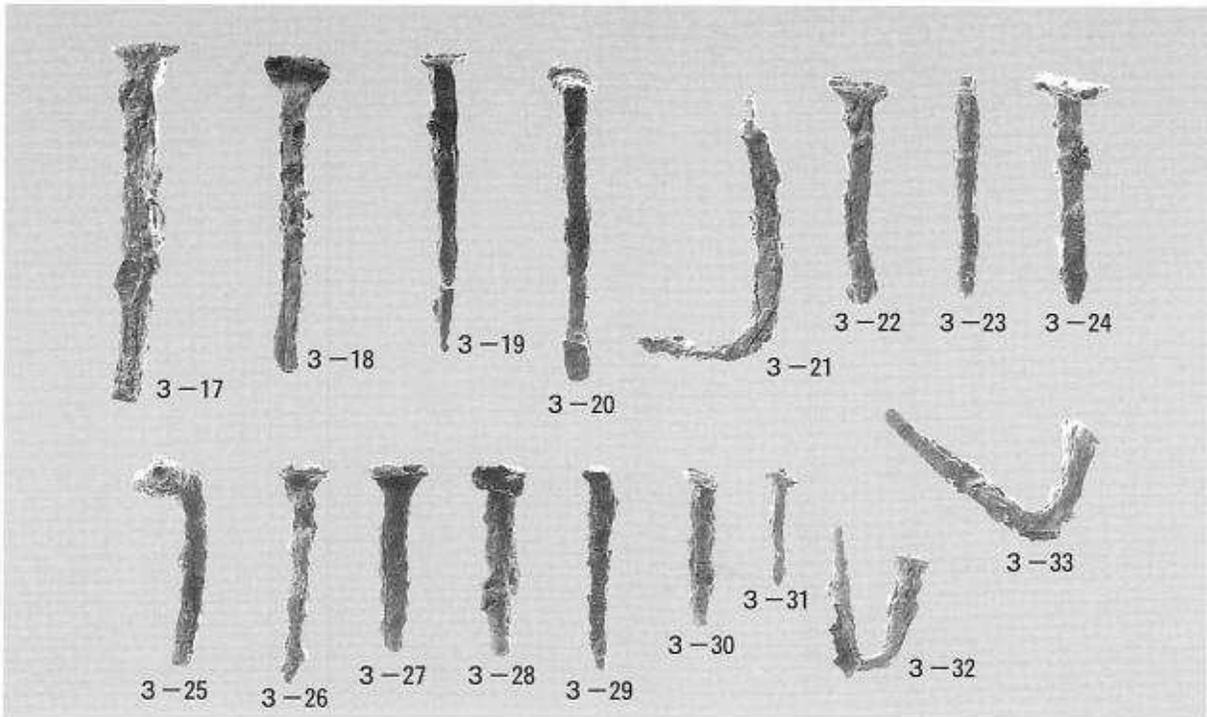
b 3郭出土遺物（土師質土器1）



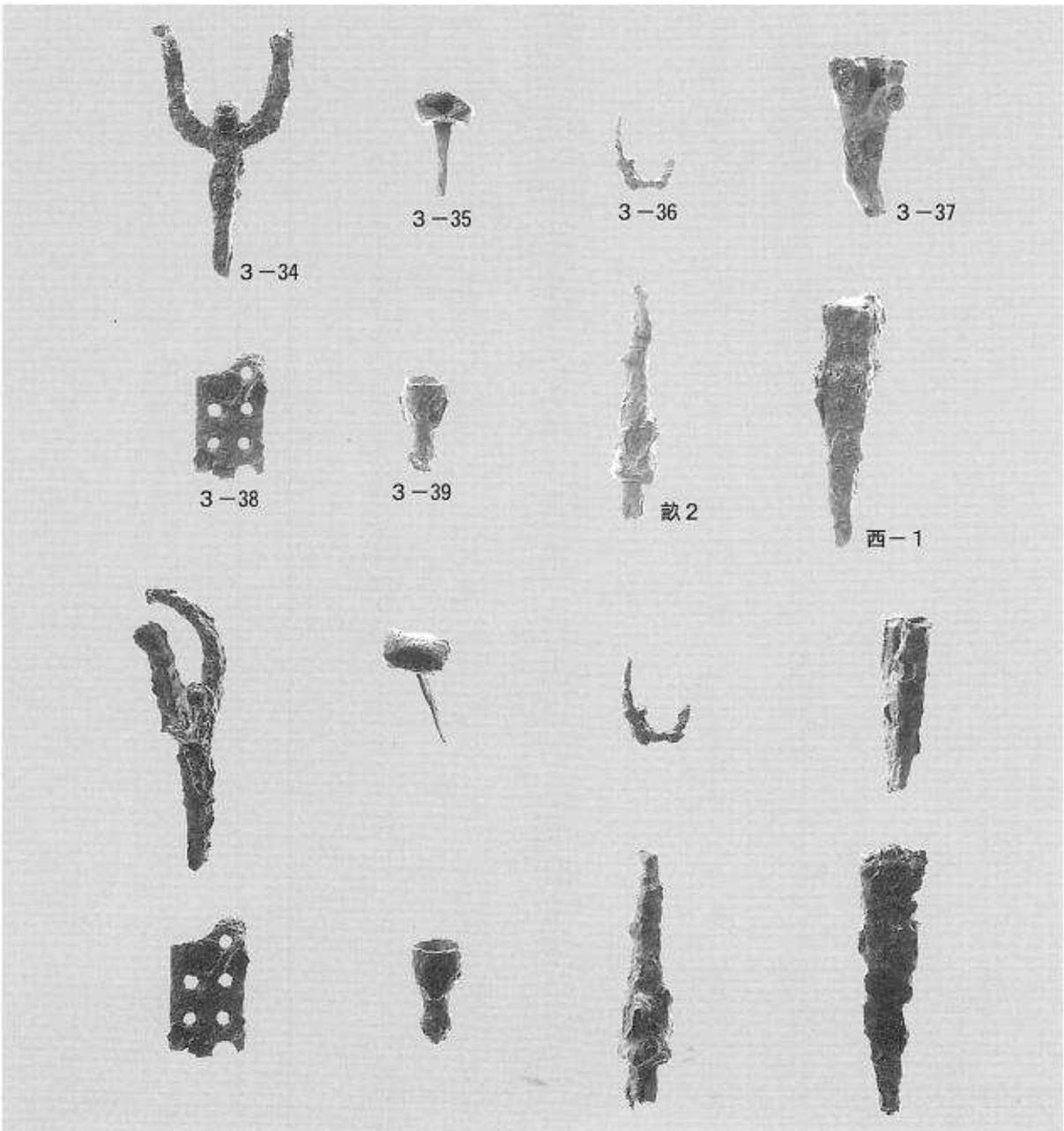
3郭出土遺物（土師質土器2）  
（上：内面，下：外面）



3 郭出土遺物 (すり鉢等)  
(上：外面、下：内面)



a 3郭出土遺物 (鉄製品)



b 3郭・畝状堅堀群・西堅堀出土遺物

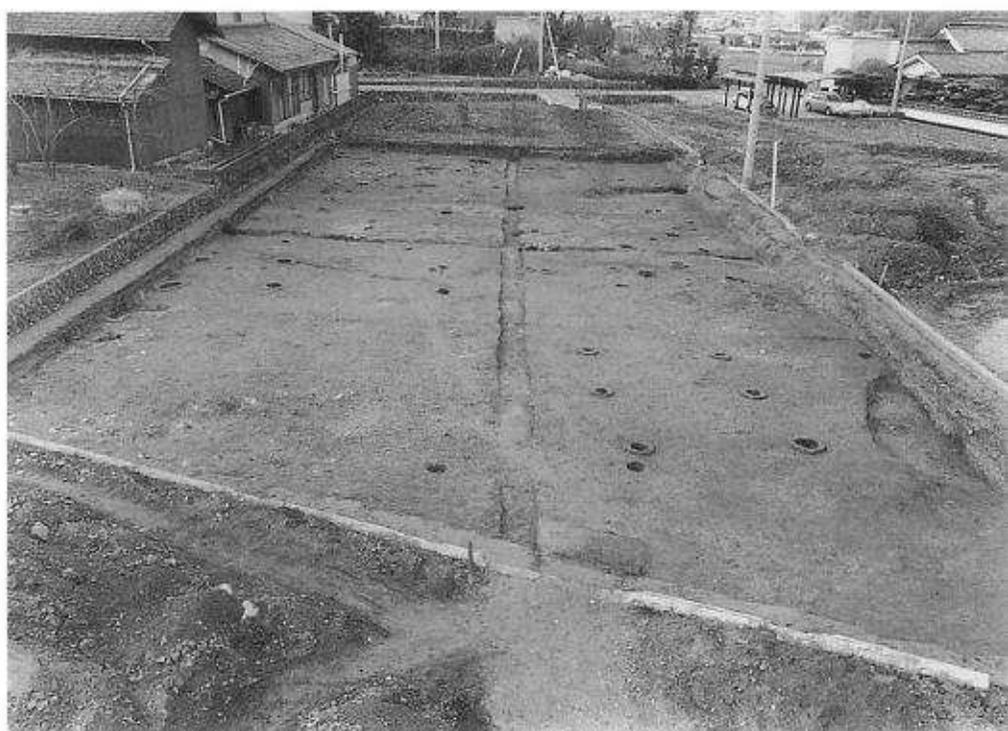
a 曾川2号遺跡調査前遠景  
(南東から)



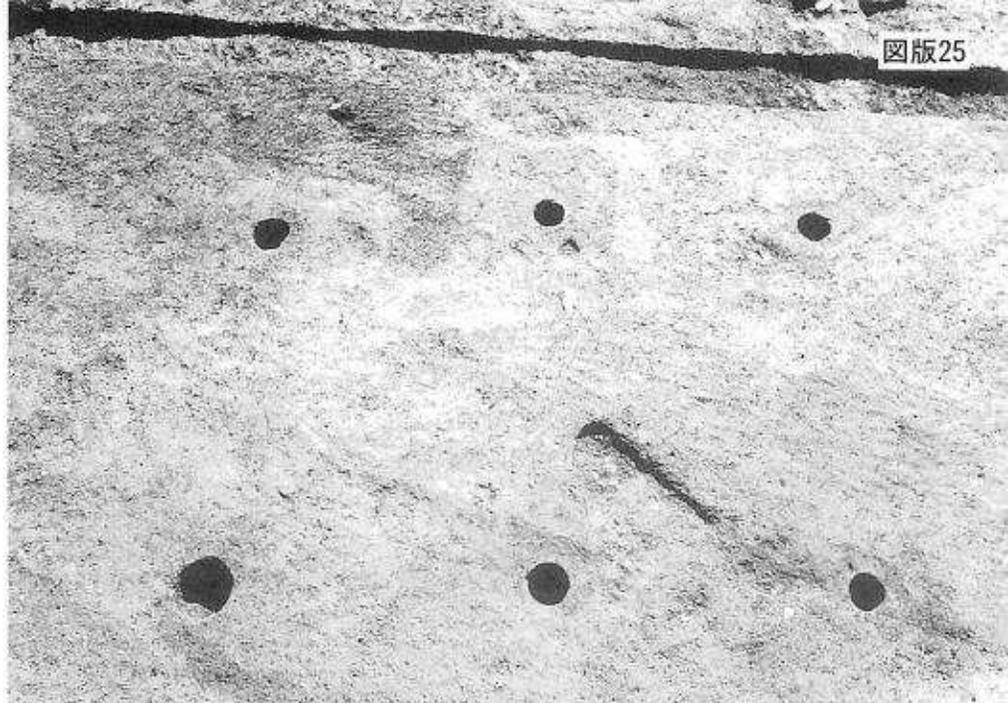
b 調査後遠景  
(南東から)



c 調査区全景  
(東から)



a SB01調査後  
(北から)



b 調査区南端壁面  
(北西から)

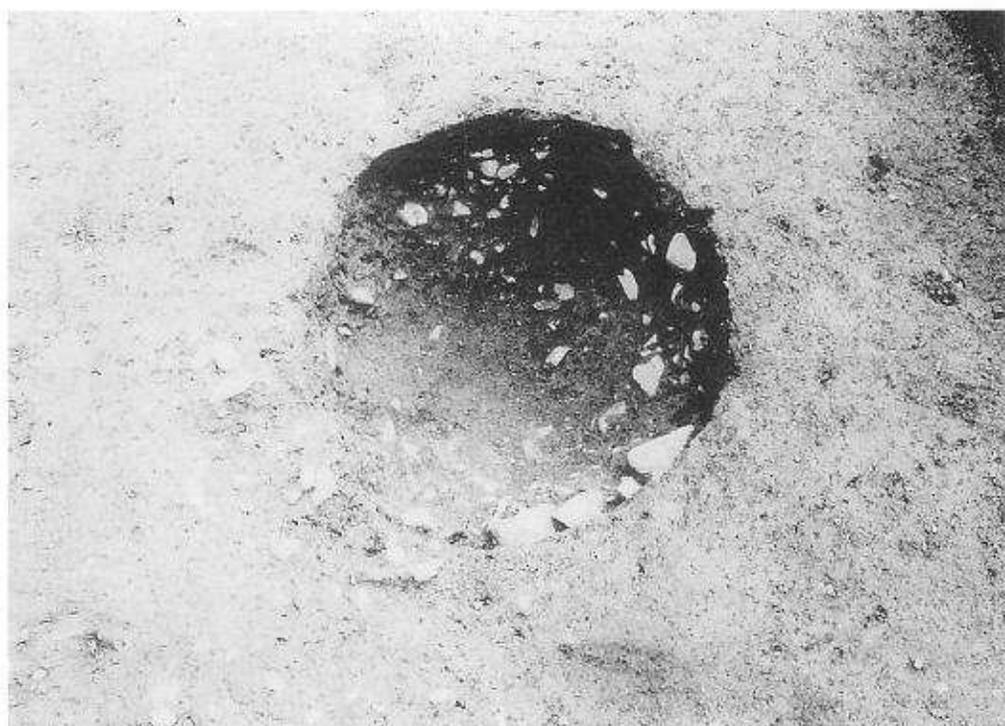


c P7検出状況  
(南から)





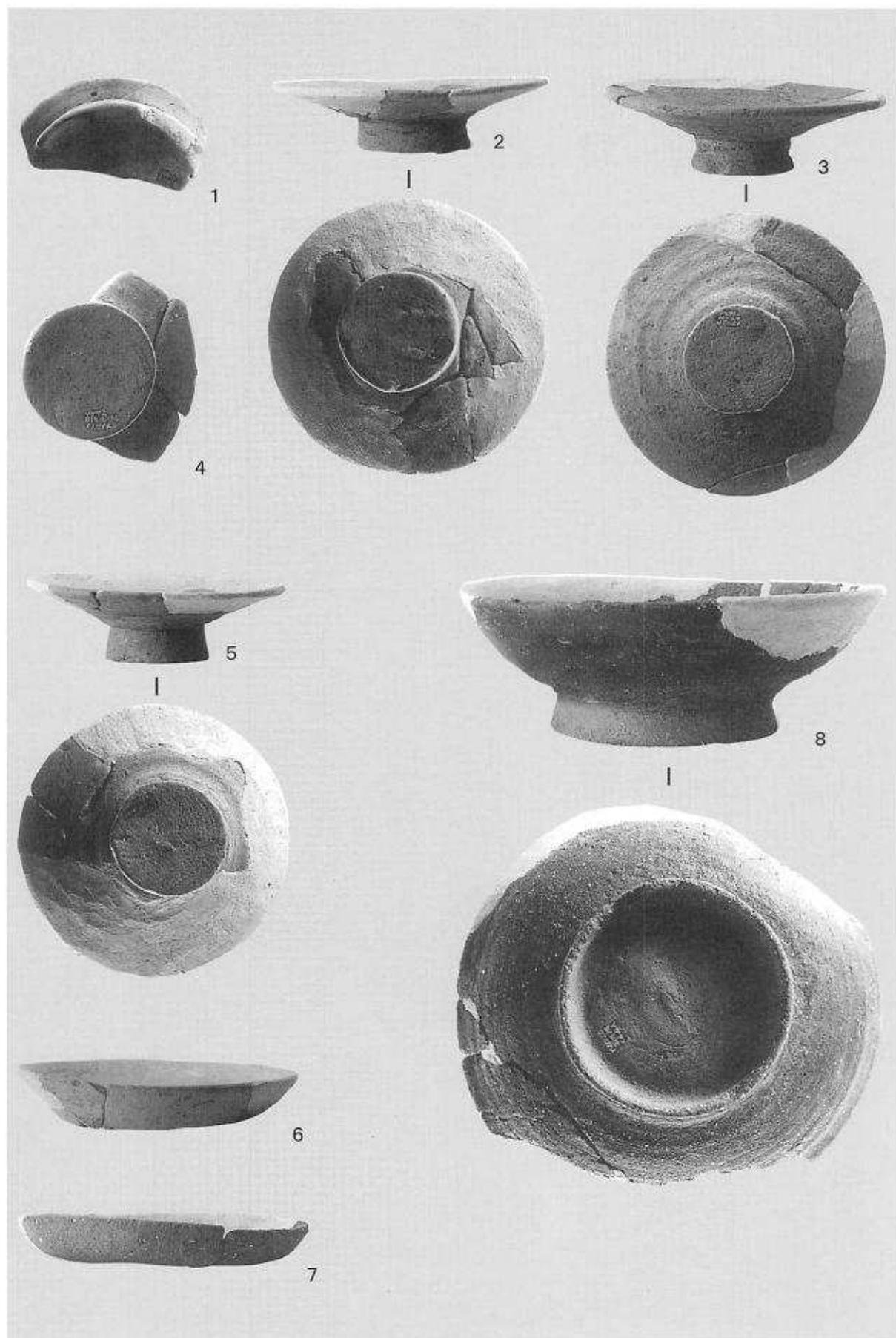
a SK01 検出状況  
(北東から)



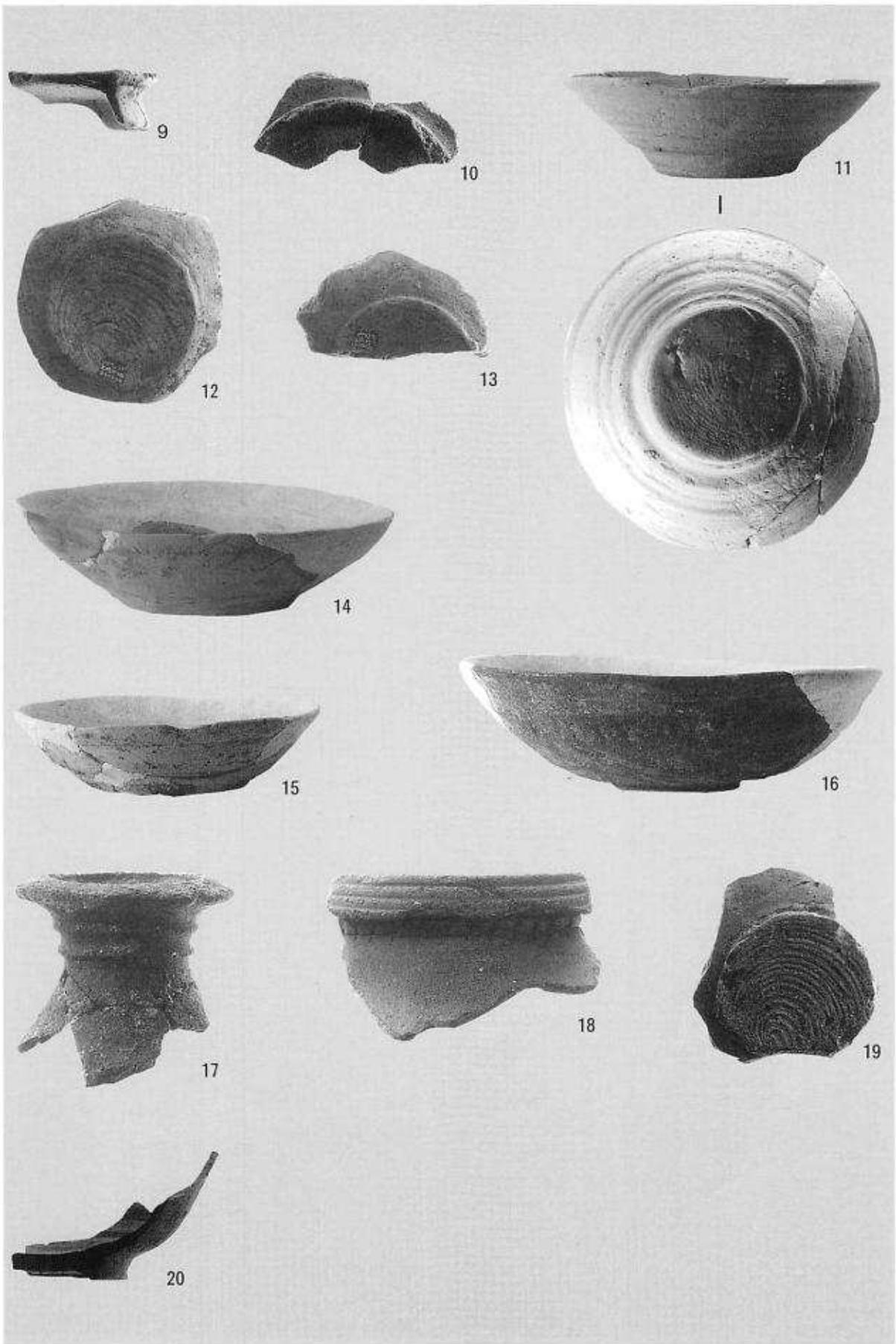
b SK01 調査後  
(北から)



c 調査区土器出土状況  
(北西から)



曾川2号遺跡出土遺物 1



曾川2号遺跡出土遺物2

## 報告書抄録

ふりがな	うしのかわじょうあと・そがわにごういせき							
書名	牛の皮城跡・曾川2号遺跡							
副書名	中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)							
巻次	1							
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第12集							
編著者名	青山 透・古瀬裕子							
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室							
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号 TEL082-295-5751							
発行年月日	西暦2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
うしのかわじょうあと 牛の皮城跡	ひろしまけん 広島県 おののち 尾道市 おんまち 御調町 おんまち 大町	34441	113	34° 31' 13"	133° 09' 57"	20030120 ～ 20030314	1,500	中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う事前調査
						20030707 ～ 20031128	2,460	
そがわにごういせき 曾川2号遺跡	ひろしまけん 広島県 おののち 尾道市 おんまち 御調町 おんまち 大町		151	34° 31' 15"	133° 09' 47"	20030120 ～ 20030307	530	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
牛の皮城跡	城跡	戦国時代 (中世末期)	郭・畝状堅堀群・堅堀	土師質土器皿、すり鉢 備前焼・輸入磁器・鉄 釘・小札・土鏝等		畝状堅堀群14箇所 中9箇所を全面調査		
曾川2号遺跡	集落跡	古代～中世	掘立柱建物跡 祭祀関連土坑?	土師質土器		柱状高台皿出土		

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第12集

**牛の皮城跡・曾川2号遺跡**

中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

発行日 平成17(2005)年3月31日  
編 集 財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室  
〒733-0036広島市西区観音新町四丁目8番49号  
電話 (082) 295-5751 Fax (082) 291-3951  
ホームページ <<http://hmaibun.d-net.co.jp>>  
発 行 財団法人広島県教育事業団  
〒730-0011広島市中区基町4番1号  
電話 (082) 228-8451 Fax (082) 228-8441  
印刷所 鯉城印刷株式会社